空想大好き具現士様！！

ドM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空想大好き具現士様！！

【Ｎコード】
Ｎ９８０９Ｗ

【作者名】
ドＭ

【あらすじ】
平凡な生活を送っていた空想、妄想大好き丘崎丈人君高校２年生！ある日、作者が突然現れ異世界へ行き、ある国を助けろとの事。そのために与えられた能力を駆使し、国、人々を救えることができるのか！？
戦いあり、笑いありその他諸々ありのファンタジー！！

0話：旅立ち（前書き）

お願い！
この作品は素人が書いています。
温かい目で見てあげられる方のみお読みください＾＾
尚、中傷、荒らしなどはおやめ下さい！！

0話：旅立ち

空想
あり得ない事を想像すること・・・

妄想
　根拠もなく、あり得るはずもないことに
確信や信念を持ち思いこむこと・・・

夢想
夢など希望を思い描くこと・・・

全てに共通すること
それは想像・・・

リリリリリリ・・・ガシャ！
「ふわぁ～・・・」

ただいま8月14日AM6：30です。
俺、丈人(たけと)は朝から空想に浸っている。
え？妄想じゃないのかって？ハハハハハハ！否定はしない！

だって楽しいじゃんか！こっちの世界では、モテないんだから！活躍できるのは想像の中だけだよw
あぁでも、今日は詩音が居ないから平和な朝になって嬉しいなw
詩音と言うのは俺の妹でいつも朝っぱらから人の部屋に入って物色し、その後、俺を殴り殺そ・・起こそうとしてくる。

正直な話そんな
妹が怖いです、はい。

昔はあんなんじゃ
なったのに・・・！！

…と言うか、俺は誰に話しかけてるんだ？

あああ！！
なんでｌｅｔ' ｓ想像していたのに
詩音の事思い出したんだろ！

［好きなんじゃない？］
そう言って出てきたのは、メガネをかけ、ボサボサ頭のジャージを着た男だった・・・
「お前だれ！？強盗犯か！？それとも殺人犯か！？・・・わかった！作者だな！？何でココに居るの！？てか姿見えるよ！？おかしいだろ！？」
［せいか～い！！よく分ったね！w］

「あんたはさっさと、このストーリーでも書いてろ！」

［あぁ！！もっと罵倒して！］

「Mかよ！」
顔赤くして言うな！気持ち悪い！
皆・・・作者がMだよ・・・

もういい・・・ご飯食べよ・・・
俺は、飯を食うために下へと降りた。
あ、もちろん変態もいるぞ！

「ムグムグ・・・ンン・・ア～ン・・・ングング」
さ～て！今日の朝ご飯は昨日の残りものだよ！！

朝ごはんはいつもは詩音が作っているけど、昨日から合宿で家を出ている
だから居ない時は、残り物を温めて食べている。
え？自分で作らないのかって？いゃ、作っても良いんだけど、使えないから！
一時期、料理にハマってキッチン独占し過ぎて注意されて以来やっていない。
と言うか、やらせてくれない。
酷いよな！？

～回想～
詩「兄貴！今日は俺が作るよ！」
丈「近寄るな！！此処は俺の領域だ！！入ることは許さん！！」
詩「兄貴占領するのはいけねぇんだぞ！！」
丈「黙れ！誰になんと言われようと・・・」
～回想終了～

あの時は皆必死に止めてきたな・・・何でだろ？

あ、そうだ！家族構成を紹介しておこう！
俺の家族は、父、母、妹、兄貴、僕の五人家族だ。
［だから？］　「作者うるさい！さっさと消えろ！」
［あぁ！たまらない！］
・・・スルーしておこう。

父さんは海外出張でなかなか会えないし、母さんは夜遅くまで仕事なので、普段は俺と兄貴と詩音だけしか家に居ないわけで。
なんと言うか、２人がいつ襲ってくるか分らなくて怖いです。
ん？兄貴もかって？そうなんだよ。なんつーか過保護？ってやつかな？
例えば買い物行って迷子になった時、迷子センター行って俺を探すように店員さんに脅したり、
中学の時、高校生に絡まれてボコボコにされそうな時助けに来て、フルボッコにしたりしてた・・・
その時、「何ですぐ来てくれたの」って聞いたら「尾行してた」って言ってたし。
あの時はさすがに引いたよ。
その兄貴は、ずっと寝てるし。まぁいつもの事だけど～

え？何そのリア充設定だって？
知らないよ…
［僕の設定さ☆］「消えろ…」
心なしかドンドン、豚に見えてきた…どうしたらいい？
［まぁまぁ、１人よりは良いだろ？］
「・・・まあね、後、こんな能無し消えたら最高なんだがな…」
［ぁあ！最高！］
うわ！何かきもい！こっちによるな！

～～～

ドンドン！
なんかドア叩いてる！！
幻覚じゃない！？
怖ぇよ！
「おーい！俺だよー！」
「誰だよ！何か！？ＯＲＥ☆ＯＲＥ☆詐欺か！？だまされないぞ！」
なんださっきの彼は！
あんな知り合い見たことないぞ！いや！居たとしても無視してやる！！
「俺だって！要だってば！ってかＯＲＥ☆ＯＲＥ☆詐欺ってなんだよ！！」
「え？要？」
「そうだよ！！分かったら早く開けてくれよ！！」
ッチ！五月蠅いな・・・

要とは、小４の頃からの友達だ。
俺の通ってる小学校は一年ごとにクラスがかわる仕組みで、皆がまだ馴染めないクラスで自己紹介をする事になったんだ。
要の時の第一声で僕は要を知った。
この言葉のおかげですぐクラスの人達と仲良く慣れた。
そのくらいとても心に残る一言だったから。
『佐藤要だ！！皆消えてしまえ！』
こうだった。
え？これのどこが仲良くなれる言葉だって？
いや、仲良くってか一致団結？うん、鋭い人はわかっただろうけど、クラス全員で要をボコったんだ。
そりゃそうだよね！いきなり消えろだからね！それから一週間誰も要とは口聞かなかったね。うん。

・・・と言うかなんで包帯巻いてんだよ…？
「ん？包帯はな、昨日女子にボッコボコにされた！それよりＯＲＥ☆ＯＲ・・・」
流石親友！通じ合ってんだな！
詐欺師扱いして悪かったよ！
でもなんで女の子にボッコボコにされてるんだ！
「そんなことより学校行かね！？それとＯＲＥ☆ＯＲＥ・・・」
あぁ、そうだった。
…何で考えが丸分かりなんだ！
怖ぇよ…
あまり考え込んではいけないな！はぁ…
「…行こうか」
「おう！んでさ！結局ＯＲ・・・」
そう言って俺は、すぐドアを開けて学校に登校する事にした。
ん？なんか要が喋ってる？
登校中、ずっと要に女の子の話ばかりされた。
あ、いつもこんなんだから、女の子にボッコボコにされるんじゃ・・・
・
しかも後ろの方にＯＲなんたらとか言ってるし・・・壊れたのか？
あれ？そういえば作者いんのになんで気づかないんだ？
［ムフフフ・・・］キモッ！！
そんな事を思いながら登校した。
学校に着いて、俺は直ぐに、空想に浸る。

これが俺の日課なのだ！
先生が来るまで３０分以上ある。
早く来過ぎだって！？
そんな事は無いさ☆
「おーい、丈人ー」

いや、ちゃんと授業受けてますよ？
先生に授業態度は良いって言われるし。
まぁ、ノートとかに想像した絵とか描いてるけど…
「おいってばー」

［その割には、テストのてんｓ「うるさい！」
「ひぃ！」
隣を見ると、要がいた。
「あっ要か、何かあった？」
要くーん、居たなら挨拶してよー

「お前だよ！！」
「え？」なにが？
「どうしたんだよ！いきなり大声だして！」
あ！やってしまった！くっそ！作者の野郎！！

［プッ何してんの？ｗｗｗ］
お前のせいだよ作者！ふざけやがって！
［えぇ！？そうなの！？］
そうだよ！
くそっ！チョップ食らわしてぇ！
「いや何でもないから気にしないでくれ」
「あ・・・あぁ・・そうか、なら良いんだが・・・」
「ごめんな？」ホントごめんな？

いつもこんな感じだったっけ？
［そうだよ！］
ちげぇよ！そうだよ！作者が居るんだ！
お前のせいだったのか！
ってか何で作者が出てんだよ？
［昼休みにこの階のトイレの個室に来い、そしたら分かる］
あ、ごめん俺、そんな趣味ないから。
［違うよ！変な想像すんな！］
え？違うの？
［まぁいい、ちゃんと来いよ？じゃないと教えれない］
・・・分かったよ。分かったからさっさと行け！
［へいへーい］
ふぅ、行ったか。でもなんで作者が居るか気になるな。
昼休みに行ってみようかな
［来る気無かったの！？］
なんでまだ居んだよ！？
・・・というか何で作者と心で会話できるんだろ？？
・・・やめとこ。なんか気持ち悪くなってきた。

キーンコーンカーンコーン♪
四時間目が終了！！さぁ！いざ作者の元へ！！
「丈人～飯食おうぜ～」
要が弁当を持って近づいて来る。
「ごめん、一人で食ってくれ！」
「ひ、ひでぇ！」
すまん要！俺には行くべき場所がある！！
要が項垂れたのが見えた。

作者に言われた通り
今、トイレの個室にいます。
正直臭いです。
まさか、俺が来る前に済ますようとしたのか！？だったら許せネェ！！

［おう！来たか！］
あんたが呼んだんだろうが！
何だよ、ったく！
まぁいい、さぁ、お前が居る理由を教えてくれ。
早くしないと、飯食う時間がなくなっちまうし、ここ臭いし。
［まぁそう焦るな。私にも時間がないんだ。あと、臭い言うな。この臭いは、聖なる臭いだ！］
てめえ！やっぱ此処で便済ませてたのか！どおりで臭いぜ！だからお前は…
［ああ！もう良いから！悪かったから便器に突っ込もうとしないで！？］
じゃあ早く済ませよう？
［・・・分かった、ふぅ！助かったぜ！…いいか？今から言う事に

驚くなよ。」
ん？そんなにやばいのか？
ま、まさか…死ねってのか！？だとしたら冗談じゃねぇぞ！？
［今から君には、此処とは違う世界に行ってもらう！君を異世界に送る！これが私の居る理由だ！］
へ？な…なんデストォォォォォ！？
［異世界に行ったらある国を救って欲しい！そのまま行っても、死ぬだろうから、このニ刀と・・・］
ちょっと待て！なんで俺が異世界に行かないと行けないんだ！
冗談じゃないぞ！こんな急展開認められるか！！
しかしその刀カッコいいな！！
［理由は後だ！それと、君に具現能力を授けた！］
作者がそう言った後、足の太腿辺りが青緑色の綺麗な粒子になって、消えていってる事に気がついた。
「か、体が消え掛かってる！？ぐ、具現能力ってなんだよ！」
精一杯声に出して叫んだ。

［ちっ！始まったか！いい！？具現能力は想像した物をその場に出せる能力！言わばチート能力だ！！ただし、自分が知っているものだけ！あっちに行けば詳しい人がいるからその人たちに聞いてくれ。それと！具現能力はそれは私欲の為だけじゃなく、皆の為に振る舞うんだ！いいね！？］
それはそれは凄い能力ですね・・・・・・感心している場合じゃなあああああああああああああい！！
おい！作者！！その国とやらを救えば戻ってこれるんだよな！？
［あ、ああ］
首まで消え掛かってきた…
分かった！その国俺の力で守ってくるよ！！
［それが聞けて安心したよじゃあ、あっちの世界を・・・］

この言葉を最後に
体全体が今まで居た俺の世界から消え俺の意識が途絶えた・・・

その後作者は？

「さて！祝０話です！！今回のゲストは作者さんでーす！！」

作「どうも！作者です！」

パチパチパチパチパチ・・・
「それでは質問に入りたいと思います！！」

作「ドンと来なさい！！」

Q．丈人くんは作者的にどうですか？
A．良いですね！特にあのツッコミ！

Q．何故作者がいるのですか？
A．え？なんか、作者ネタやりたくて。

Q．何か謎キャラ出せば良かったのでは？
A．ありきたり過ぎな感じがしたので。

Q．作者はこの小説の作者ですよね？あっちの世界も書くんですよね？

A. あたり前田のクラッカー！

Q. では、何故最後二度と合わない感じのセリフを？

A. 最終回まで合わないつもりです。

Q. では、最後に一言！

A. 計画通り　ニヤッ

カミングアウトをしていた。

0話：旅立ち（後書き）

頑張りました！！
これからも頑張るので宜しくお願いします＾＾
できればアドバイス、感想など言ってもらうと有り難いです＾＾

1話：具現能力発動！！（前書き）

急展開すぎですね！
すいません。

1話：具現能力発動！！

「ん・ぅう～ん・・はっ！」
あれ？此処は！？
俺は倒れていた体を起こし辺りを見回した。
目の前に広がった景色は青天の空、そして何処を見回しても何もない緑の平行線。
この時点でもう前の世界ではない事が分かる。こんな景色見たことないし！
俺の隣にあの二刀がある・・・
確か、作者に・・・
「そうだ！作者が言ってた国ってのを探さなきゃ！」
けどどうやって？知り合いがいるわけがないし。
「・・・そうだ！なんか持ってないかな？」
ズボンのポケットに手を伸ばそうとし、気がついた。
「服が、全然違ぇ！！」
そう。服が制服じゃなかった。
なんかこぅ、よくいる魔道師みたいな服装だった。
下には学校の制服だし、作者がくれたのか！
いやぁ～有難いわ～
あの制服便所の臭いが付きまくったと思うからなぁ～

すると
「おい！そこの貴様！何者だ！まさか、オルティガのものではないだろうな！？」
などと行き成り後ろから怒鳴り散らされた声が聞こえる。
「！？」
なんだぁ！？

後ろから声が聞こえたので振り返ると俺より少し背が低く、両手を握り拳を作り構えている女の子がいた。
なんだ女の子か、にしてもびっくりしたー！
いきなり叫ぶんだもんな！
ちびるところだったぜ☆
しかも何気に戦闘フォーム取ってるし！！
てか日本語話せるんだな。
てっきり、わけわからない言葉を発するのかと・・・アニョハセヨとか？

「・・・おい、その刀、何処で手に入れた？」
俺の隣にある刀を指差す。
ん？なんだ？刀？あぁ、この二刀のことか？

なんていえば良い？
作者と言っても話が通用しないだろうしな・・・というかなぜそれを今聞く？
「これは・・・知り合いからのもらいもんだ！それで・・・「着いて来てもらおうか」
え？着いてこい？あ、お誘いかな？嬉しいけどねぇ～可愛いし・・・

はっ！もしや俺ってモテる！？いゃ～参ったなぁ～あ、でもそれどころじゃ無いし・・・残念だけど、ここは紳士的にお断りしよう！
・・・紳士的にってどうやるんだ？英語で紳士ってジェントルマンだっけ？まぁいいや！よし！やるぞ！
「お誘いはとてもありがたいですが、今それどころじゃあ・・「ガチャ」
・・へ？て、手錠！？・・・に似てるな
まさかこの子、この世界のお巡りさん！？

あぁ、捕まっちゃうのね・・・俺悪い事したかな？
あ、もしかして！紳士的じゃなかった！？
やっぱりね！薄々気づいていたよ・・・
だからって、捕まえること無いじゃん！なんて説明する気！？
あんたまさか、「こいつが、私の誘いを断ったため捕まえました」
何て言うのか！？
おかしいだろ！そんなんだから世の中が荒(すさ)んd・・・
「何を訳の分からないことを言っているんだ？私は貴様を窃盗犯として国に突き出すだけだ。よかったな、直ぐに楽に死ねるぞ。」
は？窃盗犯？死ねる？ＤＥＤ？
「はあああああ！？何言ってんだよ！窃盗って、なに盗んだってんだよ！」
！！もしやあれか！？あの某怪盗の映画にあった「とっつあん」の有名なシーンか！？あれを自分から見たバージョンか！？
た、確か言い方こんな感じで・・・

～妄想～
「貴様はとんでもないものを盗んでいった。・・・・・・私の心を」
～終了～

ブゥゥゥゥ・・・やべぇ！なんか萌える！！
ダメだ！邪念を捨て心を無にするんだ！
１＋２＋３＋４＋５＝じゅう・・・何だろ？

「はぁ・・・その二刀だ」
そこ！
呆れ気味に溜め息つくな！
ま、妄想っぽい事したのは謝るけどさ・・・そんなジト目で見た後溜め息付かなくたって良いじゃ無いか！

ってかこの刀を盗んだって？
ｗｗｗウケるｗｗｗ
「君ｗ俺の話きいてた？これはｗｗ・・・「この二刀は我が国、エルストリアを救いになった具現士様の愛刀だ。それを貴様が奪ったんだ！」
ちゃんと人の話最後まで聞いて！！
ってかこの二刀、そんな大切な物だったんだ！
知らなかった！作者め！
先に言ってよ！
なんか貰って、やった！かっこいいな！とか思ったじゃんか！
全く作者め！今度会ったら、叩き潰す！
・・・いつ会えんだろ。
しかし・・・この女の子なんか必死だし・・・なんか訳ありかな？
あ～あ、そうなると絶対引かない気だよ。多分、あれだ、あれ
「早く犯人を捕まえないと私、王様に国を追い出される！」てきなやつだよ！きっと！
だとしたらどーしよ？何か女の子が了承して、俺も国に行って王様に会って今の俺の現状を報告して保護してもらわなければ・・・って、方法一つだねｗ
その前に、色々聞いとかなきゃ

「分かった、着いて行くよ。ただ聞きたい事がある」
「そうか、やっと観念したんだな。よかろう、何でも聞くが良い」
女の子は腕を組み、威張るように胸を張った。
所謂上から目線だ。
くそ！何かイライラする！！
抑えろ抑えるんだ丈人！
相手は女の子だ！
穏便にいこう！
うん！

「一つ目、その具現士様はもう居ないのか？」
そう聞いた瞬間女の子の顔が暗くなった・・・あれ？地雷踏んだ？
「・・・あぁ、一年前にな、病死だったらしい。具現士様が自分や数人いた具現士は大概病気に掛かり、死ぬと言っていた。まぁ稀にそのまま生き延び戦死、永眠する者が居たそうだがな。」
そこまで詳しくありがとさん！
何か悪いな・・・気まずい感じだ・・・
でも良かった！病死の話を聞いて、てっきり俺も病死するかと思った！
稀の方に入ってますよ～に！
あれ？稀にって事はちょっとじゃね？
まぁ、それは置いといて。
「じゃあ二つ目、今君の国に具現士様はどれくらい居る？」
女の子は途端に目つきが鋭くなり・・・
「っ！・・・何故そんな事を聞く！！」
・・・怒鳴った。
うわ！！びっくりした～！叫ばないでよ！
「良いじゃん！どうせ死ぬか、地下牢行きだろ？」
まぁ、そうはさせないけど、どうすればいいかな・・・？
「ふん！まぁ良いだろう・・・０だ」
え？０人？何か、気まずい事聞いちゃったのかな？誤った方が良いのかな？
「あ・・・ごめん」
「謝るな！余計腹が立つ！」
イラッ！！腹立つなこの子！謝ったのに、そんな言い方無いじゃん！！
健康メンタル弱いんだぞ俺！！
「チッ！三つ目、国王様に会わせるのか？」
「当たり前だ、報告及び断罪者からの詫びの一言をしなければいけないのでな。因みに、我が国の王は王様では無く女王様だ」

何？断罪者って！俺か！？俺なのか！？しなければって！するの俺じゃん！ってか女王様かよ！
国を治めているのは大概王様だと思っていたが違ったようだねw
・・・なんかツッコミすぎじゃね？

「はいよ！これで質問お終い！ありがとな！」
お礼は大切にな！みんな！
あるぇ？みんなって誰だ？
「ふん！敵国の者でも礼儀ぐらいはあるのだな。」
おい！「ふん！」ってなんだ！あ、分かった！！怒ってんだろ？い
い加減機嫌直せよ～
ん？あれ？今、敵国って言わなかったか！？
「お、おい！俺は・・・「さ、さぁ！グズグズするな！もう行くぞ
！」
話聞けよ！！あんたお母さんにどんな教育受けたの
もう良いよ！後で女王様のいる前で暴露してやる！
あれ？なんか首に違和感があるぞ？
「ぐえっ！おい！え、襟元引っ張るな！ぐ、ぐるじい！」
息が！息が出来ない！
死ぬ死ぬ！

その後、1時間以上襟元を引っ張られたまま歩いてた。
やばいぞ！もうダメだ・・・！
死んでしまう！

「さぁ、着いたぞ！此処がエルストリアだ」
やっと開放される！
自由だ！俺はもう襟元呪縛から解き放たれるんだ！・・・ん？でっ
かい門だな～…っておぉ？なんか開いて来たぞ！誰が開けてんだろ

？・・・さて！どんな国なのかな～？
・・・え？・・・此処が？

門を通った先に見た光景は、とても悲惨なものだった。奥の城から半分無傷なのだが、途中から民家や、建物が俺の目の前に立っている所まで全壊していた。所々から黒く細い煙が天に上っている。
「嘘・・・だろ・・・？」
はっきり言ってこんなのが国とは言い難い。
「何を驚いている？やったのは貴様の国だろ？」
俺の国！？敵国の事か？確かオルティガだったけな？
勘違いしたまんまだな？
さっき言いそびれたし・・・
あぁ！クソ！早く誤解を解かないと！

しっかし変な子に捕まってしまったな・・・はぁ、可愛いんだけどな・・・
俺はこいつ達とは違う世界から来た事は女王様と話すまで、黙ってなければ・・・そして、疑いが晴れたらこの民家や建物を直さなくちゃ！
具現能力は、そういう事の為にあるんだよな！作者よ！
その前に理由考えとかねぇとな！

「よし！女王様に会いにいくぞ！」
おう！あれ？またなんか首に違和感が…まさか！
「だから！襟元引っ張るなって！痛い痛い！」
そんなことはお構いなしかのように襟元を引っ張り歩き出す女の子。
好きなのかな？襟元を引っ張るの

それより女王様どんな人だろ？
美人さんなのかな～w

１０分歩いて・・・って！王城遠いでしょ！
いゃ、歩いているっちゃ歩いているんだが、襟元を引っ張られたまま後ろ歩きで歩いている。
半分以上まで来たが、本当にひどい現場だった。女の子曰く死者は少人数で済んだものの、重傷者や家を失くした人、親をなくした子供、痩せ細った人が沢山いるらしい。
俺も見たが、あんな現場を初めてみた。
人々は生気を感じず、子供は泣きわめき、痩せ細った人は倒れていた。失礼なことに俺は吐き気がしてしまった。襟元＋（プラス）で。
しかし、人々はこの女の子を見た途端笑顔になった。笑顔といっても生気感じられない精一杯の笑顔なので見ていた俺はその笑顔がとても痛々しく思えた。
女の子も、人々に歩み寄り、笑顔を振りまいた。素直に、可愛いと思った。
うん、女の子は笑顔が一番！！

３分後、王城に着いた。
でっけー！！初めて見たよ！！すっゲー！！
「ぼさっとするな！入るぞ！」
「へいへー・・・ぐふぅ！」
こいつ、また襟元引っ張ってやがる！
全く勘弁してくれよ・・・

ドシャーズザザサー！
→女の子が俺を床に叩きつけて俺と床がこすり合わさる音だ。
なんで冷静なんだ？いゃ、熱い！顎が熱い！
「あいでででで！痛いわ！」
「女王様！！窃盗犯を捕らえました！」
「話聞いてよ！」

思いっきり無視したぞ！？
イラつく！

しかしそんなイライラはすぐに吹っ飛んだ。
「ありがとうございます」
この一言でだ。
ブゥゥゥ…笑顔めっちゃ綺麗！
何と美しい声、顔、スタイルでしょう！
こんな美人さん見た事ないぞ！

これが女王様かぁ～
ヤバイ！めっちゃ綺麗！この女の子は、可愛いって感じだけど、女王様は、綺麗な感じだ。
綺麗しか出て来ない。
悔しい。

「おい！貴様！女王様の前だぞ！頭をｓ「良いのです、この方は・・・・・

具現士様なのですから」

「「えっ？」」
俺と女の子は、驚いていた。
周りの人も驚いた顔つきだ。
だってまだ俺の正体を言っていないのに具現士だと分かられたからだ。

「な、何を仰っているのですか女王様！此奴が具現士様だと仰るのですか！」
明らかに動揺している。
言い方酷っ！！

「そう言っております」
女王様は笑顔で答えた。

「流石女王様だ！分かっていらっしゃる！」
流石だよ！話が早い！

「では具現士様、なぜこのような事に？」

「それは「それは此奴がこの二刀を奪ったからであります！」

「そうなのですか？」
途端にションボリと聞いて来た激しい罪悪感に襲われる。

「ち、違います！はぁ・・・良いですか女王様、俺は・・・違う世界から来たんですよ。」

『えっ？・・・・・・えええええええええええええええええええ！？』
周りの人等が驚いている。
無理もない、俺もそう言われたら驚くに決まっている。
その後３０分此処にきた経緯と他の事情を話し、本題に入った。

「簡単に言うと、この国を救いに来た・・・と？」
「はい！」

そう作者が言ってたもん！まぁ、この国かわからないけど！！

「ばっ、馬鹿を言うな！貴様にこの国を救うだと！？無理に決まっているだろう！」

カッチーン！この野郎！！

「あら？そんな事ないですよね？」

「だいたい！此奴が具現士様かも分からないでしょう！」

あぁ、言えてる。

作者から具現能力を与えて貰ったが、実際俺も出し方や使い方が分からない。

「じゃあ、なにか具現化してもらいましょうか。」

女王様やめて！そんな笑顔で頼まれたらやるしかないですって！！

「い、いいだろう。やってやるがもっと広い所でやりたい！良いですよね？」

おい俺！体が震えているぞ！？いや！こ、これはむむむむ武者震いだ！！そうだ武者震いだ！！

「分かりました。では、第四訓練所でやりましょう。今の状況では、あそこが一番広いでしょう。」

「かしこまりました！」

さて、第四訓練所に着いんだが、広っ！！

東京ド〇ム以上じゃん！何個分！？何個分だ！？

女王様、今の状況では、第四訓練所が一番広いって言ってたけど、

此処でこのぐらいの大きさって事は、今はまだ使えない他の所はも

っと広いのか！？
ひえぇ！
第四訓練所の中は天井がなく、青空が広がり、地面は、一面土、砂が敷き詰められどっかのローマの闘技場みたいな所だ。
まあ、広さが尋常じゃないけどね！
「さぁ、着きましたから何を具現化してもらいましょうか。」
女王様不気味な笑顔だ・・・
怖いよ、ぅう～
自覚しよう。震えは武者震いんなどではなく、ただのビビリの震えだったと。
「そうだ、誰か具現化して欲しい物を言ってください」
おいいいいい！女王様！無理だって！
なに！？女王様だからってＳなの！？この鬼！！
「はい！私に言わせて下さい！」
言いだしたのはあの女の子だった。
おい！さっきからこの子が居るな！誰なんだ！？
「分かりました、では何か言ってください」
はあ、腹括るか。
んで？お客さん、なにが欲しいんですか？
「・・・ランス」
へ？

「ランス？ランスってあのモン〇ンに出てくるランスか？」
あ、知らないか。
「ま、まぁ多分そのランスだ。」
「さぁ、具現士様！具現化して下さい！」
やっべぇよ！めっちゃ笑顔だよ！女の子まで、目輝かせてるよ！
失敗できねぇ！てか何で女の子まで真剣な眼差しを俺に向けるんだ！
あ、そういえば作者・・・［具現能力は想像した物をその場に出せる］って言ってなかったか？
そうだ！想像するんだ！
俺には、テイ〇ズや、アニメで培った想像力があるじゃあーりませんかー！
集中しろ！精神を研ぎ澄ませるんだ！あ、格好つけたかっただけです。すいません。よし！いくぞ！
「すぅ～・・・」
俺は大きく息を吸い込んだ後頭の中にランスを思い浮かべる
大きさ、長さ、その他細かい事を想像しながら・・・

３０秒後

「はっ！」
おぉ！何か前に光の球見たいのあるぞ！
なんか駄目元でやってみたけど上手くいったみたいだ！！あ、いかんいかん！集中集中！
なんとか安定した光の球を女の子の手のほうへと送る
「ほら、ちゃんと受け取れ！」
パッと光は女の子の手の中から消えた、その代わり現れたのは、俺が想像したランスだった。
ランスの胴体は、白をベースとして下の方が少し青色になっていて、周りについてる複雑に入り組んでいる模様は金色で仕上がっている。

「え、あ？・・・・え？」
おや？驚いているのか？
どうだ！参ったか！

「まぁ、何と立派なランスでしょう？。」
女王様も褒めてくれている。
女王様・・・有難いけど・・・なんかエロく聞こえますよ？
ふぅ、まぁこんな感じで具現化すればいいんだな？

「これで国の再建する許可を与えてくれますね！？」
よし！もう具現化見せたし良いよな！
あれ？さっきの女の子が居ないけどどこいったかな？

「いえ、まだそれは成りません。それでは本題です。この本題が出来れば、許可します。」
女王様は又しても不気味な笑顔を浮かべた。
えっ？何すんの？

「家を建てて下さい。それも人がちゃんと住めるくらいの。」
女王様あああああああ！！
その笑顔やめて！眩しすぎる！
しかも家を建てるだと？無理だって！やっぱこの人Sだ！！今なら確信が持てる！！
しかし、早くしなければこの国は、潰されてしまう！それだけは避けたい！！
仕方ない・・・

「・・・分かりました、やってみます！」

「はい。任せますよ。」

どんな家にしようかな？
えっと、まぁ簡単に俺ん家で考えるか。
中はソファーとか、テーブル位でいいか！
大きさは確か・・・

見えた！

「ふっ！」
よし！あと少しだ！

「皆さん！早くどいて！」
潰れちゃうって！

「早くどけろと具現士様が仰っているぞ！」
おぉ！！ありがたい！！おじさん有難う！ってかおじさん体すご！
ムキムキじゃん！
いかんいかん！集中だ！
・・・来た！！
「とりゃ！」

ズドッスーン！！
ものすごい音が第四訓練場に響き渡った。
『うわ！！』
うわ！！びっくりした～体が浮いたよ！

どうだ？ちゃんとうまくいったか？

「これは・・・見た事の無い家ですね」
そう言う女王様の視線の向かう先には見たことのある家があった。
おぉ！！俺ん家だ！ちゃんと出来てたよ。よかったー！！

「あ、俺ん家です！他に思い当たらなかったので！」
見た事無いって事はこういう家が無いのかな？

「そうでしたか。それでは、中に入りましょうか。」
おっと！説明しなきゃ
「入る時には靴を脱いで下さいね？それが俺の国のしきたりですから！」

『そうなんですか！』
みんな驚いてるし！
「はい。あ、ドアを開けてからタイルと木の床の間に段差がありますが、タイルの所で靴を脱いで木の床に上がって下さい。少々狭くて面倒ですが、よろしくお願いします。」

「分かりました。不思議なしきたりですね。とても興味があります。」

「まぁ、お手本を見せますからみてください。」
だったら、説明しなくても良くない？って感じだが、無視しよう。

「よっと！まぁこんな感じです」
うわぁ～懐かしいな！中そのまんまじゃん！

「じゃあ私から。」
女王様、足元に気を付けてね☆

それから一時間ずっと女王様と、そのお供様達は俺の家を物色し俺は、女王様やお供の皆さんが疑問に思った事を分かりやすく説明し

ていた…

分かったことは

人に自分の家を見られるとなんか恥ずかしい／／／

というか、あの女の子はどこに行ったんだろう？

1話：具現能力発動！！（後書き）

読んで頂き有難う御座いました！！
誤字脱字、アドバイス、感想も書いて貰えると嬉しいです＾＾

2話：復興開始！！（前書き）

新キャラ？を出してみました！

2話：復興開始！！

その後、王の間では・・・

「では！俺にも国の復興許可を！」

俺は、女王様に復興を手伝わせてくれるよう頼んでいた。

「えぇ、与えます！皆と協力して国を復興させるという役目を果たして下さい！」

その言葉を聞いた瞬間、

『やったー！！』『よっしゃー！』『やるぞー！』

などと、皆意気込みながら

兵士等と俺は、歓喜に浸っていた。

自分で言うのも恥ずかしいが兵士達も俺の参加を望んでいたようだ。

くぅ！泣けるぜ！！

「皆さん！頑張りましょう！」

『おおー！！』

皆のい思いは

すぐに一つになった・・・

トントン・・・・・・・
「おーい、そこの木材取ってくれ！」
「任せとけ！」
こんなやり取りが永遠に続いていたおかげで結構建物が直ってきた。
といってもまだまだだが。
その頃、俺はさっきの女の子と色々と話している。
早く建物を直す作業をしたいんだけどな～？

「最初、疑って悪かったな。それとこれ・・・」
そんな事か。よかったのに。
そう言って女の子が渡して来たのが俺が造ったランスだった。
・・・あげたんつもりだったけどな？
「良いよ！やる！」
「しかし・・・「良いんだって！俺が初めて造った物だ！記念に取っとけ！」
「あ・・・有難う。・・・ん？今なんて言った？初めて造った？どういう事だ？」
ジト目で見てくる女の子。

あー、やっちゃった！ダメダメじゃん俺！まぁ、昔から隠し事苦手だしな。詩音にもすぐばれたし、自分から言ってたしなw
しょうがない、白状するか・・・

「あぁ。俺が異世界から来たのは知ってるよな？あれから初めて造ったのがそれ。それまでこの能力の使い方が分からなかった。あ、いらなかったら捨てて良いぞ？」

はぁ～可哀想な俺のランス・・・あ、下ネタじゃないぞ☆

「い、いや！そんな事はない！寧ろありがたい！・・・そうか初めてか・・・ハッ！！そ、そうだ！ま、まだ名を名乗っていなかったな？私は、リク。リク・アナスティアだ。リクと呼んでくれ。この国の騎士団隊長だ。よろしく。」

ちょっと焦り気味だが自己紹介をしたリクと言う女の子。
なんで焦り気味なんだ？・・・そんな事はどうでもいいんだけど・・・
そんなことより今何て言った？騎士団隊長・・・？

・・・うえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？騎士団隊長さんだったの！？まじかよ！俺てっきり、お巡りさんかと。よく見れば、そんな感じがする！

「うえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？騎士団隊長さんだったの！？まじかよ！俺てっきり、お巡りさんかと。よく見れば、そんな感じがする！」

はっ！声に出してしまった！
そりゃビックリするよ！騎士団隊長ってメッチャすごいじゃん！
そのくせ性格がなぁ・・・

「何を言ってるか分からないが、なぜかイラつく・・・ふん！まぁいい、貴様の名は？」
あ、そういえば俺の名前言ってなかったっけ？

「俺は、丘崎　丈人・・・あー・・タケト　オカザキな？タケトって呼んでくれ。さっき見たとおり、一応具現士だ。よろしく！」

「うむ！よろしく！」
おっ！笑顔は可愛いなー

「さっ！早く作業に戻ろうぜ？サボってばっかじゃ皆に悪いよ」
「あ、あぁ。すまんがこれから用事があるのでな、私は抜けさせもらう。」
あららー残念。もう少し親睦を深めようと思ったのに残念だわー
「そうか・・・まっ、頑張って来いよ！」
「あぁ！ありがとう！でわ・・・」
そう言うとリクさんは走って行った。ん？呼び捨てじゃないのかって？
ほら最初っから呼び捨てだと抵抗あるじゃん！
しかも2文字だし。俺的に最低3文字ぐらいじゃないと呼びにくかったし。
皆さんもそうゆーのってない？

はあ、やっぱり騎士団隊長さんは大変だなぁ。用事ってなんだろう？

「具現士様ー！！ぼさっとしてないで手伝って下さいよ！」『ははは』

前の方から俺を呼んでる皆の姿が見えた。しかも笑ってるし。

「はいはーい。今行きますよ！」
全く！皆してひとを馬鹿みたいに！
・・・いや馬鹿だけどさ・・・

「具現士様も大変だな」
「はぁ～、そうなんだよな・・・ってあれ？君誰？」
後ろに人が立っていた。

俺より高い背丈、長い銀髪のツンツンヘアー、鋭く光る赤い目。
・・・イケメンじゃねぇか！！
「俺か？俺はネルオーネだ。」
おぉ！！名前までかっこいいぞ！？この人！
是非お近づきになりたい！！

「ネルオーネさんか！よろしく！あ、俺、丈人って言います！」
歳上っぽいしな。ちゃんと敬語を使わないと！！
「さん付けや敬語は止してくれ。堅苦しいの苦手なんでな。気安くネルって呼んでくれ。皆からもそう呼ばれてるから。タケトだな？・・・よし！覚えた。」

メッチャクールだ！モテるんだろうな！！良いなー。顔イケメン、声イケメン、性格イケメン。言う事なしだよ！
・・・どうせ俺は言うこと有り有りなんだろうけどさ！！
ってかまた2文字かよ！なに！？作者の陰謀か！？俺を陥れるための！
おっと！そんなこと考える暇ないな！まずは質問でもしてお近づきになるか！！
「分かった。じゃあ質問！今何歳？」
俺の予想！21ぐらいだ！

「俺か？俺は、17だ。」
へェ～17か～ってえぇえええええええええぇ！？同い年じゃん！
全然同い年に見えない。なに？このすんごい敗北感。
「お、俺も17なんだ！同い年じゃん！奇遇奇遇！」

ゆっくり距離を縮めよう！
うん！じゃないとただのウザいクラスの弄られキャラになってしまう。

「タケトもか。改めてよろしく。ほら、皆に呼ばれてるぞ。早く行け。」

「え？ネルは来ないの？」

「すまんが俺は仕事があってな。先にそっちを済ませないといけない・・・また後でな。」

そう言うとネルは後ろを向き歩き始めた。

いやぁ～別れ際もカッコいいなぁ～

ん？ネルは呼び捨てだってか？

ほらあれだ！同性だと恥ずかしくないけど、異性だと恥ずかしいあれと一緒だ！

それより皆忙しいんだな～！知り合いそんな居ないから結構不安だよ。

「そうだ！最後にネルはなんの仕事してるんだ？」

メッチャ気になる！なんかすげぇのやってそう。

「うーん。強いて挙げるなら

女王様直属の使用人・・・かな？」

顎に手を当て答えてきた。

「エェ！？まじ？すげぇ！」

かっけぇ！女王様直属って女王様御用達を預かっていんじゃ・・・

ネルすげぇ！

「・・・そうか？おっと、そろそろ時間だ。じゃあな。しっかりやれよ。」

「ああ！そっちもな！」
なんかこの人とは上手くやっていけそうだな！
シュッ！バッ！
すげぇ！壁蹴って屋根上がってったぞ！？
「具現士様！早く！」
なんかちょっと怒ってない？
「はい！今行きます！」
ぁあ！やっぱり怒ってるよ！
なんか皆の目つきが鋭い！ごめんよー！謝るから許して！
あの後何やかんやで皆に謝って、働いて、休み時間ナウ。あれ？ナウの使い方違う？
「そういえば、具現士様・・・呼びにくいから坊主でいいか。誰かと話してた？」
あの筋肉おじさんが話しかけてきた。おい！おじさん！めっちゃランクダウンしてんだけど！？具現士って位からただの一般人みたいな位になったんだけど！？あー、そーゆーことか！だったらいいぜ！俺もやってやるよ！筋肉とかでいいだろ！？
「きんに・・・じゃ無かった！えっと、最初に騎士団隊長のリクと話して・・・」
はい。断念しました。なんかやる気なくしました。なんかおじさんの目が俺の死を宣告しているみたいだったから途中でやめました。
ごめんなさい。
『なんだと！あのリク様と！？』
うお！皆どうしたんだ！？どんどん周りに兵士たちが集まってきた。

って、近い近い！！
「あ、あぁ。それd「どんなお話を！」
話聞けよ！お前らもリクさんと同じ教育受けてんのか！？
「どういう性格で？」
「リク様…ムッハー！ハァハァ…」
「いいなぁ～！」
どんどん息を荒くし近づいてくる兵士たち中には女の兵士もいた。
おい！三人目！キモいぞ！嫌われて無いのかな？

「こら！まだ具現士様がお話中だぞ！」
あの筋肉おじさんがその場を鎮める。
おぉ！！流石にこの人には口が出ないか。誰も喋って無いし。
筋肉おじさん最強！ｗｗｗ
ありがとう！

「それで、自己紹介とかしてた。次に、ネルオーネって人と・・・
「マジかよ！」
「あいつと！？」
「あり得ねえ！」
リクで好評していた皆がネルの話をした途端なんか違う感じになった。
あれ？嫌われてんのか？まさかな。
「あいつは、女王様直属の部隊、［クゲン］の隊長だ。」
くげん？ってか隊長かよ！そこまで言ってなかったし
「すごいじゃん！？　どこがいけないんだ？」

「いや、普段あいつは・・・ってかあの部隊はあんまり見知らぬ人に自分から話しかける事は無いんでな。ちょつと驚いただけだ。あ、それと！なんかな？あんさんを［騎士団］か［クゲン］に入れようとどちらも何か企んでいるらしいぜ？」

「ま、マジっすか・・・情報ありがとうございます。」
「いや、いいんだけどよぉ？あんさん大丈夫か？」
「は、はい。なんとか・・・」
嘘だろ？あの人等が企んでいるんじゃ！？
しかし、そうは考えたくも無い。
あんなにいい人達なのだからそんな事するはずない・・・そうだよ！
あんないい人らがそんなことするはずないよな！うん。

一方あの二人は・・・
「ちっ！さっさと引かぬか！この影の存在よ！」
「黙れ！てめぇこそ引け！あいつは俺の部隊に入れんだ！」
争って（遊んで）いた

午後６：５０
「よし！結構直ったな！皆よく頑張った！今日はもう解散！」
「お疲れ様！」
「また明日～！」
「おう！」

よーし！俺も帰るか！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

そういえば俺どこで過ごせばいいんだ！？

「ハァ・・・此処にいたのか。ハァハァ・・・探したぞ！ゼェ・・・ゼェ」

「おぉ！！我が救世主！リク様ー！ってかその包帯やら傷どうした？」

そう。リクはボロボロの体で来ていたのだ。

「え！？い、いや！なんでも無いんだ・・・・・・貴様こそなにかあったのか？」

よくぞ聞いてくれた！

「実は帰る場所が無いんです！正確には、住む家が無いんです・・・」

あの第四訓練所にあったあの家は消したしな・・・

いや、消されたんだけど

～回想～

『ハイじゃあ、家を消しましょうか。』

『な、なに言ってんすか？女王様？家を消す？』

『えい☆』

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・ガラガラガラ・・・

『あああああああああああ！俺の家がああああ！？』

・・・・・・・・・・・・・はあ。

～回想終了～

「そ、そんな事が・・・と言うかタケトは具現能力が無かったか？
あれを使えば楽に作れるんじゃ・・・」
無理です。もう力が有りません・・・

「じゃあ聞くけど何処に家をつくるんだ？」

「うっ！そ、それは・・・・・国の外とか？」
名に考えてんだ？夜の平原は危険でいっぱいだよ！
「ばか！そんな事したら、俺死ぬだろ？」
リク！俺を殺す気か！？
「ばかとはなんだ！ばかとは！ふん！もう知らん！」
そう言い切ると後ろを向き、ボロボロの体を引き摺りながら歩いていく。
ぁあーどんどんとうざかって行く！待ってー！俺を見捨てないでー！

シーン・・・と静まり返った広場にいる・・・俺・・・
「はぁ・・・どうしよ・・・誰もいないだろうしな・・・」
「くぅ～ん」
首輪をつけた犬が近寄って来た。とてもションボリしている。
「・・・なんだ？お前も帰る家が無いのか？お互い大変だな？」

なに話してんだ？犬相手に・・・
まあ、いいか。一人でいるよりだったらマシだもん！

さみしくないもん！

「俺さぁ・・・此処とは違う世界から来てさぁ～・・・・」

その後、朝までずっと犬と語り合ってた・・・

3話：炊き出し戦争

次の日・・・

一夜を広場で過ごした俺はなんとなくだが、犬の言葉を理解できた感じがする。
まぁ、勝手な解釈だけど！
しっかし、目が疲れてしょうがない。何せあの後から今の今までずっと犬とお話ししてたからな。
・・・しょうがないだろ！帰る家無いんだもん！！
リクさんは怒って帰るし、周りの家って言っても灯りついてないし。はぁ・・・ついてないなぁ～。ってか今何時？結構明るいから6時過ぎかな？
「どう思う？」
俺は隣にいる犬に問う。
「ワン！」
ほうほう。七時ちょいとな？
「流石だな！」
俺は犬の体を撫でまくる。
犬はクルッとした瞳を細め安堵の表情を浮かべる。
そういえば、動物って撫でられれば気持ちい顔するけど人間もなのかな？
「あれ？こんなとこで何してんだ？」
後ろから声がしたので振り返るとそこにいたのはおっさんだった。
「あぁ、おっさんか。見てわかんないか？犬と遊んでんだよ。なー？」
体を撫でながら犬に同意を求める。
「ワン！！」

「ほら。」
「いや、ほらって言われても、わかんねぇし。ってか話わかんのかよ！？」
「そりゃぁな。一晩こいつと話してたし。」
ホント、途中から寒くなって寒かったわー。そういや、今って季節なんなんだろ？
「それまたなんで？」
おっさんは頭の上に「？」を浮かべ、ボケた顔で首を傾げている。
そっかあの時おっさんすぐ帰ったもんな～。
「それがさぁ～・・・・・・」

俺は昨日遭ったことを話した。

「はっはぁ～ん、んでしょうがなくこの広場で一夜を犬と過ごした・・・と」
うん。大体あってるけどなんか誤解を受けそうな言い方だな。
「それなら俺に話してくれれば泊めてやったのに。」
「まじ！？」
「あぁ、まじまじ。」
おっさんは真顔で言った。
クッソー！！失敗したな！あの後すぐおっさんに相談しに行けばよかった！！
しかもなに軽く「まじまじ」言ってんだよ！！
そりゃああんたから見れば気にしない様な事だけども！！
俺からしてみれば大事なんだよ！！少しは気にしてぇぇぇ！？
「それよりもうすぐここらの皆集まんだけど、誰も来てないのか？」
「来てないと思うけど・・・ワンコ、誰か見たか？」

「ブルル・・・」
犬は横に首を振る。
「そっか・・・らしいけどなんかあんの？」
俺は後ろにいる犬を手をグーにし突き出した親指で指さす。
「まぁ、今のは俺でも分かったけどよ・・・炊き出しだよ炊き出し。」
おっさんはため息をつきそうな勢いで答えた。
炊き出しとな？
炊き出しって確かあの色んな人に飯やらを配ったりするのだよな。
確かにこの国は今の日本と似てるけど。
「こんなでっけぇ国の此処だけでやんのか？」
そうだとすると恐ろしい光景が・・・
そう考えているとおっさんの顔がどんどんニヤケ顔になっていく。
・・・キモッ！！
「ガッハッハッハ・・・バッカじゃねぇの！？他のとこでもやんだよ！ククク・・・坊主はバカだったんだな！！ハッハッハッハ・・・」
そういうとおっさんは涙を流しながら地面を転がる。

・・・イラッ！！
バカなのは認めるけどそこまで笑わなくてもいいじゃん。
いやぁ、この人が同い年、もしくは年下だったらぶっ飛ばしてるぞ？
しっかし・・・
「いい加減笑うのやめろよ！！なんかホント腹立ってきた！！」
俺は赤くなった顔でおっさんに怒鳴った。
「ククク・・・悪ぃ悪ぃ。ついおちょくりたくなってな！」
おっさんは右手を口に当て笑いを堪えながら答える。

な～にがおちょくりたくなってだ！
こっちはいらつくんだぞ！？

「お、皆集まってきたな！おーい！！」
今まで笑っていたおっさんはいきなり真剣な顔つきになった。
切り替え速ぇな！おい！
俺はおっさんの見つめる方角を見ると結構な人数の兵士が何やら色々持っているのが見える。
皿、食材、鍋、フライパンなどの必要な物を持ってきたようだ。
しかし量が多いな。そんなに人が来るのか？

兵士も集まり食べ物の調理も終わりできた料理はカレーだった。
こっちの世界にもカレーあるんだ！やったぁ！！
しかし妙に変なのは何故か円陣を組んでいる。
「よし！出来たな！・・・いいか？これからが戦争だ・・・死ぬなよ・・・？」
『おぉぉぉぉぉぉ！！』
兵士たちは皆声を揃えて返事良く叫ぶ。
おい！！死ぬなよってどーゆー事！？そんなやばいのか！？
その何秒かした後、
「来たぞ！！戦闘準備！！」
おっさんの掛け声を聞き皆其々(それぞれ)配置につく。

あれ？いつの間に？ってかなんも見えねぇんだけど？
「盛り付け用意！！」
おっさんの掛け声と共に皿にカレーを盛っていく兵士達。
「おっさん。なんも来ないけど？」
「坊主、聞こえんのか？この足音が。」
足音？
俺は目を閉じ音を聞き取る。

聞こえるのは、カレーの煮込む音、皿を取る音、皿を置く音、ワンコの鳴き声がたまにするぐらいの音だった。
他に何が・・・ん？・・・何か聞こえる・・・
俺はもっと遠くの音を聞き取ろうとした。
すると・・・
ドドドドドドドドドドドドドド・・・
何かが近づく音が聞こえる。
俺はハッと目を開け正面を見る。しかし何もいない。
「聞こえたか坊主。」
おっさんが腕を組み遠くをながら聞いてきた。
「あ、あぁ。でも何もいないけｄ「見えた！！皆！気を引き締めろよぉぉぉぉ！！」
俺はおっさんに向けていた視線を正面に戻す。
何かが動いている。
俺は目を凝らして見る。
すると人が全速力で走ってきている。しかも数人とか、何十人とかではなく、大きな群れを成し濁流のように流れて来る。
その距離はどんどん近づき次第に色々な声が聞こえる。
「めぇぇぇぇしぃぃぃぃぃぃ！！」
「よこせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「今だ！！守備兵前へ！！」ザッ！！
おっさんの掛け声と共に目の前に細身の兵士が数人出る。

おっさん！こんなの守備兵！？と言いたくなったが、おっさんは真剣な目つきでずっと人々を見ている顔を見て何も言えなくなった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

人々が近づき守備兵との距離が無くなりそうな時、

「てんかあああああああああああああああい！！」

おっさんが叫ぶ。

その言葉を聞いた守備兵は正面に両手を翳（かざし）し、掌の周りに魔法陣のような物を展開する。

そこから掌の前に水色に似た透けるデカイ壁のような物を造り出した。

そして数秒後、人々が壁にぶつかったと思ったらそこから進まないだけでぶつかりはしなかった。

何とも不思議な魔法だ。しかし最前線の人々が何人か転んだ。

俺はその光景に目を背けてしまった。

見ていられなかった。

目を充血させ、必死にカレーに手を伸ばそうとし、叫ぶ人々に。

何でこんなにも悲しいんだろう。

俺はこの時震えながら初めて知った。

自分がどのくらい恵まれて生きていたのか。

今まで当たり前と思って生きていた人生だったが、この人々を見てこんな悲しい人々も居る事が分かった。

俺はその光景が衝撃すぎて、そのまま倒れてしまった。

3話：炊き出し戦争（後書き）

頑張りました＾＾；

4話：無限階段事件！（前書き）

丈人君が何かに目覚めたようです。

4話：無限階段事件！

その後、炊き出しも終わり、昼間に差し掛かる頃に俺は目が覚めた。
何故時間がわかるのかと言うと、俺の腹が減って来たから。
え？どこの食いしん坊だって？・・・さぁ？
大体俺そんな食わない方だし～。飯なんてそんなお代わりしないし～。
しかもここベットの上だし～。
って事はここは誰かの家って事だな！？
じゃなかったら此処は何処だよ。
そんな事より俺のキレの悪い脳みそがここはおっさんの家だと言っている！
ま、実際そうかもしれんが。
しっかし、綺麗な部屋だなー。壁は白く床は木でできているっぽい。
ほんのりそんな木の匂いがしたからだ。
そんな事を考えながら部屋を見回していると

ガチャ・・・
とドアノブが回る音がする。
誰か来たな。

そう思い寝たふりとかしない事にした。
するつもりでした。はい。

ギィ・・・とドアの金具などの軋む音がする。
そぉっと顔を覗かせたのは小さい子供達だった。ん？子供？
しかも3、4人とかじゃなく十何人もが身を乗り出し見ている。
俺も子供達も目を点にしている。
・・・・・・・う・・・

『うわあああああああああああああ！！』
「あああああああああああああああああ！！」
子供達と俺が叫び、動き回る。
そして子供達は部屋から出て行き、やがて叫び声が聞こえて来なくなった。
・・・何だったんだ？俺は部屋のど真ん中で茫然と立ち尽くしていた。

「はぁ・・・」
深いため息を吐いた。
此処に居てもしょうがないな。
そう思いニ刀を探す。ニ刀は部屋の隅に立て掛っていた。
「んしょっと！しっかし刀って思いなってつくづく思うよ。」
こんなのゲームとか漫画のキャラってブンブン振り回してんのか・・・
・
やっぱ常人じゃないんだね★
「おっと！こんなことしている場合じゃない！！」
おっさんと連絡付けなきゃ！
俺は部屋から出るためにドアへ歩く。
ドアの外へ出ると右側に階段、左側に幾つか部屋がある廊下に出た。
「ほえぇ～広いな～！」
俺ん家の何倍だ！？
そう思いながら天井や壁やらを見ながら下へ降りる階段へと歩く。
そして階段をトントンと降りる。
そう、トントントント

と後ろから声が聞こえた。よく聞き慣れた声だ。
「おっさん！！・・・ん？」
後ろを見るとおっさんとそのおっさんの後ろにさっきの子供達が腕やら足やら髪やらにしがみついている。
少し警戒しているみたいだ。

・・・可愛いなぁ～。
ハッ！！俺こんな奴だったか！？ま、いいか。子供は誰でも可愛いもんね～！
「おぉ、こいつらか？俺の子供だ！！」
おっさんは笑いながら言う。
おい！！これ全員か！？奥さん頑張りすぎじゃない！？
「パパ～・・・」ギュッ
ある子がズボンの裾を引っ張る。あぁ！何かこうキュンキュンする！！
「あぁ、悪かったな！よく教えてくれくれたな！偉いぞ～！！」
おっさんが子供達の頭を撫でる。
ということはこの子等が教えてくれたんだ。
俺は子供達に近づき、体を皆と同じ視線に落とす。

子供達はビクッと体を動かすと小刻みい震え、ズボンなどに力を入れることを一層強くしたのが分かった。
あら～やっぱり怖いのかな～？そりゃこの子等からすれば俺は変態に見える事だろう。
しかしお礼ぐらいは言いたいから。
俺はそっと手を子供の頭に乗せようとする。その子は目をギュッと瞑る。
？打たれるとでも思ったんだろう。しかし俺はゆっくりとその子の頭に手を置き頭を撫でる。
すると子供は目を開け俺を見てきた。可愛いなぁ～。目なんかクリ

ックリ！！顔もポーっとしてるし。
「ありがとね！！助かったよ！！」
俺は出来るだけ優しい笑顔でお礼を言った。
下手したら優しいじゃなくて厭らしい顔になってしまうからだ。
その子は顔を赤くし隠れてしまった。
やっとお礼が言えた・・・なんかすんごい疲れるな・・・
ま、それ以上の収穫あったからいいけどさ。
「良かったな！」
おっさんはそう言う。
その子はコクンと小さく頷く。
あぁ～！！可愛いわ～！！
小さい頃の詩音もあんな感じだったなぁ～！
ま、あんま覚えてないけど。

「ってかおっさん。此処なんだ？全然下に降りれないし。」
「あぁ、これか？これは訓練用に造って貰った不思議な階段だ。」
訓練用？
「ほう。例えばどんなのに使うんだ？」
「ずっと階段を逆立ちで降りたりとか。全力で駆け下りたりとか？」
俺は驚愕の顔になる。
さ、逆立ち！？
俺出来ないよ！！すぅげぇや！だからムキムキなんだ！！
俺体育の成績悪すぎて皆に馬鹿にされた事があったよ！！
唯一出来るスポーツが水泳だけだったからな。
その時、皆俺が女子の水着見て興奮してやる気出してるとか言って
俺一週間ぐらい女子と口利いてくれ無かったよ！！あの時は流石に
殺意が芽生えたな。

「ま、すぐ上に戻れるのが一番いいんだがな！」
え？

「それってどういう・・・？」
「ん？上に戻ってみな？」
俺は言われた通り階段を上に戻る。
するとすぐ階段が無くなりさっき見た階に戻っていた。
嘘おおおおおおおおおおおおおおおおおお！？
「なんでえええええええええええ！？」
俺は叫んでいた。
「だから言っただろ？不思議な階段だって。」
「何冷静なんだよ！！」
「まぁ落ちつけって。こいつらに嫌われたくないだろ？」
あ。
俺は子供達に視線を向かわせると、ボーっと俺を見ていた。
しまった！
驚かせたか！？
「いや、セーフだ。」
「そっか良かった・・・あれ？おっさん今心読んだ？」
「いんや。ただヤバいか！？って顔してたんでな。」
何という洞察力！！
「パパ～戻ろ～？」
「おぉ、そうだな！戻るか！坊主は後ろ着いてきな。」
「は～い。」
そう言うと俺はおっさん達が上がって来るまで待ち、前に行ったのを確認した後、後ろを歩く。
その時気付いた。
子供達がそのまま金魚のフンのようにおっさんの後ろにしがみつき引き摺られているのに・・・

・・・・・・痛くないのかな？

4話：無限階段事件！（後書き）

誤字脱字

感想待ってます（＊≧∇≦）ノ

5話：居候になりそうです！！

おっさんの家の様な所を彷徨い5分ぐらい。
階段を下り、歩き、また下り、歩きの繰り返しだ。
いつまで続くんでしょうか。
しかし、此処は喜ぶところなのかもしれない。何故なら・・・
「おにーちゃん。おんぶー！」
「はいはい待ってねー！」
子供達とやっと仲良くなれたんだ！

いやー、長い道程だった。
たまに後ろを見てくる子供達に優しく微笑んだり、手を降ったりと健闘した結果、この嬉しさを勝ち取ったのだ！！
こっちに来た時は涙が出るかと思ったよ。いや、泣いたけどさ。
キャッキャッと肩車やおんぶをしている子供達が騒ぐ。
おわわわ落ちるから！
あんまり動かないで！
ギュと肩車をしていた子供が俺の顔を引っ張る。
痛くは無いが、視界が狂う。
「こ～ら！あんまお兄ちゃんを困らせちゃダメだぞ？」
おっさんが後ろを振り向き子供達を優しく叱る。
俺に気を使ってくれたみたいだ。
おっさん・・・嬉しいけど何かおっさんにお兄ちゃんなんて呼ばれると身体中に虫唾が走るんだけど？
そんな事を心で言ってますけど本当は感謝してますよ。

そして階段を降りる為に子供達を降ろす。
すると子供達は顔を顰(しか)め、俺を睨む。可愛いなぁ～全く！
でも・・・

「ごめんな？危ないからってお父さんがこっちを睨んでるから。」
そう。
おっさんが俺を鋭い眼光で睨んできたから逸早く危機を察知し子供達を降ろしたのだ！
偉くね？誰か褒めて！？
降ろした後のおっさんは普通の優しい顔に戻り、階段を降り始める。

怖え・・・
子供達の事になるとあんななるのかよ・・・
『おにーちゃん早くぅ！』
皆が俺を急かす。
「はいはい今行きます。」
俺も階段を降り始める。

「よっし！到着！」
おっさんは階段を降り終わると振り向き言う。
子供達も降り終わり、俺で最後みたいだ。
「やっと一階まで降りて来たのか・・・」
長い道程だった・・・本当に。

「おにーちゃんあそぼー？」
女の子がズボンを引っ張る。
はへ？
ま、まだ動けるの？俺ヘトヘトなんですけど？
「ごめんな～？今からお兄ちゃんはパパと大事なお話なんだ。それが終わったら。な？」
おっさんが女の子をあやす。
大事な話って何！！
「あーい。」
女の子はしょうがねぇな。みたいな返事をし、皆と何処かへ走って

行った。
そう言えば、
「なあ、おっさん。質問していいか？」
「ん？なんだ？」
おっさんは間抜け面で聞き返す。
「あの子らって本当におっさんの子か？」
そう。これが質問。
あんな沢山の子がおっさんの子供だったら尊敬するが、あり得ない。
考えたくもない。
「いや、あいつ等は俺の子じゃねぇ。」
やっぱり。
「此処で話すのもなんだ。居間に行こう。」
「あぁ。」

数十秒後に居間らしき所に来て座り込む。
居間には俺とおっさんだけ。
何この恐ろしさ。
さっきの質問がやばかったな。
汗ダラダラ出て来やがる！せなかがヌルヌルする。
「質問の答えだが。」
静寂を切り裂いたのはおっさんだった。まあ、俺から切る気なかったし。いや、切る勇気がなかった。
「あいつ等は孤児だ。」
孤・・・児
孤児って親が居ないっていうあの？なんで？
「知っているかもしれねぇけど、この国は戦争中でな。色んな理由で子供が1人になってんだ。それを俺が見つけて親代わりって訳。」
戦争は悲しみしか生み出さないとはよく言ったもんだ。全くその通りじゃないか。
戦争で生まれる物は全て悲しい物じゃないか。

決して良い物なんかないじゃないか。
なんで戦争なんてするんだろう。
なんて自分に問題提起する。
「おい坊主。あまり深く考えんな。頭がおかしくなるぞ？」
おっさんのこの一言で我に返る。
「あ、ごめん。んじゃ次。」
そうだよな。俺が深く考えてもダメだよな。
軽く行こう軽く。
そう思いながら次の質問をする。
「この家って何階建てなの！？」
ガクッ！
胡坐をかき肘を立て手を顔につけていたおっさんが転ける。
あれ？俺変な質問した？
「お前さ～。何この質問の重さの差。」
質問の重さの差？
あぁ、さっきのシリアスっぽい質問から何でこんな間抜けな質問になるのかってことか？
仕方ないじゃん！！気になるんだから。
しかも何か軽い質問と思ったらこれが一番軽かったんだもん！！
「まぁいいか、１２階だ。」
高いよ！！
なんでだよ！！

「もういいだろ？こっからは俺の質問だ。」
まだ質問したい事あったんだけどな。仕方ないな。
「はいよ！何でも来い！！」
「まず、お前これからどうすんだ？」
おっさんは真剣な顔つきで聞いてくる。
「これからって？」
よく意味が分からない。

「あーあれだ。寝泊まりする宛てはあるのかって聞いてんの。」
「いや、ないけど・・・まさか!!」
こんな質問だけは勘が働くぜ!!
「まぁ考えてる通り、落ち着くまでここに住むか?」
おっさんがニコニコしながら聞く。
おじさん最高!!やっぱあんたはいい人だよ!!
「住む住む!!いいのか!?」
「あぁ!俺は構わないぜ!子供達も喜ぶだろうしな。」
なるほど!!
「d(´∀`o)サンキュー!!」
「(★`・ω・)b当然だ」
おっさん!輝いて見えるよ!!
「よし!!そうときまればあいつ等に知らせるか。」
おっさんは立ちあがると子供達を探しに行こうとする。
あぁ、背中がでかく感じるよ!!
「お願いします。」
「任せとけ!!」
横を向き後ろにいる俺を見て親指を立て凛々しい顔をする。
そいでおっさんは居間を後にする。

あぁ〜あの子達どんな顔するかな?
何か楽しみだな〜!!

5話：居候になりそうです！！（後書き）

読んでくださって有難う御座います＾＾

6話：居候になります。（前書き）

今回は短めです^^；

6話：居候になります。

おっさんが子供達を探しに行って数分の間俺は部屋を物色する。
詩音と違うぞ！？
そんな事をしていると
「ただいま～！！」
『まー！！』
元気な声でおっさんと子供達が入ってきた。
「おかえりー！！」
おっさんのまーを繰り返し挨拶をする子供達。いやー和むわー。
「おかえり～」
俺は動き回ってた体を止め、視線をおっさんのいる方に向ける。
「ん？なーにやってんだ？坊主」
「いや？特に何も？」
「そうか？」
あっぶねー！物色してたなんて口が裂けても言えねえ！！そんな事を言ったら俺がコツコツと詰めて来た皆との友好関係が音を立て崩れて行く！！
「それよりパパー。じゅーだいはっぴよーって何ー？」
その言葉を聞き俺はおっさんのとこまで瞬時に動く。
そして近づき、片手で声を漏らさないように隠しながら小さな声で喋る。
「おっさん！まだ言ってなかったのかよ！」
俺てっきり子供達のいる前で発表したとばかり思ってたよ！読みが甘かったのか！
「すまんすまん。でもよかったんじゃないか？こいつ等がお前の目の前ではしゃぐの見れるし。」
成る程。そんな考えがあったなんて。

「流石だ！おっさん！」
なんか、俺も心変わり早くない？人の事言えないって言うけど本当だな！！あんまり同意したくないけど、本当だしね！！
しかもさっき程ではないとはいえ、おっさんが輝いて見えるよ！！

「おう！もっと褒めろ！」

おっさんがそう言うと俺には見えた輝きがそっと消えた。
なんで偉そうなんだよ！！
ほら！！輝きが消えちゃったけど！？良いの！？
いや、結構良い事したとは思うけども！？そんな大層な事してねぇじゃん！？
かっこいいと思った俺が何かバカみたいじゃん！！
バカだけども！！
しかも褒められる方は嬉しいかもしれねぇけど、褒める方はなんかイラついたり、相手への好感度が激減すると思うぞ！？
それもそんなでかい態度だと＋αでな！！

ま、今のおっさんにはそんな事言っても反応ないと思うけどなｗｗｗ「ん？んな訳ないだろ！？ｗ」とか何とか言いそうだ。

そんな事より・・・
「強くて優しいとーってもイケメンだけど少し頭が上手く動かないすごいおっさん！！いい加減話進めませんか？」
俺は少し皮肉を込めて言う。
あれ？皮肉ってこんな感じ？
知らん。

「むふふ…仕方ないな。それでは進めてやるか。あれ？なんか馬鹿にした？」

おっさんが変な笑い方をする。
どこかのいやらしいおっさんみたいな・・・
おおお何か寒気して来た！！
「そんな訳ないだろ？」
俺は嘘をついた。
「だよな！」
馬鹿やっぱり！！

「よし！いいかお前等！！これから重大発表をする！！心して聞けよ！！」
おっさんがそう言うと子供達はじーっとおっさんを見つめる。
子供って集中力が凄いって聞いたけどこれ程とは…
俺も子供だけど。
するとおっさんが思いっきり息を吸い、
「今日からここにこの糞生意気なお兄ちゃんが住みまぁぁぁす！！」
と叫びを上げる。
当然俺は
「おらぁぁぁぁぁぁ
筋肉ゴリラァァァァァァァァ
てめぇぇぇぇ！！
やっぱ気づいてんじゃねぇかぁぁぁぁぁぁ！！
腹癒せかこの野郎！！」

・・・なんて言えるわけもなく
おっさんにアイコンタクトした。

おっさんはドヤ顔でこちらを見る。
「どうだ参ったか」と言わんばかりのドヤ顔だった。

あの野郎・・・ぜったい気づいてやがる。
はっ！それより子供達は！？
俺は子供達に視線を戻す。

すると聞こえたのは・・・
『やったぁー！！』
「おにーちゃんすむの！？ほんとー！？」
「いつでもおにーちゃんとあそべるー！！」
などの歓喜だった。
俺に群がる子供達。
あ、俺もう死んで良いかも。

6話：居候になります。（後書き）

明日からちゃんと進めていくので
今日は大目に見てください><；

7話：その本の名は・・・（前書き）

タイトルの意味は
最後を見ればわかります！！

当たり前ですねｗｗｗｗ

7話：その本の名は・・・

子供達に囲まれ萌え死にしそうだった俺は
「皆これから宜しく！！」
子供達に挨拶をしていた。
あのまま死んでも良かったけどそうなると子供達と遊べなくなるしな。

『よろしく～！！』
子供達は手を挙げ挨拶を返してくる。
可愛いなぁ～！！もぅ！！お持ち帰りしたいぐらいだよぉぉぉぉ！！
最も、俺には帰る家がないけど。

「まぁ、これからまた仕事あるから家を出るけどお前はこれでも読んどけ。」
そう言いおっさんが何やらガサゴソと紙袋をあさる。
「ホイ。」
おっさんが袋からた出したのは分厚い本だった。しかも数冊。
「何これ？」
「何って本だよ、本。」
知ってるよ！！俺そこまで頭は馬鹿じゃないよ！！
何！？おっさんは俺が本も分からないと思ってる！？
馬鹿にすんなよ！？

「そうじゃなくて！！何の本！？」
「あぁ～、そっちか」

おっさんは顎に手を当てると、ウンウンと頷く。
「どっちだよ！！」
絶対おっさん俺本分かんないとか、字読めねぇとか心配してんだろ！？
ふざけやがって！！
「背表紙見ろよ。表裏は模様しか書いてないから。」
ん？背表紙？そっかタイトル書いてるもんね。ってか裏表模様だけなんだね。
ここがこっちの世界と俺のいた世界の本の違いか？
ほら、俺のいた世界って表紙にもタイトル書いてんじゃん？
けどこっちタイトル書いてねぇんだよ。
まじで。
俺は背表紙を見るために数冊の重なった本を下し、一番上の本を取り上げ背表紙を見る。
いや、結構重いんだよ。一冊一冊重みがあって、持つのも大変＞＜
そして大変な事に気がついた。
じ・・・・じが・・・・・・
読めねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！
何か書いてんのは分かる！！
けど読めねぇ！！
なんだこの文字！！
さっき字読めねぇとか思ってなかったけどこれは本当に一大事だ。

もしこれがおっさんに知れたら・・・

～想像～

「おっさん。字、読めねぇや！」

「え？ｗまじ？ｗｗｗ嘘でしょ？ｗｗｗｗ」

～終了～

とかになりそうだ。

でもここは読めないのは嫌だ。

・・・仕方ないか・・・・・・

「おっさん。」

「ん？なんだ？」

ボケたように聞いてくる。

人が真剣に悩んでんのにその態度なんだよ！！

だからあんたはおっさん止まりなんだよ！！

「・・・字、読めねぇ。」

さぁ！！嘲笑うがいい！！

「んな事だろうと思ったぜ。」

おっさんは笑顔で答える。

嫌な笑いとはではなく、ただ純粋な笑顔だった。

多分予想していたんだろう。

「ちょい待ちな。そこに座って目ぇ瞑ってな。」

俺は、頭の整理が付いていなかった。

え？なに？そんな事？ってことはおっさんはこれを見越していたのか？嘘だろ？あのＯ☆ＢＡ☆ＫＡ☆のおっさんが！？ありえねぇ！！

しかし、そう思いながら俺は腰を落とし胡坐をかき目を瞑る。

「・・・・・・・・・・」

少々沈黙が流れる。

そして何かが俺の額に触れる。この感触は、指か。

多分おっさんが指を俺の額に当てているんだろう。

という事は人差し指かな？

そんな事を考えていると、瞼の裏側でも何かほんのりと明るくなるのが分かった。

いったい何が起きているんだろう・・・

何秒かすると

「彼の者に知識を分け与えよ。」

と言うおっさんの声が聞こえた。

あれ？これって詠唱って奴か！？

あのテイ〇ズの術を発動する時に使うあれか！？すげぇ！！生詠唱だ！！

と、訳の分からない事を思う俺。何言ってんだろ。

そうするとどんどん光が薄くなり消えていく。

その消えた直後、頭に何かが入り込んで来る。

「よし！！もういいぞ！！もう一回見て見な？」

その言葉を聞き俺は目を開け、背表紙に目を向ける。

タイトル名は

「子供でも分かるディオジ・アースの説明本！！」

と書かれていた。

よ・・・
「読めるぅぅぅ

そうだ！！
「なぁ？兄ちゃんに決めさせてくれる？」
言いだしっぺなんだけどさ、皆で楽しめる奴がいいよね！！
「いいよー？」
「んじゃあさ！積み木やろうか？」
「でも積み木がないよ？」
ふっふっふ・・・そうでしたか・・・
「兄ちゃんは凄い魔法が使えるんだ！！見てろよ～！」
『うん！！』
俺は色んな形の積み木を想像する。
三角形、四角形などのスタンダードな形から
多角形まで想像する。

パッ！！
カラカラカラ・・・・・
と音を立ててどんどん積み木が手から出てくる。

『すごーい！！』
「へへへ！」

結構な量が出てきたので止める。
え？止め方？想像するのを止めれば止まるかなって思ったら上手く
いったよ！！
何事も発想だよね☆

「じゃあ何作ろうか？」
『おっきいおしろ！！』
「よーし！！お父さんをビックリさせてやろう！！」

『おー！！』

数時間後・・・・

俺は本を読んでいる。

え？積み木か？聞いてくれよぉ～！！

子供達が気を利かせてくれてさぁ～

～回想～

「おにーちゃん、本読んできていいよー？」

「え？でもまだ遊びたいし・・・」

「いーの！！後でおにーちゃんもおどろかせるの！！」

「そ、そう？んじゃぁお言葉に甘えて・・・・」

～終了～

ガチ泣きしたよ・・・

その代わり居間追い出されたけど・・・

それより他に何の本があるのかなー？

そう思い俺は本を持ち背表紙にあるタイトルを見る。

これこの中で一番分厚いけど何だろ・・・？
「えーなになに？魔術集・・・？おー！！魔法の本か！！」
魔術集の本を置き違う本を持つ。
「これはー・・・精霊集・・・精霊についてかな？・・・にしても集が多いな！！他にないのか・・・？」
そう思いながら次の本を取る。
「・・・百科事典」
なんか・・・まともだ・・・
お、これで最後だ。
「次はー・・・・・・・ッ！！」
俺はこれに目を奪われた。
あ、エ○本じゃないよ？
その本のタイトルは・・・・
「具現士の全て・・・・・」

7話：その本の名は・・・（後書き）

ちょっと長くしました！！

まぁいつも通りgd gdですが！

読んで下さった皆様！！

ありがとうございます！！

8話：レトン（前書き）

ちょい短めです><

8話：レトン

「・・・」

まぁ・・・何か在り来たりな名前だな。
俺はあの本をじっと見ている。読んではいない。
読むけど凄い不安なだけ！！うん！それだけだ！！
今読むよ！！
恐る恐る本の表紙を捲り目を通す。
最初のページに書かれていたのは目次だった。
ここはあんまりあっちの世界と変わりない。

～目次～

1．具現士とは？　3ページ
2．メリットとデメリット　19ページ
3．戦闘に対し　30ページ
4．実用化　57ページ
5．階級　64ページ
6．レトン　70ページ

などと書いてある。

「ま、基本から勉強だな。」
俺は3ページを開く。

右上に大きく具現士とは？とあった。
次に下の方に目をやると

「具現士、即ち、物などを具現化させる者なり。」
と誰かの言葉のように書かれていた。
そういや作者も言ってたな。
俺はどんどん読んでいく。

すると次に歴史と書かれたところがあった。

～歴史～
具現士の歴史は近年。
初代具現士、レトン・ライナが初めて使用したとされている。
最初に使用したのは3歳の頃。
お母さんの目の前で小さなクッキーを具現化させたという。
それから何年かすると他にも具現化ができる人も増え、一躍具現士の存在が有名となった。
レトンが１８の頃にエルストリアの騎士団に入り団内で具現部隊を発足。
当時の最高人数は数十人とやや少なめだったが、他の国具現士とは戦闘の力が桁違い。
ディオジ・アース最強の部隊とされていた。

「へぇ・・・ってかディオジ・アースってなに？
しかも目次のレトンって人名か。紛らわしいな。」
俺は不満ながらも次のページに目を移す。

当時の具現士の合計人数は合わせても数百人にしかならなかったという。
そのためエルストリア以外の戦闘時の主力は大半は魔術師だった。
それに対しエルストリアだけは具現士を主力とし戦いに勝利したと

いう。

「へぇ～すごいもんだな。」
俺は次のページを飛ばしレトンの項目までページを捲る。
ん？気になんじゃん！！
初代具現士様について知りたいよ！！
えーっと確か７０ページだっけな。
基本から勉強とか言ったけど耐えられません！！
俺は私欲に負けた。情けない。
パラパラ・・・
「お、ここか。」
俺はそのページで捲るのを止める。

そこには２０代ぐらいの男性の写真が１ページにでかく写っていた。
しかもカラー。
髪は黒がかりの茶髪、目は茶色、肌はとても白い。
きりっとした顔つき。両手には俺の持っている刀が握られている。
「この人が・・・」
俺はその写真を触ろうとすると・・・
「ただいまー」
誰かが帰ってきた。

俺は本を慌てて閉じ、残りの数冊の本も整頓し正座をした。
・・・何でだろ。

9話：案内

俺は正座をしながら
相手に対しての言い訳を考えていた。

さっきの声からして相手はおっさんの奥さんってとこか。
俺も鋭くなったもんだな！！

それより、この短時間で言い訳を考えなければ！！
俺はない脳味噌をフル回転させ考える。

聞こえるのはドア越しにいる子供達の騒ぐ声。
楽しそうだなぁ～・・・

いっそのこと子供たちに知らせるか？
その前に入ろうとしたら絶交されるだろう。
「ダメっていったのにー！！」
とか言ってきそうだ。
そしたら俺人生の半分損してる感じがするよ・・・

だったらストレートに俺は居候だ！！とかでも言うか？
・・・いや、態度でかすぎだろ！！

絶対「あんた人様の家に対してその態度はなんだ！！」
とか言われそう・・・

そんなことを考えていると
廊下の曲がり角に影が映る。

もう駄目だ！！
適当に行く！！
うおおおおおおおおおおおおおおお！！

曲がり角に足が見え、顔も出そうなとこで俺は三つ指を揃え頭を下げた。

そして・・・
「お帰りなさいませぇぇぇぇぇぇぇぇ！！今日から此処でお世話になりますぅぅぅぅぅぅぅ！！タケトと言いますぅぅぅぅぅぅぅぅ！！不束者ですが宜しくお願いしますぅぅぅぅぅぅぅ！！」

思い切り叫んだ。
なんか最後がお嫁に行く人みたいなセリフになってしまったがさっきの考えた答えよりはマシだろう。

『・・・タケトか？』
と言う質問が聞こえた。一人は女、もう一人は男の声だった。
はい？
「あら、リクちゃんとネルちゃんのお友達かしらぁ～？」
少し色っぽい声で人の名前を出す女の人の声。
俺の疑いが確信に変わった時だった。

ややややっぱりリクさんとネルだぁぁぁぁぁ！！
でも何で一緒にいるのぉぉぉぉぉぉ！？

「フム。この刀、タケトで間違いないな。なぁ、ネルちゃん」
この声リクさんだ。
・・・あれ？なんか刀だけで判断された気が。
「俺は男だ。ちゃんで呼ぶな、バカ。」

ネルちゃん。何が確かなの？
俺の持ってる刀で判断したの？それとも髪形とか服？
二人に対しての不安が募る。

その時、バンッと思いっきり後ろのドアが開き俺と刀と数冊の本がドアと壁の間に挟まれる。
「ブフォウ！！」
などと変な声を出してしまった。
この時の顔と動きをスーパースローカメラで見てみたいものだ。
俺は頭を下げたままだったので後頭部、背中を壁にぶつけてしまった。
本は重ねていたのがバラバラになり、刀はそのまま横にすれた。
痛ってぇぇぇぇぇぇ！！
それよりドアを開け子供たちが一斉に三人を囲む図が想像出来る。
キャッキャキャッキャと飛び跳ねる音が聞こえる。
ちょ・・・助けて・・・
この願いが通じたのか
「あらあら、大丈夫？」
女の人がドアを押し戻し閉めてくれる。押し付けられた狭い空間、視界が一気に広がった感じだった。た、助かったー！！
「ありがとうございます・・・助かりました・・・」
感謝感謝・・・下手したらこの国守る前に俺が死んじゃうとこだったよ。
「やはりタケトだったな、バカ。」
ネルの顔が見える。リクのほうを向いているからリクに同意を求めているみたいだ。でも今さっきバカって聞こえたんだけど・・・

「黙れ。ネルちゃん。」
リクは喧嘩を買うようにネルに挑発する。
なに、この子供みたいな喧嘩。

「それより顔をよく見せておくれ！」
女の人は俺の顔を両手で掴み自分の顔に近づける。
ちょい！！待って！俺そーゆーの弱いから！！
まだチェリーボーイだから！！
多分俺の顔は林檎のように赤いだろう。
自分で赤くなるのが分かる。キャー恥ずかしいー！！
それよりよく見ると奇麗だなー・・・吸い込まれそうだ・・・
「ミースさん！近すぎます！！」
このリクさんの一言で我に返る。
うおっは！！近い！！鼻血が出そうだ！！
「あら？嫉妬かしら？」
ん？シット？ｓｈｉｔ？
「ッ！！違います！ミースさんにはデガルドさんと言う列記とした夫がいるじゃないですか！！」

リクさんが必死に抗議する。
ほぅ・・・なんとなくだが理解してきたぞ。
おっさんの名前がデガルドって言って、奥さんがミースさんって言う奇麗な人がいる・・・と。
んでこの類から言ってリクさんとネルは、俺と同じ居候ってとこじゃない？
そのミースさんが俺に近づいて、おっさんと言う夫がいるのにそう言う事をするのはおかしいと。

「そうね♪それじゃあ新しい居候さんにお部屋教えなきゃ♪ついて来て。」
そういうとルンルンとスキップをしながら歩いていくミースさん。
「お願いします。」

「それじゃあ俺はこいつ等の相手しとく。」
ネルは居間へ向かい歩きだし、子供達はネルを囲みながら今に入っていく。
「私はミースさんを監視するためについて行く。」
と俺を横切り、ミースさんの後を追う。
「あぁ！待ってぇぇぇ！！」
俺は後を追い軽く小走りをする。

やっと追い付き、階段を上がり、たまに雑談をしながら楽しく歩く。
家族の話とか、おっさんの話とか、とにかく楽しく歩いている。
いやぁ～ミースさんっていい人だなぁ～ってつくづく思うよ！
色々お話してくれるし、気遣いしてくれるし、おっさんは幸せ者だなぁ～・・・
俺も大きくなったらこんな奥さん欲しいよ。
まぁ、結婚できたらね。
それに対してリクさんは無言。一言も喋らないで腕を組み、歩いている。
俺はミースさんと喋りながら、リクさんに気を使い、さっきぶつかった刀を気にし、本を両手で持ち歩いている。多分この中で一番気を使っているのは俺だろう。頑張ったな。俺。
そう思いながら足を進める。

１０話：お部屋到着！！（前書き）

ちょっと
遅すぎですかね？

１０話：お部屋到着！！

俺は、その後トイレ、シャワールーム、ジム等々を詳しく教えられ、今３階の一番端の部屋の前に立っている。

「はーい！！ここが居候さんのお部屋でーす！！」

ジャジャーン！！とでも聞こえてきそうな位のポーズを取り、扉を強調する。

「おぉー！！」

いや、まだ中に入ってないんだけど、ここまでされると・・・ね？

しかもなんかただならぬオーラを感じる。

「んじゃ、私お夕飯作らないといけないから、後はリクちゃんに任せる！」

「え？あのちょっと…」

リクさんは何だかオドついてミースさんの方に視線を向ける。

「んじゃ！そゆことで！」

と言うと電光石火のごとく、廊下を一直線に走り、階段を飛び降りて行った。

何というスキル・・・

リクさんはと言うとまだミースさんの消えて行った方に手を伸ばしていた。

俺は馴れ馴れしくリクさんの肩に手を置き、

「諦めるんだ・・・もう帰ってこないんだ・・・」

と迫真の演技をする。

するとリクさんはバコッと俺の腹に肘打ちを食らわせる。俺は当然痛くて倒れています。

「ふっつおおおおお…」

あ、変な唸り声でゴメンね☆

でも本当に痛いんだよ。あっちの世界のチンピラよりも痛かったの！

え？何でわかるって？そりゃ、殴られたからな。

～回想～

「ちょい、お金持ってない？」

「へへ・・・」

「カバと骨にあげても使い方分からないんじゃないんですかね？しかし、喋るカバと骨がいるなんて知らなかったよ。うんうん。今の世界何が起こるか分からないものだねぇ～。」

「この野郎！！舐めた真似しやがって！！」

「舐める訳ないじゃないですか。汚い。」

「んなろ！！」

「ふおっ！」

～回想終了～

お、思い出したらますます痛くなってきた・・・

しかし、何であの時殴られたんだろ・・・

「フン！いい気味だ。」

リクさんは腕を組みぷいっと顔を逸らす。

ひ、酷い！！

それより、入りたい・・・

俺はうつ伏せのまま体を引きずり、ドアノブに手を掛けようとするが、ほんの少しだけ届かない。腕がプルプルと震えてきた。つ、辛い。

ガチャ・・・

と、ドアノブが回る音がする。

しかし開けたのは俺ではなく、リクさんだった。
「ほら、開いたぞ。」
リクさんは何ともまぁ、無愛想な声で話すなぁ。
しかし、気づくとこはそこではなく、最初に開けたのはこの部屋の住人ではなく、ただの知り合いだというところだ。
普通最初に開けるのはここの住人さんでしょ！？
「有難いけどおおおお！！俺が開けたかったよおおおおお！！」
「な、何だいきなり。」
「ふおおおおおおおおおおお！！」
俺は痛みを忘れ立っていた。
「あ、立てた。」
「フッ」ドオン！！
今度は部屋の中に蹴飛ばされ、俺は俺の部屋の中でぶっ倒れた。
な、なんで・・・？
俺はもっと普通に入りたかっただけなのに・・・

～想像～
「わぁ～！！すごぉ～い！！」
「よかったな。」
「うんー！！」
アハハハハ・・・
ウフフフフ・・・
～想像終了～

ってな感じで入りたかっただけなのにぃ・・・

「はぁ・・・まぁいい。早く支度をして下へ降りなよ？」
「ふぇ？なんで・・・？」
俺は倒していた体を起こし、リクさんに視線を向け尋ねる。
「デガルドさん何も聞いていないのか？」

おっさん？何も言ってなかったけど・・・
俺は首を横に振る。
「そうか。いいか？よく聞け。これから飯を食った後、軽く特訓をつけろと言われたんでな。」
「と・・・特訓・・・？」
「そうだ。隊長格が直々に特訓をつけてやると言っているんだ。有難く思え。」
「はぁ・・・」
「そういう事だ。私は下に行っているぞ。」
そう言うとリクさんは進みだす。
俺は一人ポツンと部屋に残された。
「・・・はぁ」
俺は部屋を見渡し、家具を見る。
あった家具は、ベッド、タンス、折りたたみ式卓袱台、小さな箱だけだった。
ｏｈ！　シンプル！！

俺は本をその場に置き、刀を擦る。
怪我とかついてたら可哀想だもんな。
そう言えば、片手で持つの辛いなぁ～・・・

うん。ずっと握りっぱ。
だから結構汗が付いちゃってるし・・・
「ごめんな～。汗つけてさ。」
そう思いながら、俺は服で剣の鞘、柄を拭う。
「さて、そろそろ下に行きますか。」
俺は刀を拭った後、本を奇麗に重ね立つ。
「どっこいしょういちっと！！」
掛け声をかける。
いっつもこんな感じで立つと、周りの目が痛いんだ。

要とかにも「おっさんか！！」とか言われるし。
気に入ってるんだけどなぁ～

そう思いながら、またニ刀を片手で持ち、部屋を後にする。

１０話：お部屋到着！！（後書き）

誤字脱字、感想など
待ってます＾＾

11話：変態との模擬戦闘！！

下に降りるとネルとリクさんが待ち受けていた。
「・・・遅かったな。」
ネルが言う。
しょうがないよ。だって道に迷ったんだから。うん。少し前から気付いてたけど、俺って方向音痴っぽいね。

「しょうがないぞ？影の者。相手はタケトだからな。」
リクさんが、呆れ顔で言う。
どう言う事だぁぁぁぁ！
「成る程な。」
「納得すんな！」
ったく。俺を一体なんだと思って・・・
「よし。それでは行くとするか。」
そう言い、2人は階段を登る。
あれ？登るの？俺の降りて来た意味は！？
「残念だったな。また登り直しだ。」
ネルが振り返り話す。
「だったら俺の部屋まで迎えに来てよ！！」
「大丈夫だ。何のメリットも無く登り降りをさせたと思うのか？」
「うん。」

本当の事言ったのに、何故か打たれた。
あー顔がヒリヒリするー！！

そして、俺の部屋がある3階を越し、5階に着くと、あるドアの前で足を止める。

「ここか？」
「そう。」
「んじゃ！入ろうぜ！！」
俺はドアノブを回し、開ける。

「おうぅぅいえぁぁぁぁ！！」

そして閉める。

うん。今のは見えなかった。
そうさ。幻さ。うん。あんなおぞましい者なんて存在するわけない。
何焦ってんだろ。あんなパンツ一丁腰振って変な奇声上げる生物なんて居るはずない。

そ、そうだ！！リクさんに聞こう！！
「あのぉ～リクさん？」
「なんだ？」
「さっきの見ました？」
「あぁ、見たぞ？」
リクさんはそれがどうしたと言わんばかりに首を傾げ俺を見る。
嘘だろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！
見たのぉぉぉ！？

そんなことを考えていると
「さっさと入れよぉぉぉぉ！！」
「嫌あああああああ！！」

さっきの変態が出てきた。
「おい。スカリオ、その格好どうにか出来ないのか？」
名前はスカリオというらしい。
「おぉ！リクちゃん！！バッチリトレーニングしてたぜ！！」
しかも話を聞かない俺より馬鹿みたいだ。

「まぁいい。紹介しよう。スカリオだ。こいつはこう見えても騎士団の副隊長なんだ。」

リクさんはため息を漏らしながら呆れ顔でスカリオを指さす。
可哀想に・・・
それに比べ
「エッヘン！！」
スカリオ（変態）は胸を張る。

「・・・」
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ・・・・
信じれない。
と言うか信じたくない。

「ま、まったまた～。冗談きついぜ！！」
「いや、本当だ。」
今度はネルが答える。
「こいつの優秀さには目を疑う位だ。後はこの変態質を治せれば・・・」

「ネルさん。褒めても何も出ないっすよ～！！」
「・・・」
や、やべぇ・・・
ネルが言葉を無くしちまった・・・

「・・・そ、それより特訓ってまさか・・・」
「あぁ、コイツとの模擬戦闘。簡単にはタケトの戦闘力を測るためにね。」
「ん？何だこのガキ。」
すか・・変態でいいや。
変態が俺を見て言葉を発する。
あ、俺の存在無かったんだ～。

「リクさん。チェンジ。」
俺は親指で変態を指す。
「おい！！何だこいつ！！」
「しょうがないなぁ・・・」
「待ってよ！！」
途中で変態が割り込んでくる。
んだよ、もう少しでチェンジ出来たのに。
「リクちゃん！！俺真面目にやるから！！」
「変態・・・分かった。許可しよう。」
あ、変態って言った。
残念な奴だな。

「あざーっす！！よし！ガキ！勝負だ！！」
「いいぜ！こんな変態に負けてたまるか！！」
俺と変態は睨み合いながら部屋に入り、部屋の真ん中で対峙する。

「なぁ、ルールは？」
変態がネルに聞く。
「一応何でも有りだ。」

「そっか。んじゃあさ、ハンデは？」
俺に聞いてくる。
ハンデ？
「いらねぇよ。そんなの。」
「良いのか？」
リクさんが心配そうに聞いてくる。
「あぁ！！大丈夫さ！！」

「フッ！余裕ぶっこいてんのも今の内だぜ！！」
そう言い武器を持つ。
あれは・・・杖か？

「それでは始め！！」
と言うネルの戦闘開始の合図が響く。

１１話：変態との模擬戦闘！！（後書き）

頑張りました！！

１２話：頭が痛いです＞＜（前書き）

初めての戦闘シーン。
上手く表現できてればいいです！！

12話：頭が痛いです><

その瞬間、変態の足の下に魔法陣が出来る。
魔法使うの！？嘘ぉぉぉぉぉ！！
ハンデ貰えば良かったー！！

そう思っても手遅れ。
変態の足の下にあった魔法陣が動き、俺の方へと凄いスピードで動いてくる。

何が起きるんだ！？
俺はギリギリまで引き寄せバックステップで避ける。
すると、
「ハッ！！」
変態の掛け声と共に魔法陣が爆発した。

「グオッ！！」
俺は爆風の風力で部屋の壁まで飛ばされた。
クソッ！！
俺は反撃するために跳ね上がり、刀を握りしめ、飛び出す。
しかし軽率だった。俺は2本刀を持っているのだ。だから刀を抜いたとしても、力が激減してしまうだろう。しかも重いのだ。何のトレーニングもしていない俺にとって抜いて片手で刀を操るのは不可能。
しかし、体が勝手に動いていた。
何に動かされた訳でも無く、自分の意思で。

爆煙に包まれている部屋の中を相手に向かって駆け出す。

見えた！！

俺は鞘に収まったままの刀で人影を斬る。
しかしそれが当たる感覚が無かった。
それどころか忽ち赤い光が人影から放たれまた爆発する。
しかもさっきよりも近い距離で。
当然俺は吹っ飛んだ。
胴体が異常な感覚に襲われる。
触ると服を触る感覚が無く、触っていたのは自分の火傷した肌だった。
さっきの爆発で服が破れたのだろう。

「ッッッ！！」
声にならない痛みが体に走る。

わぁーお・・・こんなハードなんて知らんかった。
なんて余裕ぶっこいてる暇は無いな。

これが副隊長の実力・・・

俺はがたつく体でニ刀を杖代わりにして立つ。
「ハァッハアッ・・・」
息が上がる。喉が痛い。

あの変態何処行った・・・？
辺りを見回すがまだ爆煙に包まれている。
しかし、刀を片手に持ったままだと辛い。
そうだ。何か刀を収めるやつを造ろう。
俺は想像する。
パッとベルト状のホルダーを造った。

しかし、時間がなさすぎたのであまりしっかりした物は作れなかった。

幸い、あの変態からの攻撃は無く、俺はそれを慌てながら腰に巻き締め、刀をホルダーに収める。
まだ足元ががたつく。
「すまないな。今はこれで我慢してくれ。」
俺は収めた二刀の柄を片手で優しく撫で、構える。
まあ、俺素人だしどんな構えしているか分からないけど、よく見る構えをしていると思う。

「へぇ、それが噂の具現化って奴か。お前本当に具現士だったのな。」
何処からかあの変態の声がする。何処からか見ているのか！？

「辺りを見回しても無駄無駄！！」
何処からかあいつの笑い声が聞こえる。
「ッチ！」
俺はどちらかの刀を触り構える。所謂(いわゆる)抜刀の構えって奴だ。
「しょうがないなぁ。リクちゃん！！窓開けて」
「はいはい。」
ガタンと何か音がすると凄い勢いで爆煙が一定の場所向かって動いていく。
少し煙が残っているがある程度見えるようになった。
「これでいいだろ？来いよ。」
「言われなくても。」
そう吐き捨てて俺はまた相手へ突進する。

「掛かった！！」
すると、今度は目の前に魔法陣が現れる。

そんなんだと思ったぜ！！
「うらぁぁぁぁぁぁぁ！！」
走る足に思いっ切り力を加えスピードを上げる。
視界が眩む。これで決めなきゃ！！
「なっ！？」
変態は驚いた顔をしている。
すると案の定爆発したが、それは俺を捕えず空振りし爆発した。俺は一直線に変態に飛んで行く。
上手くいった！！この爆風を使って一気にたたっ斬る！！
俺はより一層柄を強く握る。
「あああああああああああああああ！！」
そして体を捩じり抜刀の体勢を取る。
「うえぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
変態は奇声を上げ焦っている。
これで終わりだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
「あああああああああああああああああ！！」
俺は一気に刀を抜いた・・・

と思った。
しかし何故かどんだけ力を入れても抜けない。
あれ？あれぇぇぇ！？
抜けないとなるとこのままじゃぶつかる！！ぶつかるって！！
こんの！！抜けろ！！抜けろ！！
俺は抜こうと力を入れたりするが抜けない。
「あああああああああああああああああああああ！！」

「ぬあああああああああああああああ！！」

俺は涙を流しながら、相手の腹に思いっ切り頭からぶつかった。
すると相手の体ごと壁まで吹っ飛び、凄い衝撃と共に体が押し戻される。
そして体が地面に着いたときに俺は意識が途絶えた。
その前に俺は思った。

俺この頃気絶し過ぎじゃね？

１２話：頭が痛いです＞＜（後書き）

誤字脱字、感想お願いします（≧∇≦）

１３話：刀の気持ち。（前書き）

最後、日本語になっているか分かりませんｗｗｗｗ

１３話：刀の気持ち。

変態ＳＩＤＥ

・・・あいつ完璧に俺っちを殺す気だった。
あ、俺っちは皆のスター、スカリオ・ビフォルマって言うぜ！！
そんなことより聞いてくれ。ちょっと前に具現士を名乗るガキと模擬戦やったんだけど、あいつの目俺っちを殺す気満々の目だったんだ。
幸い、あの刀は抜けないで体当たりで戦闘は終わったけど・・・
あの目を思い出すだけで背中に寒気と冷や汗が流れる。
なんであいつは俺っちを殺す気だったんだ？攻撃を与えたからか・・・？いや、そんな事だけで殺そうとは思わないはずだ。そんな奴はとっくに死んでいる。
俺っちはそのまま考え込んだ・・・

タケトＳＩＤＥ

「ハッ！！」
俺は勢いよく飛びあがる。
ここは・・・俺の部屋か。
腹に激痛が走る。
「いでででででで！！」
よく見ると腹には包帯がグルグル巻きにされ服は脱がされた状態だった。
首と頭もかなり痛い。
「そうだ。変態とやり合って、それで・・・」
俺は疑問を思い出し、辺りを見回す。

すると、ベッドの横にあの不格好なホルダーに収まっているニ刀を見つけた。
「なんで・・・抜けなかったんだろう・・・。」
俺は体をすこし捻りホルダーに手を伸ばす。少し腹がヒリヒリしている。
「いちち・・・・」
少し沁みる。腹を擦りたいが擦ると痛いので触れない。
俺はニ刀を見つめ、優しく鞘を撫でる。
「どうして抜けなかったのか教えてくれないかい？」
なんて喋るはずのない刀に問う。
「・・・自分で考えろってか。」
俺は勝手に解釈した。
そうさ。犬の言葉を解釈してたんだ。こんなの朝飯前だよ。
「そうだ！本に書いてるかも！！」
俺は本を探そうと刀をそっとベットに置き、ベットから降り探そうとしたが、足がガクガクして倒れてしまった。

「あたたた・・・」
体を起こすと前に置いたところに本は無く、本は無かった。
何処だ！？俺は四つん這いになりながら部屋中を探した。
本があった場所は折りたたみ式の卓袱台と部屋の壁との間に挟まっていた。
多分誰かが俺を運ぶときに邪魔だったから退けたのだろう。
しかし何でこんな見つけ難いところに置いたんだろう・・・
も、もしかして嫌がらせか！？まさかあの二人が！？だとしたら許せねぇ！！
不気味な笑みの2人が脳裏に映し出される。
後でお返ししてやる！！
と心に誓いながら、あの本を探す。
見つけた後、ベットに戻り刀を太ももに乗せながら、目次を開きレ

トンのページを開く。
パラパラ・・・と本独特の紙を捲る音だけが部屋に聞こえる。
「お、あったあった。」
ページを少し飛ばしたので戻しあの写真があるページをだし刀に見せる。
「ほら。お前達の主様だよ。会えて嬉しいかい？」
俺はよく見えるように刀を持ち上げホント同じ位置にする。
「俺はよく知らないけど、どんな人か教えてくれない？」
そろそろ俺は頭が狂ってきたのか、それとも疲れているのか刀に話しかける。多分寂しいんだろう。
「・・・へぇ、優しくって強かったのか。そりゃ君等が慕う訳だ。」
俺は笑顔で解釈をする。
それより本題に戻す。
その下の紹介文を見ると・・・

名前：レトン・ライナ
性別：男
年齢：享年３０
職業：具現部隊隊長
武器：刀
精霊：全て

エルストリアの具現士。
ディオジ・アースで初めての具現士とされている。
人情熱く、人柄も良く、よき理解者とされたため、英雄（ヒーロー）と呼ばれていた。
敵国からも尊敬され、他国との唯一の話相手兼ね、具現部隊という具現士初の部隊を発足。

その力は国一つを滅ぼすとされていたため、彼を敵に回すのは厄介とされていた。
彼はその力で何でも造っていたが、ある病気にかかり病死。
病名などは分かっておらず、立て続けにエルストリアの他の具現士も病死。
これは、全世界で知れ渡り多くの人が悲しみ、多くの人が喜んだという。
これを悲喜の螺旋と呼ばれ語り継がれる。

成績

１２２６戦中　１２２６勝　０敗

と書かれていた。

俺はそれを読み尊敬し、一人激怒した。

英雄が死んで喜ぶ・・・？

そんな奴の顔が見てみてぇよ。
見たらぶっ殺してやる・・・

より一層本を握る力が強くなる。

俺は傍(はた)から見れば恐ろしい顔をしていたと思う。
その時、誰かが見ている気がして驚いた顔つきで周りを見渡す。しかし誰もいない。薄っすら感じたのは悲しい感じ。それが頭に過(よ)ぎった。

ただの頭を過ぎっただけの感じだったのだが、俺をそう過ぎらせていたのは太ももにある刀のように思えた。

多分、怖い顔をしていたから怖くなったのだろう。

俺は微笑み、

「怖がらせてごめんね？疲れたから寝かせてもらうよ。」

と謝ってから眠りについた。

結局、刀については書かれていなかった。

何でだろ。

１４話：鬼

あの後寝て、眠りから覚めたのは夕方。
というと、約１日寝ていたみたいだ。
・・・て、おいいいいいいいい！！どんだけ寝てんだよぉぉぉぉ！！
俺は飛び起きると、窓から入る茜色の光が部屋を色彩る。
「どこのトワイライトタ〇ンだよ。」
そんな馬鹿を言っている場合ではなく、俺は慌てて飛び起き刀を持って部屋を飛び出す。
体に痛みは無く、逆に軽く感じる。
「これが翼が生えた感じってやつか！？」
などと馬鹿なことを考えながら、階段を降り居間へと向かう。

バンッ！！
と勢いよく今のドアを開ける。

そこには、包丁を持って胸ぐらを掴んでいる笑顔のミースさんと、掴まれて泣きじゃくっているおっさんがいた。二人とも俺に気が付き顔を向ける。
ミースさんはニコニコ顔で「あ、目が覚めたの？」と聞いてきた。
俺からしてみれば、永遠に目が覚めなきゃよかったと悔んだ瞬間だった。
おっさんはアイコンタクトで「Ｈｅｌｐ」と言っているように見えた。
俺は目が点の状態でドアをそぉーっと閉め猛ダッシュで部屋に逃げた。

「ぬぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
俺はガッ〇ュも顔負けのスピードを見せながら階段を駆け上がり、廊下を走り、自分の部屋の布団に潜り込んだ。
覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ覚めろ・・・
悪い夢なら覚めてくれぇぇぇ！！
ガチャ・・・とドアが開く音がする。
俺の願いも虚しくやはり今のは現実だと知らされる。そんでもって＋（プラス）で逃げろと言う警告も出ている。
無理無理！！
今逃げたって逃げれないって！！
そっと被っている布団に何やら違和感を感じる。おそらくミースさんが手で掴んで引っぺがそうとしているのだろう。
ハッ！！やれるもんならやってみな！！

その後のタケトの体験談。

Qそれで？その後どうされたんですか？

Aはい。その後布団を深く被り、端をよく握りましたが呆気なく布団を取られて見えたミースさんは、包丁を逆手持ちにして、「どうして隠れたのかなー？」ってニコニコして聞いてきたんですよ。

Qなんて答えたんですか？

Aそりゃあ、「ミースさんがおっさんを殺ろうとしたの見たから」なんて言ったら俺も間違いなくお陀仏だと思ったのでちゃんと「二人のラブラブ展開を御邪魔しちゃいけないと思って」って言いましたよ。

Q反応は？

Aそしたら・・・「そんな風に見えたの？」と笑いながら包丁で俺を・・・俺を・・・・！！うっうっ・・・・

しばらくお待ちください。

Aすいません。取り乱してしまって・・・続けますね？その後目が覚めたら居間の椅子に座ってたんですよ。皆ワイワイご飯を食べてました。俺その時は夢だったんだと心底ホッとしました。ミースさんがそんなことしているはずないって。けど俺気づいたんですよ。ミースさん以外が楽しんでいない事に。

・・・ハァ一気に上手かった飯を食べる気が失せたよ。
俺は変な質問を自分で出し自分で答えていた。自問自答ってやつだ。
俺は気まずい食事が終わり部屋に戻る。
あの後、おっさんに呼ばれるわリクさんに説教されるわで何や感や疲れた。
パタンと部屋のドアを閉める。
明日からまた復興作業しなきゃ！！
「よし！頑張るぞ！！お休み！！」
俺は意気込み、刀を抱きながら目を閉じ、寝た。

次の朝、俺はおっさんに無理矢理起こされ襟元を引っ張られながら家を後にした。

「ほら！具現士様。ちゃんと作業してくださいよ！！」

1人の兵士が言う。
そんな事言ったって寝起きだし。
と心で愚痴りながら手を動かす。

１４話：鬼（後書き）

ちゃんと計算合ってるかな？ｗｗｗ
僕数学苦手なんですよｗｗｗｗ

１５話：変態はやっぱり変態。（前書き）

そのまんま

15話：変態はやっぱり変態。

午後を回った時。

「おっし！！だいぶ直ってきたな！！よし！集合！！」

とおっさんの集合の掛け声が聞こえる。

何だろ？

「これから分担作業を行う！！ここを担当する班はA班！！訓練場を担当する奴はB班！！それぞれのリーダは、A班は騎士団隊長に代わってスカリオ、お前がやれ。それでB班は俺について来い！！以上。作業再開！！」

そう言うと他の兵士達はおっさんについて行くか作業を再開し始めた。

・・・あれ？俺は？何これ。皆作業する場所知ってんのか？

そう思いながら近くの兵士に自分はどこか聞く。

「なぁ、俺どっちか知ってます？」

「確かデガルドさんの話によればここだそうですよ？聞いてないんですか？」

「あ・・・あぁ。聞き逃してな・・・。すまない助かったよ。」

「いえいえ！！」

兵士は手をブンブンと横に振る。

迷惑かけちゃったな・・・

にしてもあのジジィ！！俺に何も言わないんだもんな！！

後でとっ捕まえて吐かせてやる！！

と企みながら作業に取り掛かる。どんな作業かというと設計士の書いた設計を想像し、組み立てたり材料を出したりするという何とともまぁ地味な作業だ。俺はさっさと家ごと具現化すればいいんじゃないか？と疑問に思ったが兵士曰く、それじゃ意味がないらしい。

多分言いたい事は達成感を思い切り味わいたいのだろう。俺もそれを気づかされた。
そう思いながら作業を続ける。

そういやぁ、ネルとリクは何所に行ったんだ？全く！！皆頑張っているのに。
そう心で愚痴を言っていると

「おい。」
と聞いた声が後ろからする。
うん。なんか嫌な予感がするからスルーしておこう。
「ふふ～ん♪ふふふふ～ん♪ンフフフフ？」
と鼻歌を歌いながら作業を続ける。
「おい！！」
「んだよ？いいとこだったのに。」
俺は後ろを不機嫌な顔で向く。居たのは案の定スカリオ、通称変態だった。
「そっちはどんな感じかなーってさ。」
「見たら分かるだろ。」
俺はそう言うと作業に戻る。
「なぁ。」
「んだよ。」
作業をしたままで答える。
「あの時俺を殺そうとしてなかったか？」
！？
「・・・さぁ。」
何言ってんだ？
「あの目。俺を殺そうとする目だった。」
そうなの？
「だったらどうした？謝れってか？だったらそれは出来ないな。逆

にそっちが謝って欲しいぐらいだ。」
我ながら嫌いな人にこんな当たり方をしたのは初めてだと思う。
「いや。むしろ逆だ。」
凛とした変態の声が俺の耳に入ってくる。
!?何か背中に寒気が・・・
「あれは感謝すべきだ。と言うか癖になりそうだ。」
あれ・・・?
どんどん俺は作業していた手を止め始める。
「うーん。上手く言えないけど・・・興奮・・・?」ビュン!!
俺は即座にナイフを具現化し変態の顔面めがけ投げる。
しかし変態は驚いた顔つきでそれをかわす。しかしそれは完全には避けきれず、頬を掠めた。
チッ!!外したか!!
「ウオッ!!危ねぇな!俺が何したんだよ!!」
変態は怒鳴る。
コイツ気づいてねぇのか!?
「変な発言しただろうが!!何だよ興奮って!!気持ち悪っ!!」
流石にこんな奴と居るのはごめんだ。
「おふぅ!!その見下す顔もいいな!!」
変態が何だか惚気顔でこちらを見る。
それを見た俺はゾクゾクッと背中が震える。
これってまさか・・・
「もっと罵ってくれ。」

作者ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!作者がここにいる!!いや!顔が全然違うけども!性格的に作者だ!!
「こっち来るな!!作業しろ!!お前リーダーだろ!?ちゃんとや

れよ！！」
「そうか！！照れてるんだな～？」
変な目で顔を赤らめながら聞いてくる。
「話聞けよ！！ってかんな物好きいねぇよ！！」
「それは俺が魅力的だからか！？」
「違ぇよ！！変質者だからだよ！！いいからこっち来んな！！」
俺は片手でシッシッと払う。
「おぉおっふぃー！！ゾクゾクするぜ！！」
俺も背筋が違う意味でゾクゾクすんだけど！？
「ぐへへ・・・堪りませんなぁ～」
「すいませーん！！誰かおっさんを呼んできてー！！」
こんなやり取りが少し続いた。
あ、ちゃんと作業したよ？
え？あの変態か？おっさんに捕まって空の彼方へと消え去ったよ。
いやぁ～奇麗だった。よく見るアニメのやつをリアルで見た感じがして嬉しかった。

１５話：変態はやっぱり変態。（後書き）

これから、へん・・スカリオ君を温かい目で見てあげて下さい。

１６話：刀の不思議。

どうも！丈人です！
只今、おっさんと買い物中です！！
まぁ、買い物といってもただ食材を買いに行くだけだけど。何か今日、子供の一人が誕生日なんだって！！優しいパパだよね！！

「おばちゃーん！！キャベツと鶏肉と・・・」
などとお話しをしている。よく話している相手らしい。
一方俺は
「すみませーん！！苺とオレンジと・・・」
とおっさんのパシリとして扱われている。
俺的には断りたいけど、子供達の為だ快く引き受けてやったよ。

「はい。どうぞ！」
材料を買う。といってもおっさんから貰った金できっかりお買い物しただけだけど。
今知ったんだけど、お金の通貨は高い価値から白金貨、金貨、銀貨、銅貨だけらしい。いやぁ～お金の計算少なくていいよな！！
「ありがとうございます！！」
俺は一礼し、おっさんの所へ走って行く。
「おっさーん！買ってきたぞー！！」
「おー！あんがとさん！！」
ニッカニカして、袋を受け取る。
そして俺とおっさんは歩いて帰った。

帰る途中後ろから何やら寒気がしたが気のせいだろう・・・いや、気のせいだと信じたい。

特に何の変化なくおっさんの家に到着し、居間へと向かう。
「ただいまー・・・おぉ！？」
おっさんが驚いた顔をする。
「どうしたんだよおっさん・・・！？」
俺もおっさんの向けている視線の先を見る。
そこには俺が具現化した積み木が巨大な、おっさんが入りそうなくらいの家が作られていた。
その中からキャッキャっと子供達の声が聞こえる。

・・・いやー、子供の集中力はすごいんだねー。
『お帰りなさーい！！』
と顔は見えないが子供達の声がする。
「どうしたんだ！？これ！」
おっさんが聞く。
「あら。お帰りなさい♪これねー、子供達が作ったのよー。」
とミースさんが片手を頬に当てながら答える。
「ほぉー！凄いもんだな！！あ、材料でございます。」
おっさんが頭を下げながらミースさんに袋を渡す。
「うむ！宜しい！」
と笑顔で袋を受け取るミースさん。
「それじゃあ、二人は適当に寛(くつろ)いでてー？」
『はい！！』
俺とおっさんはビシッと姿勢を正し、敬礼をした。そして、兵隊のように１８０度回転し歩きだす。
そして居間の空いている真ん中のスペースで胡坐をかき向かい合う。
「そう言えば坊主、スカリオと模擬戦したんだって？」
「何で知ってんの！？」
俺はおっさんに言った覚えはない。だとしたら言ったのはリクさんかネルか変態だろう。
「ん？今日スカリオの奴が言ってたからな・・・と言うかお前アイ

ツに何したんだ？喋っているときのあいつの顔凄い気持ち悪い顔して笑ってたぞ！？」

あぁ～・・・

「特に何でもないよ。それより、これ抜こうと思ったんだけど抜けなかったんだ。」

そう言い俺は二刀を持ち上げおっさんに見せる。

「レトン様の使ってたニ刀か！」

「おっさん知ってるの！？」

「あぁ！！有名だからな！」

「詳しく教えてくれ！！」

やっと、情報が得られる！！

「あぁ・・・んじゃあ・・・」

とおっさんが話し始める。

「まぁ、お前がレトン様が初代具現士って知ってるよな？」

「まぁな。」

「んじゃあ、あの人が病死って知ってるか？」

「それも知ってる。」

「そうか。ならいいんだけどさ・・・」

？

「さ、話を戻すぞ？レトン様が１０歳ちょいの頃だ。いつもの様に具現化をしていたそうだ。すると突然レトン様が吐血をし始めてな？医師に診てもらったんだが、体には何の異常も見つからなかったみたいで家に帰されたんだ。その頃からというもの、度々吐血を繰り返していたようだ。その何年か後１６歳の頃にレトン様の父上が誕生日プレゼント代わりにそのニ刀をプレゼントしたらしい。」

「何の関係があるんだ？」
俺は頭の上に？（はてな）を乗せている。
「それも世界一の鍛冶屋に特注で造ってもったらしい！！いいよなぁ～！！」
「話聞けよ！！」
「おぉっとすまんすまん！！それでその二刀には心があるらしくてな？気に入った人にしか抜けなくなる術をかけられているらしい。んで、不吉な事が起きれば被害を最小限に抑えてくれたらしい。」
ということは・・・
「俺は気に入られてないのかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
俺は頭を抱えて嘆いた。
「まぁ、頑張りな！！」
おっさんが肩に手を乗せてくる。
「ごはんが出来たわよー！」
とミースさんの声が今に響く。
『はーい！！』
と皆大きな返事をする。
すると、積み木の家に入っていた子供達が一斉に器用に出てくる。
言っちゃなんだけど、
気持ち悪りぃぃぃぃぃぃぃぃ！！
そんな事より！！誕生日パーティーの始まりだ！

17話：バースデーパーティー！

『ハッピバースデイトゥーユー！！おめでとう！！』
「ありがとう！！・・・ふっ！！」
と子供が蝋燭を消す。
よくあるバースデイパーティーってやつだ。
パチパチパチ・・・と皆その子に向かって拍手をする。
俺もその一人だ。いやー、いいよねーバースデイパーティーとか。
俺はバースデイパーティーでいい思い出なんてなかったよ。

～回想～
『ハッピバースデイトゥーユー！！』
「ありがとー！！ふぅー！！」
まぁ、ここまでは良かったんだ・・・
「さて！ケーキ分けるわよ～？」
この瞬間。
「俺がケーキ分けるよ！！」
と詩音が包丁を手に取りニコニコと包丁を構える。
「詩音は危ないから僕が切るよ。」
と隣にいた兄貴が包丁を取り上げる。
「俺だって！！」
「だめだ！！この仕事は僕が・・・！！」
という事を永遠に繰り返し、俺と両親、特に一緒にいた母さんは俺と一緒に居間を出て二人の争いが終わるまで学校の話とかをしていた。
～回想終了～

こんなまともなバースデイパーティーは何時以来だろう・・・
なんだか感動してきた。

よく見ると皆それぞれその子に誕生日プレゼントを渡していた。
それを見て俺は重大なミスをした。

やべぇぇぇぇぇ！！俺なんも用意してない！！

そう。俺は誕生日には必要性Ｎｏ．３までには入るプレゼントを忘れたのだ？
おっさんは絵本を、子供達は宝物などを渡している。
ん？ミースさんはって？
「このミース特製のケーキが最高のプレゼントよ♪」
とウィンクをして答える。
まぁ、正当だとは思うけどそりゃないぜ！！

そんなことより何にしよう！？相手は女の子だぞ！？
なんにも浮かばねぇ！！
そんなことを考えているとその女の子が俺を見てニコニコする。
えぇい！！こうなったら自棄（やけ）だ！！
「何が欲しい！？」
俺は作り笑いなのがバレバレの状態で聞いた。
「えーっとねぇ・・・。」
と上を見て考える。
頼むから簡単な物のように・・・！！
そう願っていると女の子は答えを出したようで、こちらを向き笑顔でこう答えた。
「クマさんのぬいぐるみが欲しい！！」
と。案外簡単なもので心底ホッとした。
「よ、よし！！いいよ！どの位のやつ？」
と俺は微笑み質問する。すると、女の子は皆から貰った物を床に置

き、手を大きく広げ、
「こーーーな大きなクマさん！！」
と答える。
・・・フッ。任せな！！と心でドヤ顔で答え、
「よーし！！やるぞー！！」
と力瘤（ちからこぶ）を見せ想像する。
大きさはこの子と同じくらいでいいか・・・

そして数秒後にその子の前に想像通りクマのぬいぐるみがあった。
「これで宜しいでしょうか？」
「うん！！ありがとう！！」
と言いぬいぐるみに抱きつく女の子。
うわー！！可愛いなぁー！！
『いいなぁー！！』
と、羨ましそうに見入る子供達。

「皆それぞれの誕生日に造ってやるから。」
と、あやす。

『ほんとー！？』
「あぁ、本当さ。」
『やったー！！』
と喜ぶ子供達。
何か、喜んでもらうと嬉しいよね。

その後、皆とケーキ食って遊んで話してとやっていると夜中を回りそうだったのでパーティーをお終いにした。
皆各自部屋に戻り眠りについた。

「今日は楽しかったな！」

と刀に話しかける。
あ、そうだ。ホルダーをもうちょっと綺麗に造ろう。あの変態戦からそのままだし。
俺は集中し想像する。
「とりゃ！」
と、掛け声をかけて出てきたのは灰色の革製の丈夫なベルト。そして途中にはホルダーが取り付けられている。
まぁ、少しずれたけどいいか。
「よし！出来たぞ！」
俺はあのホルダーから取り出し新しいホルダーに入れる。
「どうだ？前より居心地いいか？」
などと聞く。
「まあ、気に入ってくれたなら嬉しいな。それじゃあ、寝ようか。」
俺は部屋の灯りを消し、薄い月夜の光に照らされた部屋をフラフラと歩く。
あれだ。よくある明るい所を暗くすると、真っ暗になる、あるあるネタだ。
ようやくベッドに辿り着き、刀をベッドの上に置き、俺も横になる。
「お休み。」
そう言い俺は布団を少し深く被り二刀を抱きながら眠りについた。

17話：バースデーパーティー！（後書き）

読んで頂きありがとうございます

o（≧ω≦）o

18話：サンドウィッチ

「ふぁ・・・おはよ・・・」
抱いていた刀に挨拶をする。
まだ頭がポーっとしている。たまにこうなるんだよね。
よく見ると、片方のほうに俺の涎が付いていた。
「あ！！やべ！！」
俺は慌ててそれを拭う。
「あわわわ！ごめん！・・・よし！これでいいかな？」
俺は拭いた刀を見直す。
うん。綺麗に為った！

そのまま居間に行き子供達とお話しながらご飯を食べておっさんと出勤する。なんか出勤って言われると俺が大人になった気分だ。なんだか心地いい。

「なぁ、坊主。今日帰ったら稽古つけてやろうか。」
といきなりおっさんが言い出す。
「本当か！？」
「おう！ただし、今日の仕事を人一倍働けばな！」
な、なぬぅ！
「や、やってやろうじゃないか・・・」
俺は少し冷や汗をかきながら仕事場へと向かった。

「ぬぉぉぉ

い程のスピードだと思う。その位働いているのだ。

「具現士様どうしたんだろ。いつもよりなんか作業早くないか？」
「あれだろ。早くこの国を復興させたいのさ。」
「成る程！流石具現士様！我々も負けてはいられないな！」
などとあちこちでちらほらと話が聞こえる。済まないな。本当は稽古の為なんだよ！！うぉぉぉぉぉ！！

「精が出るな。ガキ・・・いや、タケト。」
何か聞こえる。しかし、無視をする。今関係無い事だからな。そんなので足を止めたくない。
「うぉぉぉぉぉ！！」
「ヘッ！いい無視っぷりだな。」
この声からして、あの変態だろう。しかし、変態の事だ。どうせロクな話じゃないだろう。
それよりお仕事、お仕事！！
「おいおい。冷た過ぎないか？まぁ、この感じも好きだけどな。」
ブルルル！と背筋が凍る。
俺は追い払う為に
「消えろ。お前がいると目障りだ。」と暴言をはく。
「はっ！意外とシャイなんだな。」
誰がだよ。

こんな事が昼間で続いた。

只今、昼飯を食べる為のお昼休みです。
ミースさんに貰ったお弁当の入ったバスケットをおっさんとリクさんと俺とで囲んでいる。リクさんは昼前に血だらけのままこちら側に向かってきたので、一旦家に戻り、またここに手伝いに来てくれたのだ。

流石騎士団隊長！！

「よし！皆集まったし飯食うか！！」

「おー！！」

「今日の昼ご飯はなんだ？」

とリクさんが首を傾げる。

「今日はサンドウィッチだ！！」

「おぉ！！サンドウィッチ！！」

俺サンドウィッチ結構好きなんだよね！！特にカツサンドかハムのやつ！！

それじゃぁ！『いっただっきまーす！！』

そう言いサンドウィッチに手を伸ばそうとすると・・・

「無視すんなよぉぉぉぉぉ！！」

と後ろから変態が叫んでいる。

んだよもう少しでサンドウィッチにありつけるのに！！

「おぉ！スカリオ！お前のはハムッングング・・・ねぇぜ！！」

とキッパリと言い切るおっさん。

・・・容赦ねぇな。

「そうだ。ムグムグ・・・ンクッお前の何か無い。草でも煉瓦(れんが)でもア～ングング・・・食べていろ。」

リクさんもウンウンと頷きながらサンドウィッチを・・・って

「何で二人とも食ってんだよ！！」

「お前も食べたらどうだ？タケト美味いぞ？」

「うーん！！」

そういい俺はハムサンドを手に取り頬張る。

わぁ～お！！デリシャス！！

「あ・・・あぁぁ！！俺のサンドウィッチが・・・」

とサンドウィッチに手を伸ばす。

だから俺達は透かさず見下す目で言ってやった。

「俺らのだよ・・・馬鹿が！！」

１８話：サンドウィッチ（後書き）

個人的におっさんが一番好きですｗｗｗｗｗ

１９話：稽古選択（前書き）

短めです＞＜

19話：稽古選択

昼飯を食べ終え、あの変態が項垂れているが無視して作業に戻る。
あ、リクさんは俺と同じ斑らしい。
まあ、あの変態がリクさんの代わりらしかったしな。当たり前か。

「さぁ！皆頑張ってください！！」と、リクさんが拳を空に掲げる。

『おぉー！！』と、それに答えるように皆も拳を掲げる。

「お、おぉー！！」
俺は少しタイミングをずれたが同じポーズを取る。

「よし！取りかかれ！」
『いぇぁぁぁぁ！』
と声を上げる。
・・・なんかこう、見てるとリクさんが王様に見えるな。

「ん？タケト！サボるな！」
リクさんの目がギロリと俺を睨む。
「は、はいぃぃぃ！」
俺は一目散にリクさんから遠ざかる。こぇぇぇ！！軽く詩音を上回る怖さだ・・・！

俺は午前中のスピード以上で作業する。いつリクさんに殺されてもおかしくないからである。俺の頭の中では”動きを止めたら殺される”と永遠にその言葉を繰り返す。そのせいか人の会話も聞こえず、聞こえて来るのは俺の耳を掠める風の音だけ。
それを3時間継続していたらしい。

リクさんは良くやったと言ってくれ、おっさんも褒めてくれて、変態はまだサンドウィッチの事を引きずっているみたいだ。
どんだけ根に持つんだよ！！

そう思いながら帰宅途中、
「なあ坊主。なに稽古つけてもらいたいか決まったか。」
とおっさんが言う。

え？
「おっさんそんな事言ったっけ？」
俺は首を傾げる。

「ん？俺言ってなかったっけ？」
「覚えは無いよ。」
「そうか！そりゃ悪かったな！がははは」と豪快に笑う。

ったく。

「で、だ。今から言う3つの中からやりたいやつを選びな。」
するとおっさんは大きく息を吸い、
「一つ目は魔術。二つ目は精霊召喚。三つ目は体術だ。さあ、どれを選ぶ？」
おっさんがニヤニヤして聞いて来る。
うーん。魔法使いたいしなぁ～。あ、でも精霊ってのもいいしな。
うぅーん・・・
俺が悩んでいると。
「私はまずは精霊召喚からがオススメだ。」
とリクさんが薦める。
「え？なんで？」

「精霊を従えていた方が魔術の覚えも速くなるからな。」
「へェ～。じゃあそれに決定！！」
「いいのかよ！！・・・まぁ、あんたが決めたなら良いんだけどよ。」
「あぁ！！頼むぜおっさん！！」
「お・・・おう！任せとけ！！」
そう言い笑いあいながらおっさんの家へ続く道を帰って行った。

20話：精霊について

『ごちそうさまでしたあ！』
と俺とおっさんが言いキッチンのほうに皿などを置き居間を出る。
「あまり張り切りすぎないでねぇ～！」
とミースさんがおっさんに注意を促す。
「おう！軽めにやるわ！」
おっさんはそう言うと居間のドアを閉め俺と一緒に2階へと上がって行く。
「あ、そうだ！坊主確かさ、俺がやった本の中に精霊の本無かったか？」
「あぁ、確かあったな。」
「それ持って来といてくれ。」
めんどいなぁ～・・・
「へいへい。」
「んじゃ、頼んだぞー！」
そう言うとおっさんは部屋の中に入って行った。
「行きますか。」
俺は一人で呟いた後、階段を上り自分の部屋へと向かう。

ガチャ・・・
「えーっとここだったよな。」
俺はあの折りたたみ式卓袱台の所を覗き本を取り出す。
「お！あったあった！！」
俺は見つけてそのままその本を持って2階へと戻る。

「おっさん持って来たぞ～。」
「おぉ！んじゃ、ここ座れ。」
とおっさんは自分の真向かいをバンバンと叩く。

あのぉ～・・・凄い床が揺れるんですが・・・。そんな不安を抱えながら渋々おっさんの真向かいに歩み寄りそこに腰を落とす。その際俺は本を抱え込むように胡坐をかき座った。
「んで？これ使ってどうすんの？」
俺は本に目を落とし、すぐおっさんを見直す。
「ん？じゃあ聞くが精霊って何かわかるか？どんな精霊がいるかわかるか？」
と聞いてくる。早口だなぁ～。
しかし、その質問には答えられない。知らないからだ。
「な？わかんねぇだろ？そのために使うんだよ！！」
と笑いながら言う。
なるほど！！
「流石おっさん！！」
それとも俺がただの馬鹿なだけなのか。
「おう！！んじゃ、まずは精霊とは何か知っとかなきゃな！！まずは本のえぇ・・・と、何ページだったかな・・・？」
などと考え込む。
その間俺はページの目次を開き、そのページを探す。
「おっさん。３ページだぞ？」
と俺がページ数を言うと
「あ！！俺が今言おうとしてたのに！！」
などと俺に言う。
絶対違うね！
「そこに確か精霊について書いているはずだから音読してくれ。」
えぇ！？俺無理だよ！！だって国語とか古典とか全然駄目だったもん！！先生にボロクソ言われるわ、クラスの皆には笑われるわで散々な事しかないんだよ！！もう嫌！！

「おい。読まないのか？」
おっさんが聞いてくる。

「悪いなおっさん。俺読むの下手なんだ。」
さぁ！！諦めろおっさん！！

「そっか。じゃあ尚更読め。」
なんでだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
おっさん、てめぇもあのドＳ女王様と同じＳかよ！！
「無理だって！！」
「無理だと決め付けているから読めないんだ！！大丈夫だ！読めると心に暗示をかけろ！！お前は読める！！」
「おっさん・・・分かった！やってみる！」

俺は目を閉じ、暗い中自分に暗示をかける。
タケト。君は読める。そうさ！俺は具現士！これしきの事で諦めてはいけない！！
そう心で唱えていると、
「そうです。貴方なら読めます。誇りを持って・・・」
とどこからからか女の人の声が聞こえる。
とても透き通るような声だ。
しかしその声は聞き覚えのない声だった。リクさんやミースさんなどの声ではない声だ。
俺は目を開け辺りを見回す。しかし居るのは驚き顔のおっさんだけ。
「どうした？いきなりキョロキョロし始めて。」
「い、いや。何でもない！さぁ！！やるぞぉぉぉ！！」
「よし！始め！！」
俺は深呼吸をして、一呼吸吐いた（つ）ところで読み始める。

「えー、精霊とは。我々人間と共存する生物の一つである。人間と違い遙（はる）かに差がある知識、力を持ち我々人間に力を与えてくれる者である。えー、普段は森林、山岳などに生息しているが、場合によっては、国の中に居たりする事もある。」

俺は読むのを止めおっさんを見る。
「ん？まだ読め。」
「ヘイヘイ。」
チッ！
俺は１ページ捲り、再び読み始める。

「精霊とは契約が出来る。しかし、それぞれ精霊の契約条件に当て嵌まらなければいけない。当てはまった者を正式に主と見做(みな)す。それまでその精霊と仮契約(かりけいやく)を結ばなければならない。」
「ハイ次！」
もう疲れてきたよ！
「すぅー・・・最後に注意！精霊が不満に思ったり、従うのを拒否した場合、強制契約解除が精霊達に与えられている。その後、その精霊が元主を煮ようが殺そうが許可される。」
こえぇよ！！なにすればそんなこと精霊にされるんだよ！！

「よぉぉし！！次は精霊の種類についてだな！」
「まだ読むのぉぉぉぉ！？」
もうクタクタだよぉぉぉぉ・・・

「いや、これは俺が説明してやろう！！」
「おおおおお！頼むぜおっさぁぁぁん！！」
やっと休めるぅぅぅ・・・
「ちゃんとページ開けよ？」
「はーい。」
パラパラとページを捲り目次に戻る。
精霊の紹介ー５ページ
と書かれていたので、そこを捲る。

・・・てか次のページだったじゃん。

「えー、ごほん。」
おっさんが咳払いをする。
「おっさん風邪？」
「違うわ！！」
「ですよねぇ～。」

「んじゃあ、説明するぞ？まず精霊には位があってな？上下位精霊と単位精霊といるんだ。まぁ、根本的な違いは数だ。」
「数？」
数ってあの1，2，3，4，5，6，7，8，9とかの？
「そうだ。上下位は必ず2人以上いて、単位は1人だけなんだ。んで、魔術と同じでそいつ等には属性があるんだ。」

おっさんが言った属性は、火、風、水、土の四大元素に加え、氷、植物、光、闇、戦、狂等があるらしい。
結構多いんだな。

２０話：精霊について（後書き）

少し長くしました。

21話：ベヒモス（前書き）

途中からgd gd

21話：ベヒモス

「結構多いんだね。」
「そりゃあな。んで、そいつ等の名前がその本に書いてないか？」
「ん？」
俺は本に視線を落とす。
確かにらしい事は書いてある。
「まぁ、よく分かんないか・・・実際に見たほうが早いな。俺が契約しているのは火の精霊と、土の精霊なんだが、そのとこを見てくれ。」
指示された通り、その欄を見る。書かれている名前は、

火の精霊
上位：フェニックス・イフリート
下位：サラマンダー

土の精霊
上位：ベヒモス・バハムート
下位：ノーム

と上下位精霊らしい。
結構聞いたことある精霊ばかりだ。
ほらあの某ＲＰＧのＦ●だよ。

「その中のサラマンダーとベヒモスが俺の召喚出来る精霊なんだが、見せてやろうか？」
と言ってくる。
「見たいです！！」
そりゃ皆見たいよな！！

よくある、「パパに新しい●●買ってもらったんだー！！」
と同じさ。
「そうか！んじゃあ、召喚してやるか！」
そう言うとおっさんは立ち上がり肩をグルグルと回す。
あんまり回し過ぎると肩の関節外れんじゃね？
と変な心配をする。
「おっと！忘れてた！坊主、部屋の隅に行ってくれねぇか？・・・・
踏み殺されたくなかったらな！！」
「何が起きるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「当たり前だろ！！じゃねぇとあいつ等収まんないって！！」
「どんだけでけぇの！？」
この部屋も無駄に広すぎる。一つのデカイ公園並みの広さだ。これ
もなんかの魔法なのだろうか？それよりこんな広い部屋で踏み潰さ
れる程のでかさって！！
一体！？
「はいはい！行った行った！！」
「へいへーい。」
そう急かされ俺は渋々と部屋の隅へと歩く。
そして、胡坐をかき直しその時を待つ。
「おっし！あいつ等は出たら床抜けるだろうから、シールド張らな
きゃな。んっ　しょいゃあ！」
おっさんはそう言うと両手を床につけ、薄青い膜を部屋中にゆっく
りと拡がらせる。
さっきの掛け声なんだ？んっしょいゃあ・・・て。しかし、綺麗な
色だなぁ。俺は触ってみる。特に触り心地はさっきと変わらない。
「よし！んじゃあやりますか！」
おぉ！待ってました！
おっさんは片手を床につける。するとその床に赤い魔方陣が浮かび
上がる。おっさんは片手を床から離したその時、
ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・と、音を出しながら赤い光が部屋に広がり、

何かの影が見える。
これが、サラマンダーの影か！？
少しすると軈て光は消え、その姿を現す。
おぉぉぉぉぉぉぉ！！
緋色の光る肌！燃え盛る背鰭！
そして、この小さな・・・・え？
よく目を凝らす。
・・・見間違い無いよな？でも、大きささ・・・本当にトカゲぐらいなんだよ・・・
「どうだ！？可愛いだろう！！こいつが俺の火の精霊、サラマンダーだ！」
と、サラマンダーを肩に乗せ優しく撫でる。

「へェ～。」
「ほら、挨拶しな？」
とサラマンダーにいう。
「喋れんの！？」
「当たり前だよ！な？」
【うん！おいちゃん！】
と小さい子供の声がする。
まさか・・・
「な？喋ったろ？」
まじか！すげぇぇぇ！
「あれ？おいちゃん。この人だれ？」
「この人は、具現士様だよ。」
【へェ～！凄いや！僕、サラマンダー。具現士様の名前は？】
と、サラマンダーが聞いて来る。
「ん？俺はタケトって言うんだ！宜しくな！」
【うん！宜しく！】
と俺に前足を左右に振ってくれる。

いい子だなぁ！
「こいつは人懐こいからいいけど、他のサラマンダー達はそうは限らないからな。」
「え！？そうなの！？」
「当たり前だ。精霊も生き物だからな。じゃなかったら、感情なんて無いだろ。」
「確かに。」
【おいちゃん！ベヒモスは？】
「おぉ！今呼び出すからな？」
そこで俺は疑問が浮かんだ。
「あ！質問！」
「ん？なんだ？」
俺はそこで疑問を聞いてみた。
「サラマンダーとかって普段どうしているんだ？」
「あぁ、こいつ等は普段は私生活をしているぞ？」
と、けろっとした顔で言われた。
なんだと！？
「じ、じゃあ、いきなり呼び出すのか？」
「いや、なんて言えばいいかな・・・契約を交わした精霊達は精霊界と言うところに行き、生活するらしい。そこは人間が到底行けない世界らしい。召喚令が出されたら待合室みたいなとこに呼ばれてからここに来るんだ。しかも、そこが不思議な部屋らしくてな？俺等の一分が待合室では一時間に感じるらしい。その間に、色々な事をしてからこの世界に来るんだ。」
どこのＤＢだよ。
「さて、ベヒモスを出すか。こいつが本命だ。さぁ、隅っこへ戻りな。」
「あいょー！」
俺は戻り、体育座りをし、その時を待つ。おっさんはさっきと同じように行動し、魔方陣を浮かばせた。今度は黄土色の魔方陣だった。

すると、さっきのように光り出す。
その後、明かりが薄れ、閉じた目を開けると・・・
部屋に金色の毛並みの巨獣が居た。
しかも、半端無いでかさだ。
鋭い獣の目、長く鋭い犬歯。
俺は唖然とするしかなかった。
【グギャアオオオオオオオオオオオオオ・・・！！】
と、ベヒモスが部屋が吹き飛ぶぐらいの叫び声を上げた。
俺は頬に何か冷たいものが蔦る感じを覚えた。

21話：ベヒモス（後書き）

誤字脱字報告待ってます＾＾

２２話：あの狸（前書き）

あの狸の道具が・・・

22話：あの狸

どうも皆さん！おはよう、こんちは、こんばんは！タケトです。
遂におっさんがベヒモスを召喚しました！！
めちゃくちゃ怖いです。俺3適ちびったよ。
この年でちびるとかどうかしてるな・・・けど怖ぇんだもん。
【あぁ？何か用かよ。】
と、どす黒い声が響く。声、口調からして悪そうな精霊だ。
「おぉ！悪いな！！俺もこいつもお前に会いたかったからな！！」
などとおっさんが
【わーい！！ベヒモスだぁー！！久しぶりー！】
と、サラマンダーが前足を振る。
【んで餓鬼がいんだよ。】
ベヒモスは不機嫌そうに言う。
「そう言うなよ！！な？」
おっさんがベヒモスに歩み寄り前足をバシバシと叩く。
おっさん！！おっさん！！殺されるから！！早くその手退けてぇぇぇぇぇ！！
俺が心でそう思ってもおっさんは止めず永遠にバシバシと自殺行為に走る。
やめるんだ！！
「んでよ！呼んだ理由は、コイツだよ！」
と俺の方を見て笑うおっさん。
こっち見んなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
【あぁん？何時からいた？】
あれ？僕気付かれてなかったのね・・・
「ずっと居ました・・・」
俺はか細い声で話す。
【あぁん！？！？もっとハッキリ物言えや！！】

と怒鳴る。
ひいいいいい！！
「まぁまぁ、そうカッカッすんなって！」
お・・・おっさぁ～ん！！
【ッチ！んで？この餓鬼がなんだって？】
「ん？あぁ、こいつは具現士何だけどよ。精霊の事何も分かってねぇんだよ。」
まぁ、そうだけどさ。
【はぁん。こいつがねぇ・・・じゃあよ。これ防げんだろ！！」
そう言って行き成り尻尾をこちらに向け叩きつけてくる。

なっ！？

ドォォォォォン・・・
と部屋に轟音が響く。
「坊主！！」
おっさんの声が聞こえる。
【ほぅ・・・】
ベヒモスが意外そうな声を上げる。
それもそうだろう。
俺は間一髪で下に穴を開け、下の階へと落ちたのだから。
え？何を具現化したのかって？

・・・通り抜●フー●

そうあの狸の道具だ。
いやぁ～！！駄目元でやってみるもんだね！
上手くいったよ！
今の俺ならどこにでも通じるドアを具現化出来る気がするぜ！！

「おーい！！大丈夫か！？」
と上からおっさんが叫んで俺の安否を確認してくる。
「あぁ！！少し尻が痛いぐらいだ！！」
「そうか！！早く来いよ！！」
「あぁ！！」
そう言いおっさんが顔を引っ込め、ガミガミとベヒモスを叱るような声が聞こえる。
そんなのいいのに。

おっと！！どこにでｍ（ｒｙ・・・を具現化してみよう！！
そういい念じる。

ピカっとその場にピンク色のドアが現れる。
よし！！さぁ！！おっさんの所へゴー！！
ガチャ・・・
俺はドアを開け、飛び出す。
そこにはおっさんの姿もなく、ベヒモスの姿もない。
「・・・」
後ろを向き天井を見ると俺が造ったあれの穴が見える。
そう。俺はただのドアを造っただけだったようだ。

・・・俺はドアを消し、終始無言で元居た部屋へと戻る。
なにやってたんだろ・・・俺・・・

23話：アドバイス！

俺は元居た部屋に戻るとまだおっさんがベヒモスを説教していた。
・・・どんだけ長い時間説教してんだよ！！
そんな事を考えていると、おっさんがこちらに気付き
「おぉ！良かった！本当に無事みたいだな！」
と笑顔で言う。
「まぁね！」
【ま、逃げるとはな。】
ベヒモスが悔しげに言う。
しょうがないだろ！！何で防げば良いのかも分かんなかったし！！
「おいこら！反省せい！！」
【フン！！】
おっさんの説教も虚しく、ベヒモスは反省の色気も無い。
「ったく！まぁ、こっからが本題だ。お前ら二人には無知なこいつにアドバイスをして欲しい。」

おぉー！！なるほど！！精霊に聞いた方が詳しいと言う事か！！
俺が一人でウンウンと頷いていると、
【はいはーい！！じゃあ僕から教えるー！！】
サラマンダーがおっさんの肩から身を乗り出し言う。
「うん頼むよ！」
【んとねー！精霊にも性格とかあるのは知ってるでしょー？】
「あぁ。」
おっさんが言ってたな。
【だから、自分と気が合う精霊と契約した方が一番いいよ！】
「へぇー！」
やっぱり一緒にいて楽しい奴といる方がいいよね！
「ありがとう。」

俺がそう言うと、
【えへへーどういたしまして！】
と少し照れ気味で頭を掻く。
可愛いなぁ～！
「ほら！お前もなんかアドバイスしな！」
おっさんがベヒモスに言う。
【ッチ！わーったよ！・・・ったく。いいか？俺等精霊には契約条件ってのがあるんだ。】
「契約条件？」
【聞き返すな。叩き込め。それに該当すれば晴れて精霊共と契約が出来るってわけだ。これでいいだろ？】
「まぁ、いいだろう。どうだ坊主。分かったか？」
おっさんが俺に尋ねる。
「うんまぁ、分かりやすかったよ！」
「そうか！ならよかった！お前等精霊界に帰ってもいいぞ？ご苦労だったな。」
【はーい！んじゃまたねー！！】
そう言うとサラマンダーはおっさんの肩から飛び降り、床に落ちるスレスレで体が炎になり自然と消えた。
「すげぇ・・・」
と自然とくちから溢れる。
【フン！退屈な時間だったな。もうこんなくだらないことで呼ぶなよ。呼んだらぶち殺す！！】

そう言うとその場からベヒモスの体が砂になり、サラサラと崩れ落ちる。不思議な事にその崩れ落ちた砂はゆかに残らず、床に落ちた瞬間に跡形もなく消える。

凄いみんな消えようだな。
「ふう！ま、これで少しは分かったかだろう。」

「あぁ！為になった！」
「そうか・・・よし！今日はここまで！明日もやるから色々と予習しとけよ！」
「ありがとうございました！」
俺は頭を深く下げ、お礼を言う。
「おう！明日も早いからな！早く寝ろよ？」
「了解！んじゃまた明日ー！」
そう言い俺は自分の部屋へと走り、入り、電気を消し布団に潜る。
明日も頑張るぞぉ！

そう心に誓い二刀を抱いて眠りに着いた。

次の日、おっさんが慌てた様子見で俺の部屋に入り、俺をたたき起こす。
「おい！起きろって！女王様の招集がかかったぞ！」
「ふぁぁぁ・・・消臭？」
「違う！いいから早く来い！」
そう言いおっさんはおれを引っ張り家の外に出る。

エルストリアの城内の広場に兵士達がズラリと並んでいる。
何が始まるのだろう？そう思う時、女王様が姿を現しこう告げた。

「魔狼、フェンリルがこの近辺で出現しました。直ちにこれを保護しなさい！」

と声を張り上げ言う。

フェンリル？
あの金髪兄ちゃんが乗っていたあのバイクか？

「なぁ、おっさん。フェンリルってなんだ？」
頭がこんがらがったまま聞く。

「精霊だ。しかも、最凶最怖のな。」
「そんなに悪い奴なのか？」
「あぁ。精霊の大半は人間との共存を主としているが、フェンリルは違ってな？人間を敵視しているみたいだ。」

「へェ～。」
と、余談をしているとあっという間に女王様の話しは終わり、兵士達が一斉に城内を飛び出し、フェンリルの保護に向かう。

「おっさん。俺たちはどうすんの？」
「さぁ・・・？」

２３話：アドバイス！（後書き）

感想待ってます！

２４話：ワンコと浮遊感！！

しょうがなく、おっさんと俺は女王様に話しを聞きに王の間に行く。

王の間

「女王様。俺等も行った方がいいんでしょうか？」
おっさんが聞く。
「出来ればそうして下さい。」
「分かりました。」
そう言い俺等は小走りで城を出て、おっさんに着いて行く。
「おっさぁ～ん！どこ行くの？」
「ん！？アリエスの森だ！」
何処だよ～！
「それよりさ！フェンリルの特徴とかないの？」
分からないと俺も探せないからな！
「うーん。強いて言うなら毛並みは白銀で、姿はさっき言ってたけど狼だよ。」
あれ？言ってたっけ？
「分かった！」
こんな事を話していると何時の間にか、大きな門の前にいた。
そして、
「フン！ヌァァァァァァ！」
とおっさんが声を上げながら門を開ける。
しかも結構大きな門だ。
数十秒すると、
ドォォォォォォン
と門が完全に開いた。
門の目の前は木々が生い茂り、まるで熱帯のジャングルみたいなと

ころだった。
多分此処がアリエスの森なのだろう。
その前に俺は何度も完全に開く前に行こうと言ったが、おっさんが
「いいや！絶対最後まで開ける！」と子供の様に駄々を捏ねるので
仕方なく待ったのだ。
はぁ・・・
「よし行こうか！」そう言い歩き出す。
「おっさん。閉めないのか？」
俺がそう聞くと、
「いいんだよ。勝手に閉まるから。」
その言葉に疑問を抱きながら、門を出る。すると、
ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・
と門が閉まり始める。
「本当だ！」
「な！？言っただろ？」
と後ろを振り向き無邪気な笑顔で聞いてくる。
「うん！すげぇや！」
俺もキラキラした目で答える。
何分か歩いていると、おっさんがいきなり身を隠した。俺もおっさんの手によって俺も木の影に隠される。何が起きたのだろう。

「こっちに居たか！？」
と荒れた声が聞こえる。俺が少し顔を覗かせると、居たのはエルストリアの兵士達の様な身だしなみでは無く、真っ黒の鎧を身につけている。
「いや！こっちには居ない！」
「クソ！あの野郎、逃げるのだけじゃなく、隠れんぼも得意ときやがった！」
「しょうがない！お前はあっち！俺はこっちを探す！」
「頼んだ！」

そう言うと、２人はバラバラになり探しに出かける。
「おっさん。あいつ等誰だ？」
おっさんを見ると、少し焦りの表情を見せる。
「あいつ等は、オルティガ。俺らの国をめちゃくちゃにした張本人だ。」
「な、なんだってぇ！？」
分かりやすい演技をすると、
「馬鹿やってる暇じゃねぇぞ！下手したらフェンリルがあいつ等に捕まえられる！」
と、おっさんが恐ろしいものを見るように、あいつ等がいた場所をじっと見ている。
「も、もし捕まったら？」
俺もなんだか心配になって聞く。
「恐らく兵器として使われるだろうな。」
「そ、そんな！」
「安心しろ！だから俺等が先に保護するのさ！」
成る程！そう言う事か！
「んじゃ、俺も探してくる！」
そう言って俺は先走ってしまった。
「何処にいるのかな～？」
そこら辺をキョロキョロしていると、ある大きな木の近くで何か黒い物体があるのに気がつく。
俺が歩み寄ると、黒い物体がゴソゴソと動いた。
「うお！」
俺は少し驚いたが、よく見て見ると、黒い物体の正体は犬だった。
しかも、体の周りに傷が何箇所もできていた。

大変だ！
犬に触ると、傷に触れたせいか、ジタバタともがき始める。
「我慢してくれ！」

俺は全速力でおっさんを探した。おっさんなら何とかしてくれると思ったからだ。
しかし、何処を歩いても居るのはあのオルティガって敵国の兵だけ。
しかも今までもがいていたワンコがいきなり動かなくなった。俺は最悪の場合を想定して、身体に手を当てる。
ドクンドクン・・・と鼓動が聞こえる。良かった！まだ生きてる！

早くおっさんを・・・そう思い、あたりを見回す。元来た道がない。
そう。道がないのだ・・・いや、はっきり言うと道に迷った。
どうしよぉぉぉぉぉ！！
早くしないとワンコがぁぁぁぁぁぁ！！

トントン。
と肩をつつかれる。
ひぃ！
俺の思考はオーバーヒート寸前だ。
待て待て待て！よく考えろ！もし借りに後ろにオルティガの兵士がいたとしよう！うん。俺の勝ち目はまずない。いや、勝つ気もない。いや、やれば勝てるとは思ってないよ？本当。てか、振り向いたらどうなるんだろう！一瞬でザクリか！？ザクリはやだよ！痛いもん！！それより、このワンコを手当しないと！そうだ土下座をして命乞いするか！？いや！「お願いしますぅ～助けて下さいぃ～。」なんて言ってみろ！俺の首が吹っ飛ぶぞ！？絶対あいつ等は敵国だったら容赦なく殺すだろうな。けどオルティガの兵士じゃなかったら・・・

などと永遠に頭を廻る。
皆も一回はあるよね？

すると、

ガシッと俺の肩を掴み、グイッと強引に俺を後ろに向かせる。あぁ、とうとう俺の人生もここまでか。最後にもう一度皆に会って感謝の言葉とか言いたかったな・・・
そう俺は心から悔やみながら人生に別れを告げる。しかし予想は外れ、立っていたのは、血みどろのネルだった。
ほんのりと、ネルから錆びた鉄の臭いがプンプンとする。
「ネ、ネル！！」俺が少し大きな声で名前を呼ぶと、
「少し静かにしろ。バレるぞ？」と、人差し指を立て、シーっとする。
俺はコクコクと頷き、静かに質問する。
「なんで血みどろなんだよ！」
「あぁ、これか？これは、敵国の奴等と殺し合ってたら少しな。なに、心配は入らない。これは全部返り血だ。」

そう言う問題じゃねぇぇぇ！なんか服に肉みたいなものがチビチビこびりついているんだけど！？

「それより、その犬どうした？」
ネルが俺の抱えている犬に目をやる。
「昏睡してるな。早く手当てしないと手遅れになるぞ？」
「どうしよう！」
「少し手荒いが我慢しな。」
そう言うと、ネルは俺を抱え上げ、垂直にジャンプする。凄い圧力だ。体がしたに引っ張られる感じだ。俺はワンコが落ちないように優しく、ガッシリと抱える。
すると、エルストリアが見えた。しかし、見え方が違った。
いつもは見上げる方だった俺の視線が、今は見下ろす方になっている。
すると、瞬間的に浮遊間に浸った。そして落ちた。
「歯食いしばれよ？舌を噛む」

そい言うと、木のてっぺんに綺麗に着地し、次の木へと飛び移る。
そんな事を何度も繰り返しているとエルストリア国内に入った。
「さ、着いた。早く女王様に見せな。一番手っ取り早い。」
ネルは俺をそっと下ろす。
服に血が少し付いた。あの返り血は少し固まっていたみたいだ。
「え？ネルは？」
「俺はまだフェンリルを探さないといけないんでな。」
「分かった。気をつけてね！」
「あぁ。」
そう言うと、また高く飛び上がり、国を囲む塀を飛び越える。
俺はそれを見届けた後、王城へと走る。

２４話：ワンコと浮遊感！！（後書き）

少し長くしたいえぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

25話：干し肉って硬さどんくらいだろう？（前書き）

皆さんは分かりますか？
僕は分かりませんｗｗｗｗ

25話：干し肉って硬さどんくらいだろう？

「女王様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
俺は王の間へと入る。

女王様の元まで走っていくと、隣にいた年老いた大臣が女王様と俺との間に立ち俺を止める。

「どうなされた！具現士殿！」
大臣が慌てた様子で聞いてくる。
「わ、ワンコが！」
俺は抱えているワンコを大臣に見せる。
「わ、わんこ？」
大臣はワンコを見て驚いた顔つきで俺を女王様の元に通す。
俺は女王様に傷つき昏睡したワンコを見せると
「まぁ大変！早く手当てしなくては！」
と言って俺の抱えているワンコをゆっくり優しく持ち上げ、女王様の太ももに下ろし、両手を翳す。するとその手が眩しく光り、ワンコに降り注ぐ。
すると微かだが、傷が無くなりワンコが動くのが分かった。

そうして数十秒するとその光は消え、女王様はふぅ。と一呼吸置く。

「大丈夫です！もう少し時間がたてば意識が戻るでしょう。」
その言葉を聞き、俺は一気に緊張が解れ、その場に崩れ落ちる。
「良かった～！」
「それよりも何故この犬を私のところに？」
「ネルが、女王様のとこまで連れて行って見てもらった方がいいって言ったから。」

「そうですか。後で礼を言わないと・・・ですね。そうだ！タケトさん。この子を放して来てくれませんか？」
と女王様が俺に聞く。特に断る理由が無かったので、
「分かりやした！」
と快く引き受けた。

治った治った～♪
俺はスキップをしワンコを抱えながら門へと向かう。
門に着くと、兵士が何人かいて、崩れ落ちている。俺は慌てて近寄り、安否を確かめる。
「大丈夫か！？」
「あぁ、大丈夫だ。ただ疲れて。」
「そうか。お疲れ様。」
「具現士様はどちらへ？」
一人の兵士が俺に聞いてくる。
「ん？あぁこいつを放しに行くのさ。」
俺はワンコに目をやる。
「犬？どうしてまた犬なんて。」
「アリエスの森で傷ついてたの見つけたからさ。ま、そう言う事だよ。」
「そうですか。気をつけて。」
「あい！」
そい言い門を出て、あの傷ついていたあの場所を目指す。前と違って目印を付けながら進む。
目印は、具現化した小石だ。
どこのヘングレと思われるかもしれないが、これぐらいしか思いつかなかったのだ。下手に目立つやつだったら他の敵にバレるかもしれないからだ。

そうして辺りをうろついているとあのワンコが倒れていた木の前にたどり着いた。
俺はまだ意識が戻っていないワンコを下ろし意識が戻るのを待つ。
待たなければこいつがどうなるのか分からないからな。

数分後、ワンコがゆっくりと起き上がり辺りを見渡す。
「気がついた！！」
俺が大声を出すと瞬時にこちらを向き、俺を人間と判断した後毛を逆立たせ俺を威嚇する。
「ご、ごめんよ！驚かせるつもりは無かったんだ！」
本当です！許して下さい！・・・誰に謝ってんだろ俺。

しかしワンコは俺を威嚇したままだ。

今にも襲いかかって来そうだ。
仲直りがしたいので俺はポケットを漁る。
お、あったあった！

俺がポケットから出したものは・・・朝、途中おっさんに貰って隠し残した干し肉だった。

・・・なんで残したのかって？
固さが半端なかったんだよ。あれだぞ！？おっさんの噛む音、ゴリゴリとかバキバキってすごい音したもん！俺こっそり床に落としたら、カランっていったもん！

しかしそれをワンコにあげようとする俺もどうかしている。

しかし、ワンコの方は警戒を解き目を輝かせながらその干し肉を見る。

「あ～、やっぱいる？」
俺はワンコに聞くと、さっきまで俺に襲おうとしていたはずなのに
今は俺の左手にある干し肉を狙っている。

「はい！」
そう掛け声をかけ、干し肉を投げる。

「ハグ！」
何時の間にか宙を舞っていた干し肉が黒いワンコに撃ち落とされ、
餌食となった。

「ガリガリ！！バキバキ！！」

とおっさんが噛んだ時の音が聞こえる。

あっという間に干し肉を食い終わり、俺を見る。まるでまだ寄こせ
と言っているかの様に目を輝かせている。

幸いまだ干し肉はある。
俺が食う事はないからあげても構わないんだが。

カラカラ・・・
幾つか残っていた干し肉を全部取り出し、放り投げる。
あ、軽くだぞ？
ボトっと鈍い音をして地面に落ちる。
瞬時に干し肉を取りに行く。
そんなに好きなのかよ！！

そんな事をしていると周りがガサガサと騒がしくなる。

「ん？」

26話：焦り

よく目を凝らすと、全方位をオルティガの兵士に囲まれていた。
その囲まれている先にいるのは俺と黒ワンコだ。
うん。詰んだな。

冷静過ぎるだろ俺！！
もう少し焦ろうや！

幸いワンコはまだ干し肉を食べている。

ジリジリと縮まる距離。
持っているものは、抜けない二刀だけ。

具現化すれば持ち物は無限大になるが、生憎何を具現化すればいいのか分からない。

いや、武器などを造ったところで勝ち目はない。
そう。もはや俺の死は・・・いや、俺とワンコの死は確実なものとなったのだ。

「ごめんなぁ・・・」
俺はワンコに謝った。
ワンコは俺の方を向き首を傾げる。
今更ながら後悔した。

すぐにここに連れてきたから・・・

すると一斉に兵士が飛び出し完全に俺らを囲んだ。

「おぉ！エルストリアの兵か！こいつはいいぜ！ブッ殺してやる！」

そういい一人の兵士が俺に飛びかかる。

殺られる！！

俺は怖くて目を瞑った。

しかし相手は襲って来ず俺は目を恐る恐る開けると、あのワンコがその兵士に噛み付いていた。

その兵は藻掻くがそのワンコに抵抗出来ずそのまま動かなくなってしまった。

そう。ワンコが兵士を噛み殺したのだ。俺は初めて人が死ぬのを真近で見たのだ。

腰を抜かして立てない。

綺麗に光っていた黄緑の草が血で真っ赤に染め上がる。

ぷぅんと血独特の錆びた鉄の臭いが鼻に突き刺さる。

ワンコは無我夢中でその死骸を貪り尽くす。

内臓や肉などの塊が飛び出る。

俺は気持ち悪くなり吐き気と目眩に襲われた。

兵士達は只々立ち尽くしたままだ。

するとワンコは周りにいた兵士達を睨む。

兵士達は怖気づき走り去って行った。

俺は未だに足の震えと、吐き気が収まらない。

ワンコは俺を向きゆっくりと近づいてくる。

口の周りは血塗れ。剥き出しの牙はさっきの綺麗な白では無く真っ赤というよりは黒に近い色になっている。

よく見ると、さっきまで抱える事が出来るぐらいの小ささだったワンコが犬よりも一回りデカイ図体になっている。何だかおかしい。これじゃあまるで犬じゃなくて狼・・・・・・・！！

そこで俺は一つの可能性を見出した。
もしこのワンコが狼だったら？
もしこの毛並みが黒では無く白銀だったら？
だとしたら目の前にいるのは・・・

フェンリル

しかし、それは悪魔で俺の推定。まだ可能性は低い。
確かおっさんはフェンリルは人間を敵視していると言っていた。
だったら問いかけるまでだ。あの時に会得したワンコはと話せる能力を使う。駄目元で！！

「ストップ！！」
するとワンコは止まり首を傾げる。
「いいか？今から質問するから答えてくれ。」
するとワンコはコクリと頷く。

よし！通じているみたいだ！！
そして俺は単刀直入に聞いてみた。

「お前・・・フェンリルなのか・・・？」

ビクンッ！！と体が大きく動いた。
【だとしたら？】
と聞こえないのにそんな言葉が頭に聞こえる。
「だったら証拠はないのかな～ってさ。ほら！毛の色とかさ。」
【ふん！これでいいか？】
そう言うと、あの黒かった毛がみるみると白銀と変わる。しかし血がついている部分はそのまま残り顔が血だらけなのがよくわかる。
これでこいつが完全にフェンリルだと言う事が分かった。
しかし俺はこの毛並みについ見惚れていた。
「・・・奇麗だ。」
そんなことが口から零れる。
【当たり前だ。我は誇り高き魔狼だぞ？】
「だからってこんな奇麗な毛並みが普通って凄いな。」
【む？そうか？】
「そうだよ。」
俺が思っていたよりもフェンリルとはいい精霊なのかもしれない。
と心の中で思った。
【さて、正体を知られた。これはもう生かしてはおけぬ。】
え？
【死ねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！】
フェンリルが飛びかかる。
生身の人間の俺が狼に追いつかれない訳がない。
俺は押し倒され頭に噛みつこうとするフェンリルの顔を押し戻す。
しかし力が強すぎて、押し戻す事も出来ず、逆にジリジリと顔との距離を詰められる。

「ぐぐぐぐぐ・・・！」
【ほう？まだ耐えるか！】
当たり前だ！！耐えないと死ぬだろうが！！
【早く！早く殺さないと！！】
何故かフェンリルは焦った様にその言葉を繰り返す。
するといきなり目の前が真っ暗になり、俺は意識を失った。

２６話：焦り（後書き）

後少しだ！ｗｗ

27話：昔の恐怖1

ここは・・・
俺は仰向けの身体を起こし辺りを見回す。そこは俺がフェンリルに襲われた場所だった。しかもそこには、フェンリルがいた。
「ヒィ！」
俺は怯えて後退りをするが、何故かフェンリルは襲って来ず俺を見ている。
「居た！」
俺の後ろから何人かの子供の声がする。
次の瞬間
ビュン！と小さな塊がフェンリルに目掛けて投げられる。
小さな塊とは石ころだ。
フェンリルは驚きながら避ける。
【や、やめてよ！】
フェンリルの声が聞こえる。が、あの子供達の耳に届いて居ないかのように石ころを投げ続ける。

「父ちゃんが言ってた！真白な狼は僕たちに悪い事するって！だから消えろ！！」
「居なくなれ！」
などと罵声を浴びせる。
俺は我慢出来なくなり、フェンリルの前に立ち庇うようにして立った。
「いい加減にしろ！」
しかし、その言葉は子供達に届かず、また石ころを投げつける。俺は身を呈して受け止めようとしたが、その石ころは俺をすり抜けフェンリルに当たりそうになる。
心臓がドキンと疼く。

後ろを振り向きフェンリルの安否を確認する。
【ガッ！！】
鈍い音が聞こえ呻き声も聞こえた。

そう。とうとう当たったのだ。
フェンリルはその場に突っ伏し動かない。
「やった！当たった！」
一人の子供が大笑いした。
それに便乗し、また投げつける。
俺は何も出来ず只々見ているだけだった。しかし次の言葉に堪忍袋の緒が切れた。

「やっぱり殺そうか！」
小さい子が口にする言葉じゃ無い。小さい子好きだった俺にとってはとても腹だだしい言葉だった。子供は子供でもやはり個人の性格があるのはわかっていたがココまでとなると我慢の限界だ。

「好い加減にしろよ？」
身体が熱くなるのを感じた。
「あれ！？こいつ居た！？」
「いいや！知らない！！」
その言葉からして俺が見えたのだろう。
俺はそっとフェンリルの頭を撫でながら子供の方を向き

「てめぇら・・・命をなんだと思ってやがる。」なんて、何処ぞのヒーローが言いそうな言葉を発する。

「な、なんだこいつ！」
「帰ろう！？なんかヤバイよ！」
俺は帰す気はない。
こいつ等を拷問する。命の尊さと言う物を叩き込んでやる。
さっきまでの俺が考えそうもなかった事だった。
「「「ワー！！」」」
一斉に子供達は後ろを向き逃げ出す。
それを俺が逃すはずも無く、具現化したロープで子供を締め上げ木に吊るした。
「ウワーン！母ちゃーん！」
「助けてー！」
「見てろよ？」
そう言ってそこに居た小鳥を捕まえ強く握る。
しかも子供達の目の前で。
「やめてー！！」
子供が泣き叫ぶ。
「何でだ？お前等がやろうとしていた事を俺がやって見せるんだぜ？」
正直俺も怖い。
鳥の心臓の鼓動も早まり、口も開いたままだ。
「ごめんなさい！ごめんなさい！」

27話：昔の恐怖1（後書き）

文少なくてすみません><

２８話：昔の恐怖２そして・・・（前書き）

やっとです。

これからも更新していくんで宜しくお願いします！

28話：昔の恐怖2そして・・・

しかし俺はやめずに力を入れ続ける。
「あああああああああああああああ！！」
とうとう子供が狂い始めた。
と言うより何秒かジタバタした後に動きが止まった。
恐らく気絶でもしたのだろう。
本当はまだ痛め続けるつもりだったのだが、これ以上すれば危険だと思ったので子供を降ろし、フェンリルのほうを見る。

フェンリルはもういなくなっていた。
するとどうだろう。また意識が無くなり目を覚ませばほら、また地面に仰向けで倒れていた。
【・・・起きたか。】
と聞いた事のある声が聞こえた。
「フェンリル！！」
そう。紛れもない俺に襲いかかったあのフェンリルだ。なぜ判ったかというと、顔にあの兵士の血がついていたからだ。
それじゃあさっきまでのフェンリルは・・・
【・・・見たんだろう？あの忌々しい記憶を。】
とても弱々しく話す。
「・・・あぁ。」
【どうだった？さぞ愉快だっただろう。】
愉快だった？何を言っているんだ？
「んな訳ないじゃん。」
【・・・何？】
俺もそう言う奴等をたくさん見て来た。不良にボコボコにされて、また虐められる奴等を。
現に俺もそうだった。と言っても俺の場合1日2日で決着がついた

けどな。

ほら、兄貴だよ。

直ぐ俺の変化に気がついて一方的に聞いてきて俺が白状したんだ。

案の定、その不良共は直ぐに病院送りにされた。

だからその気持ちはよくわかっている気だ。

「怖かったんだよな。」

俺も怖かった。何もしていないのに行き成り殴られたし、蹴られた。

【黙れ。】

フェンリルからそんな言葉か出るが俺は無視して言葉を続ける。

「辛かったよな。」

俺も辛かった。家族にも友達にも言えなくて只々ずっと心の中に溜め込んだままだった。

「だからさ・・・【だからなんだ?仲良くしようと?巫山戯るな!人間風情が!!】

最後まで言う前に言葉を止められてしまった。しかしフェンリルが言ったとおり仲良くしようと言おうとしていた。

そりゃあそうだろう。似た経験をした者同士、仲良くしようとするのが普通だろう。

「巫山戯てない。俺は本気だ。」

あぁ。本気だ。

【・・・ならば我を力尽くで認めさせてみよ!!】

するとフェンリルのいる足場から湯気なの冷気なのかよく分からない物が漂う。

まじかよ。さっきも死にかけたのに真剣に戦うだなんて・・・イヤァァァァァァァ！！

すると行き成りフェンリルが姿を消した。

【緩い。】

背後から寒気を感じた。振り向くとフェンリルが口に何やらあの漂っていた蒸気のようなものを溜めていた。

まさかあのよくあるなんちゃら光線とかを出す気か！？

ほんのりと薄く輝き、その明るさがどんどん増す。

ビュン！と蒼白の閃光が俺の身体の横を通る。

態と外したのか分からないが助かった。

【外したが、次は当てる。】

すると、フェンリルは魔方陣を自分の下に出す。

俺は体制を立て直しフェンリルの方を向く。

何が来る？また光線か？それとも他の技か？

そんな思考ばかりを頭に巡らせているとフェンリルが軽く跳ね上がり地面に着地した。

すると、同時に地面から鋭い氷の塊が空へと飛び立つかの様に凄い

スピードで放たれる。
それがどんどん俺へと近づく。
無理だろ！避けれねぇって！
俺は何も思いつかずそのまま身を守る様に防ぐ。
股間に当たりません用に！

ガガガガガ・・・
とうとう俺の足元から無数の氷が飛び出す。
「うあああああ！！」
幾つか身体に当たる感覚を覚えたが、痛くない。
「あれ？」
氷の襲撃が止んだのを見計らい俺は身体を見回す。

無傷だった。
服は少し裂けていたが傷一つ身体についていなかったのだ。
変わっていた事がもうひとつあった。俺の持っていた刀の一つが青い濁った光を放っていたのだ。
それを見ておっさんのある一言を思い出した。
確か、刀に心があって気に入った人にしか抜けなくて、もしそうだったら起こった被害を最小限にしてくれると。
もしこれが本当なら・・・
今の俺ならこいつ等が抜けるはずだ！！

俺は光った方の刀の柄を撫で、「頼むぞ。」と小声で語りかけてギュッとその刀の柄を握る。
そしてゆっくりと鞘から引き抜く。

走って飛びつこうとしたフェンリルが足を止め、目を細くしている。

その時、俺は初めて刀を鞘から全て抜いていた。

２８話：昔の恐怖２そして・・・（後書き）

なんか思いついたので
新しい小説書いてみたんでそちらも
お時間があればお願いしますｗｗｗ

29話：ピンチ！！

「ぬ、抜けた・・・」
まだ光が消えない刀を見る。
そこで俺は気づいた。
刀の刃が無いのだ。
「あ、あれ？・・・ええええ！？」
何でぇ！？
俺は刃があると思われる部分を触ってみるが何も感触がない。
だって、抜いた時確かにあった感じしたもん！擦り合わさる音聞こえたもん！

【ふん！脅かしおって！】
そういいフェンリルが飛びかかってくる。
「うわ！」
俺は咄嗟に刃の無い刀で防ぐ。
なにやってんだよ俺ぇぇぇ！！

バチィィィィ！
と静電気よりも大きな独特の音が聞こえた。
瞼を開け、前をみるとフェンリルが倒れていた。
な、何が起こったんだ・・・
すると、行き成り頭に何かが入り込んできた。
”我が主、具現士様・・・”

と言う言葉が頭に現れた。
勿論声はない。
ただ何となく聞こえた気がするだけだった。

「誰だ！」
俺はフェンリルを警戒しながら心の中で呟く。

”今、あなた様の持っている刀です。”

「こいつ？」
俺は刀に目をやる。

「だとしたなら聞きたい事がある。」

”何故刃が無いのか・・・ですか？”

「！！」
驚きだった。まだ言って一秒もしない内に答えたからだ。
多分自分でも自覚しているのかもしれない。

”それはですね、私の造りは他の刀と違うんですよ。”

「？？」
何を言っているんだろう？

”私ともう一つの刀の事は知っていますね？”

「ま、まあ。確か世界一の鍛冶屋に作られたとか。」

”その通りです。そして・・・まあ、長くなるのでいいです。”

「何だよそれ！」
少し頭に来た。言おうとして途中で止めるのが大嫌いだからだ。
”申し訳ありません。そろそろあの者が起きます所以(ゆえ)、簡単な説明だけ教えます。”
「まじ！？」
俺はフェンリルに目をやると身体を起こそうと必死になっていた。
”いいですか？私の刃の部分は具現化をして頂ければ使用出来ます。”
「成る程。」
”刃の部分に念をかけて頂ければ、どの様な形にも構造にも変化出来ます。ただ、形を変化すると、重量も変化するのでご了承を。”
と言う事は、あんまデカすぎると、重さも増えるって事か。
「わかった。」
”さぁ、来ますよ！防ぎは任せて下さい！”
「了解！！」
【んん・・ぬぅ・・・甘くみ過ぎておった。だが今度はそうはいかん！】
フェンリルが立ち上がり、また魔方陣を出したが、今度は俺の足元にあった。

気にせず俺は持っている刀の刃を想像する。

”随分と拘りますねぇ。”
と感じた。
「頼むよ。」

”分かりました。”

念じ終わったので、目を開けると、まだ刃はついていなかった。

すると
【これで終わりだ。】
そんな冷徹な言葉を発した後、直ぐに魔法が発動した。

足元から出た吹雪が俺の周りを渦巻き、逃げ道を塞ぐ。
うぅ・・・寒い！

それと同時に俺の持っている刀の刃が根から順々に形成されていく。
その間、吹雪から小さな礫が俺に絶え間なく襲いかかる。
幾らこの刀で防げていても、当たる感覚はするし、寒さまでは防ぎ切れていない。

そんな事を考えていると、刀の刃が出来上がっていた。
俺が想像したのは模造刀。
そう。形は刀だが斬れない刀だ。

これだったら、あいつも死ななくて済むしな。

そんな事より、ここをどう潜り抜けるかな？

上を見上げると、結構高いところまで渦巻いている。このままこの渦巻きに身を委ねようかな？でも着地出来なそうだし。

”我が主様。このまま突っ切って下さい。私が防ぎ切ります。”

「だ、大丈夫か？」

”私は平気ですが、主様には大きな負担がかかるかと。”

「どう言う意味だ？」

”はい。主様は寒さを感じておりますよね？”

「あ、あぁ。」

”私と言えど、温度までは防ぎ切れません。そうなってしまうと、あの吹雪の温度が推定－５０。ですから、大きな負担がかかると申しております。”

「と言う事は、－５０。の中を潜り抜けるか？と言う事か？」

”・・・そうなります。”

ｏｈ・・・ナンテコッタ。

”ま、まあ、一瞬ですから！頑張ってください！”

「いや！まだ行くって決めて無いんだけど！？」

【所詮、貴様も他の人間と同じって事だな。】
フェンリルが呆れたように放つが吹雪の音でよく聞こえなかった。
「くっ！待ってやがれ！今そっちに行っててめぇを捕まえてやる！！」
俺はそう言って準備体操をする。
「一、二、一、二！よし！」
そぉっと一歩踏み出す。
ひぃ！足が！
さっきよりも寒い！
視界も悪い。
目が開けれなくなってきた。
”一気に行きましょう！大丈夫！抜け出して倒れて襲われても守りますから！”
あ、それ前提で言ってるのね・・・あー！もうどうにでもなれ！
そう思って俺は吹雪に挑んだ。一瞬浮遊間と寒気が襲い、俺は止まりそうな足を必死に前に出す。数秒後やっと吹雪の中から脱出できた。
しかし刀が言ったとおり、俺の身体は動作を停止し、そのまま突っ伏した。
言葉も出ない。

【ほぅ。あの中から出て来るとは、中々だがもう動けまい。】
ゆっくりと、一秒一秒を楽しむ様に俺に近づいてくる。
確かに動けない。
ふっふっふ。だがこっちには刀さわがいるのだ！
「任せたぞ！刀さん！」
”すみません。私も動けません。”
出たのは余裕を表す言葉ではなく、謝罪の言葉だった。
「は？」
”軽率でした。まさか私まで動けなくなるとは思いませんでした。”
「と言う事は・・・」
た、食べられる！！
嫌ぁぁぁぁ！痛いの嫌ぁぁぁぁ！誰か！誰か助けてぇぇぇ！
”落ちついて下さい！まだ方法はあります！”
「グスッ・・・どんな？」
俺は弱々しく刀に問う。
”もうひとつの刀を説得してきます。”
「？？？」

”幸い、あちらはもう勝ったつもりでいる様でじっくりと時間をかけて殺しに来るでしょう。”

「やっぱり殺しにくるんだ！」

”そうですが、その前に手を打つ為に説得しに行くのです。”

「な、成る程。」

”わかってくださったなら、そのまま辛抱していて下さい。”

「わ、わがっだ！」

”では。”

頼んだよ～！！

それから数分経つと、フェンリルが俺の身体の周りを警戒しながら回る。

【さて・・・どこから食ってやろう？足か？腕か？それとも・・・顔か？】

顔はダメだろ！

30話：カウントと火達磨。

そんな事より、さっきからフェンリルが俺の周りをグルグルと回り続けている。

刀さーん！早く来てー！

”お待たせしました。”

俺の願いが通じたのか戻って来てくれた様だ。

「んでんで！？なんて言ってた？」

”はい・・・あのぉ～・・・・”

と歯切れが悪く頭に伝わってくる。

「何かあったのか？」

例えば力を貸さないとか。

”い、いえ。そんな事は。”

「そうか？」

”はい。ただ・・・”

「ただ、何だよ。」

”非常に申し上げ難いんですが、残りの一刀は力を貸してやってもいいが、どうなっても知らないぞ？って・・・”

あー、そりゃまぁなんとも非常に意味深な・・・
けど、こんなやり取りを続けていたら俺は死んでしまう。

「わかった。そう伝えてくれ。」

”畏まりました。”

すると、顔に何やら生暖かい感触がした。感触が無くなった後、やけに肌が冷たく感じた。
目だけを動かすと、フェンリルが俺の顔を舐めていたのだ。

【ふむ。中々柔らかそうだな。】

え？あれか？下味か！？
おいおい、まずいぞ！二つの意味で！

食べても不味いと言うまずいと、そろそろまずいと言うまずいだ。
言わなくてもわかるか！

しかし、ある事に気づいた。
どうなっても知らないと言われた恐怖より、顔を食われると言う恐怖の方が怖かった事だ。
い、嫌ぁぁぁぁ！

”言って来ました。それではカウント始めます。5、4、3、”
刀さんが帰って来たと思ったら直ぐに数字を数え始める。

はい？カウント？え？何の？

「あ、あのぉ～・・・カウントって・・・何の？」

”2、1、あ、はい。何でしょう？”

0

俺が刀に問いかけている時に、そんな数字が浮かび上がった。

そして、また一つ気づく。

俺、どっちにしろ死ぬんじゃね？

その瞬間、フェンリルが覆いかぶさる様俺の身体の上に跨り、に大口を開け、俺の顔を一口で食う勢いで牙を剥き出しにして迫って来た。

それに比例するように、俺の身体中に熱が迸る様に熱くなる。

うん。うん。ジワジワくるわぁ。

すると、ゴォォォォォォォォォォォォと、俺の身体から大量の炎が噴き出し、俺の身体は火達磨になった。

あっちゃい！あっちゃい！

こんな声ですんだらいいんだろうが、そんな余裕はない。

はっきり言って息ができない。

苦しい。目も開けられない。

しかし、その炎は跨っていたフェンリルにも着火し、フェンリルも

火達磨になり跳ねて俺から遠ざかった所で転げ回る。
俺も転げ回る。
まあ、普通は反射的にするよな。
そしてわ何だかその熱さにも慣れたが、身体が動かなくなって来た。
その瞬間。
身体の上から、熱湯がかけられるように何かが流れてくる。
それはどんどん冷たくなって、ようやく冷水をかけられている事に気づいた。
しかし、誰がかけてくれたんだろうか。
目を開けようとするが、皮膚が溶けてくっ付いてしまったようで、開けられない。身体も手は刀を握ったまま開けない。
耳は聞こえない。全身の皮膚も溶けたようで何かと擦り合うだけで激しい痛みに襲われる。
しかしよく死ななかったものだ。
”主様。ご無事ですか？”
声が聞こえないせいか、他人事の様に聞こえて腹立つ。
「この通りだよ。」
”申し訳ありません。残りの一刀を説教して、戻ってみると主様が転げ回っていて、少し経つと動かなくなったので、水をかけました。”
「あ、あぁ。有難う。けどどうやって水を？」

”刀にも属性がありまして、しかも私や残りの一刀は心を持っているので、勝手に発動できるのです。”

へェ〜。

「改めて有難う。けどもう一つ・・・説教や見ている暇があったら、早く助けて！？」

”以後、善処します。”

「頼むよ。あと、この身体治せる？」

”任せて下さい。”

すると、何かが身体を包み込み、気持ちいい感覚に襲われる。

まるで、水中の中にいるみたいだ。

身体が少し動かせたので、目を開けてみる。開けれたが、まだ少し痛む。首をゆっくりと動かし、身体を見る。

まだ完治していないからか、とてもグロかった。

皮膚は無く、血と肉が剥き出しの状態だった。

うぉえっぷ。

３０話：カウントと火達磨。（後書き）

一日更新辛いよぉ～＞＜

31話：休戦と火達磨擬き。

はあ・・・俺は首を元の状態に戻し、目を瞑る。

見なきゃよかった。

吐き気がヤバイ。

ん？そう言えば、フェンリルはどうなったんだろう。そんな事が頭を過る。確か、俺と同じく火達磨になったはずだ。そのまま放ったらかしにして、治療を受けてるけど、大丈夫だろうか。

”フェンリルなら大丈夫ですよ？”

俺の心を読み取った様に語りかけてくる。

「本当か？」

”はい。自分の氷で辛うじて炎を消したみたいです。”

「そっか・・・待てよ？つう事は、あいつはまた襲って来るんじゃ・・・！」

安心して安らかに閉じた目を不安で一杯にして開ける。

俺、結構心配性なんだよね！

”それはありません。”

きっぱりと、言い捨てる。

「何で？」

”それは、恐らくフェンリルの発動させた氷は絶対零度。つまり、自らも凍って動けなくなったのではないかと。”

「じ、じゃあさ。凍ったまんま？」

さっきからわからない事だらけで頭がぐちゃぐちゃになって来た。

”それもありません。フェンリルが自分で出した氷なので、次の日になったら氷の中から出ているかと。”

「そうか。」

”・・・はい。これでもう安心でしょう。”

そう言い終わると、俺を覆っていた何かの感覚は消えた。それと同時に擦れると痛かったあの痛みが消えている。

「有難うな。」

お礼を言って、柄を撫でる。

”いえ。お褒めに預かり光栄です。”

「ははっ。堅っ苦しいなぁ。もっとフレンドリーに話せないのか？」

はっきり言ってあんまり話し方が堅いのは苦手だ。そういう人を相手にした事がないからどう話していいものやら分からないんだ。ま、相手は人じゃないけど。

”フレンドリーですか。・・・やってみます。”

「はいよ。」

おっと、そうだ。
俺はフェンリルに近づく。

”主様。触るならばおやめになって下さいね？先も言いましたが、フェンリルの氷は絶対零度。もし触ってしまおうものなら、恐らく主様も凍ってしまうでしょう。そうなってしまうと幾ら私でもこれは防ぐ自身がないのでそこだけご了承を。”

と早口で告げる。

「あいよ。警告どうも。」
けど、刀が言う警告をする気はなかった。
空を見上げれば夕暮れ時。
そろそろ帰らないと、おっさんや、リクさんが心配するだろう。しかし、このまま放置さるとフェンリルが逃げる可能性や、敵国に捕獲されるかもしれないので、保険をかけておくだけなのだ。

俺は檻を想像した。
それを感じ取ったのか、
”そんな必要はないかと。”
と刀が言う。

「いいんだよ。ただの俺の自分勝ってな行動だから。」

”はぁ。”

そう言って、俺は集中する。

そして、ちゃんと形を想像出来たら、位置を決めそこに具現化する。

ガッシャン。
完璧な檻がフェンリルの氷のまわりにピッタリとはまる。

そして、焼け焦げた服を脱ぎ、具現化した服を着る。
そうしないと心配されそうだしね！

良し！
「帰ろう。」
そう言って俺はエルストリアに帰る。

おっさんの家に着くと、もう皆ご飯を食べていた。

「遅かったな～。」
「何かあった？」
と、おっさんとリクさんが訪ねてくる。

「うぅん。何にも。」

「おにーちゃんなんか、臭い。」

ちっちゃい子に指を指された。
な・・・何だと・・・？

「クンクン。んー、確かに何か臭うな。」
おっさんまで言う。

「それじゃあ、ご飯の前にシャワー浴びて来て？」
ミースさんが俺に言う。

「はい。」
返事を短くして、そのまま居間を出て、シャワー室へと猛ダッシュで駆け込む。
一刻も早く子供達に嫌われない様に良い匂いにしなければ！！
そんな事を思いながら、身体を凄い勢いで泡立てたボディタオルで擦る。火達磨の時ほどではないが火が出そうなくらい凄い熱かった。

32話：対策

皮が少し剥けてしまったが気にせず擦り、泡を洗い流す。
洗いすぎでよく見えなかったけど全身真っ赤っかだった。
しかもお湯なだけあってヒリヒリする。

「ふぅ。」
そのまま上がり、身体を拭いて服を着て居間へと戻る。

「ただいま～。」

「お！良い匂いだな！！」
「ほんとだー！おにーちゃん良い匂いー！！」
先ほど俺を臭いと言った子供が満面の笑みを浮かべて言う。
よっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

「けどずいぶん早かった。」
リクさんがなんか不潔な眼で俺を見る。
な、何でだ・・・？
ちゃんと身体洗ったし、服だって新しいのに変えた。
けどリクさんは何でそんな死んだ目で俺を見るんだ？
「多分、シャワーを浴びるのが早すぎたからじゃないかしらぁ？」
などとミースさんが・・・あれ？

「ミースさん。俺の心読んだ？」
俺が尋ねると、
「え？何言っているのかしら？」
と、とぼけた様に顔をキョトンとする。

「・・・」
ミースって綺麗だなぁ。
「あら！そうかしら？嬉しいわぁ！」パァァァァ
と俺の顔を見て笑顔で喜ぶ。
「やっぱ読んでたんじゃないですか！？」
これで俺の疑問も解決した。
「あらぁ。私を騙したの？・・・いけない子ねぇ。」
何故かミースさんの背後に何か黒いオーラが見える。俺が周りの人に目をやると、おっさんは目で俺に早く弁解しろ！と言っていた。リクさんも同様だ。唯一子供達はニコニコと俺の顔をを見ていた。
「い、いえ！全然！ほ、本当の事ですよ！僕がミースさんを騙す訳ないじゃないですか！アハ！アハハハ・・・」
俺が笑い飛ばすと皆も合わせてくれた。
そして、笑いが消えると少しの静寂が流れる。
「・・・そうよねぇ！タケトさんがそんな事するはずないですものね！すぅ・・・ふぅ。それじゃあタケトさんの分の料理を持って来るから待っててね？」
そう言いルンルンとキッチンへスキップしながら向かう。
た、助かった～！
こっそりおっさんが手招きして来たので耳を寄せると
「よくやった。」

と小声で褒められた。

飯も食べて子供達とじゃれあって、そろそろ寝る時間。

「坊主。明日も早いからな。気を引き締めておけよ！」

「わーってるって！お休み！」

俺はそう言うと颯爽（さっそう）と部屋まで走る。

よし！

フェンリル対策を練らなければ！！

思い立った俺はおっさんから貰った書物を全て横に並べ、使えそうな本から読み始める。

一番最初に読んだのは精霊集だ。

確か、フェンリルは氷の精霊だったから載っていると思ったのだ。

そのページを捲ると、レトンのような写真では無く、ただの絵だった。

何でだろ。

そんな事を思いながら読んでいくと、

フェンリルに出会ったら、写真（フォト）なんて撮ってはいけない。フェンリルがキレて食い殺すからだ。

と書かれていた。

おぉそう言う事か！！

そんな呑気に思いながら読み進める。

色々とまとめるとこう言う事らしい。

・出会ったら固まれ。必ず動くな。

・精霊にしたいのなら、死を覚悟で挑め。

・フェンリルの吹く息吹は最終的には凍らせるが、その間は極寒と灼熱を交互に感じさせるらしい。

・もし、自分の精霊にした事が公けに暴露た（ばれた）場合、自分自身も他国から狙われるだろう。

との事だった。

３３話：魔術

そしてその部分に具現化をした付箋を挟め今日は休もうと床につく。

次の日、おっさんと建物の修復へと向かう。

「今日は坊主は俺の方だぞ？」

「えー！マジかよ～！！」

「おいおい、そんな嫌な顔をしなくってもいいだろーが！」

ハハハと笑いながら作業を進める。

「随分直ったよなぁ～・・・」

おっさんがしみじみと言う。

「ま、まだまだかかりそうだけどね。」

なんか空気読んでねぇな俺ｗｗ

「そうかもしれねぇけど俺等からしてみればここまで直ったのは久しぶりだよ。」

何時もなら俺の言葉に反応するおっさんだが今回は全く反応せず、晴れ渡り、何一つない虚空の空を見上げとても優しい笑顔を溢していた。

そんなに嬉しい事なのか？

すると空を見上げるおっさんが行き成り悲しい顔になり

「前はなぁ・・・」

などと語り始める。

あの・・・作業・・・

その話が１０分以上語り続ける。

それを聞いた俺はショックを受けた。

何でも直しても直しても敵国に攻められてまたやり直し。その繰り返しばかりだったらしい。

「ま、俺等は根が強いからそんなんじゃへこたれる訳なかったんだけどな！ガハハハ・・・」
と大笑いをしていた。

あっという間に昼になり、俺とおっさんは稽古に移る。

稽古は前とはさほど変わりわしなかった。
時間が少々余ったので、おっさんが
「魔術でも教えてやるか。」
と言ってきた。
「マジで！？」
「ん？まぁな。でも簡単な魔術だけだぞ？」
「わーってるって！」
俺はウキウキしながらおっさんの次の言葉を待つ。
何やんのかなー？

「ま、ガキでも出来る奴だな。いいか？見てな。」
するとおっさんが人差し指を立てる。

するとボッ音を立てた後、ちいさな火の玉が人差し指の上にプカプカと浮かんでいた。

すげー！
俺は心の中が凄く熱くなった。とても俺にとっては物凄い感動出来る出来事だったのだ。あっちの世界だと一生見れるはずの無い事が見れたのだから。

「ま！やり方からだな。」
そう言い、俺に手解きをしてくれた。
「いいか？まずは炎を想像するんだ。」
おっさんは俺にとって、具現士にとっての核になっている想像をしろと言った。

俺は言われたとおり想像する。
赤い、メラメラ何でも思った事を想像した。

「そしたら、その炎の特徴をしっかり思い出せ。」
言っている事はよく分からなかったが、多分こういう事だろう。
俺は火達磨になった時を思い出した。

それしかないじゃんか！

「いいか？より感覚や特徴を明白に思い出せているかいないかで威力が全然変わってくる。そしたら一気にその想像を人差し指の上に解放する感じを想像したら放て！」

はい！？どういう事！？放つってどうやって！？

”主様。放つとはそのままの意味でございます。人差し指に力を入れ出ろ！と念じるのです。こう言えば理解して頂けるかと。”

「刀さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」
ありがとぉぉぉぉぉぉ！！おっさんよりわかりやすいなおい！！よっしゃあ！やってやるぜ！

俺は決め刀さんに言われた通りに念じた。

出ろ！！

ゴォォォォォォォォォォォォォ

俺とおっさんのいる部屋が劫火の波に呑み込まれた。しかし、刀さんのお陰げでなんとか怪我をせずにすんだ。
しばらく経って何故か部屋はあまり被害がなかったみたいだ。見渡しても少し焦げている程度だった。

「あ、有難う。死ぬかと思った。おっさんは！？」
俺はおっさんに問いかける。
「あ、え？あ、あぁ。大丈夫だ。」少し動揺していた。そりゃそうだよな。行き成りだったもんな。俺も怖かった。

「・・・お前。何があった。」

３３話：魔術（後書き）

読んでくださる方々いつもありがとうございます！！
これからもよろしくお願いします！！

３４話：調整と発狂

おっさんが真面目な顔で聞いてくる。
俺はおっさんが何を聞いているのか分かった。
確か感覚や特徴をハッキリ覚えているかいないかで威力が変わると言っていた。多分おっさんは、お前に何があってあんな異常な炎が出せるんだ。
と言いたいんだろう。
あれをハッキリ言っても多分笑われて信じてもらえないだろう。

～想像～
「フェンリルとやり合った時に体が凍っちまったみたいで俺には何もできなかったら刀に頼んだら火達磨になっちゃったんだ？」
「え？ｗｗｗちょｗ大丈夫か坊主ｗｗｗ」
～終了～

こんな事になりかねん。

「ん？どうした？言いにくい事でもあったのか？」
「ま、まぁ・・・そのぉ・・・。」
どう言い訳をしよう・・・
そんな事を考えていると
「ま、そんな言いたくない事ならこれ以上深入りしないけどな、言いたくなったら言ってくれよ？あんまり辛い事とかだったなら話は聞いてやるからよ。」
おっさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！
輝いてるよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！
何時振りだろうか、おっさんの後ろが輝いて見える。

「ありがと。」
「良いってことよ！それよりあの炎を調整できるようにしないとな！！」
そう言い調整の練習に打ち込む。
そして大きさも調整出来る様になり、少し練習をした後にフェンリルのいるアリエスの森に行った。
昼の食べ残しの干し肉オッケー！！イメトレオッケー！！よし！これで闘って勝つぞー！
俺は勝つと言う想いを拳に込めながら全速力で走る。
そしてフェンリルのいるあの御神木のある場所に出た。
檻の中にいるフェンリルを覆っていた氷は刀の言ったとおり溶け切り、そのなかで身体を丸め寝ていた。
「よ！」
俺が軽く挨拶をすると、薄っすらと目を開けこちらを見る。そして、直ぐにそっぽを向く。
「あ、そうだ！干し肉を持って来たんだけど食うよな？」
そう言うと
【我を餌付けようとしても無駄だぞ？】
なんて言い出したんだ。
「おいおい。ただ腹減ってるだろうから腹ごしらえって事でさ、な？」
餌付けってなんだろう？

よく意味分からないんだ。

そう言ってポケットに手を突っ込む。するとたんまりと入っていた干し肉が少なくなっているのがわかった。

まず檻を消し、解放する。

【やっぱり貴様は具現士だった様だな。】

「まぁな。悪いけど、少ししかないんだ、いま拾ってくるから待ってろよ！？絶対だぞ！！」

そう言って俺はあった干し肉を投げ落としてしまった元来た道を行く。

「あったあった！運が良かった。全部固まって落ちてやがる。」

広い集め、御神木の場所へ戻る。

「あったぞ！これ食った後勝負・・・だ・・から・・。」

俺は言葉をなくし、持っていた干し肉を地に落とした。

フェンリルの身体が血塗れ。返り血じゃない。ただのフェンリル自身の血。その周りには血のついた剣を持っているオルティガの兵士。

俺は直ぐに悟った。

こいつ等がフェンリルを殺ったんだ。

俺はそこでガラスが割れた様に頭の中が弾け飛び、

狂った。

３４話：調整と発狂（後書き）

更新遅くなってすみませんでした。

３５話：夢と命と誓い（前書き）

次話はキャラ紹介に使いたいと思います！！

35話：夢と命と誓い

「んだよ餓鬼か・・・脅かしやがって。これを見られちまったからには逃げ切れると思うなよ？」

一人の兵士がヘラヘラと俺へ向かってくる。

「・・・」

俺は何も言わなかった。

頭が憎しみだけで一杯だったからだ。

俺の獲物を横取りしやがって・・・殺す。

殺す殺す殺す

それしか頭になかった。
散々人様の国を壊し、生きている者を容赦なく殺す。そんな奴らが生きていると思うと・・・俺らと同じ人間だと思うだけで反吐が出る。
他にもたくさんいると思うが、まずは一人でも多く減らそう。

「あっれ～？逃げないの？あ、分かったー！！怖くて動けないんだろ？だいじょーぶ！すぐに楽にしてやるからさぁ。」
兵士は持っていた剣を相手が振りかざす。

すると突然世界が止まって見えた。
「・・・！？」
俺は体を動かしてみる。

他の兵士は動いていないみたいだ。
「・・・」
”主様・・・”
ハッキリではないがそう聞こえた。
「なんだ。」
”もう一刀が話したいことがあるようです。”
あの火達磨野郎か。
「頼んだ。」

しばらくすると
”・・・”
言葉は感じなかったが雰囲気があからさまに違うのがわかった。あの刀さんを感じた時はとても涼しい風が体を駆け巡っていた様だったが今は灼熱の炎が溢れだしそうな感じがする。
”・・・おい。あいつ等が憎いか？”

「・・・あぁ。」

”どんな風に？”

どんなって・・・

ただ感情に身を委ねて何も考えていなかった。

「・・・人間として。あんな奴らが同じ人間を語ってるなんて思うだけで俺が・・・俺という人間の存在が嫌になってくる。」

”それで？”

「は？」

”それで本音は？”

何を言っているんだ？

これが俺の本音だ。どこも間違っているところは無い。

「助けてやりたい・・・守ってやりたい。」

俺の口が勝手に喋っていた。頭には憎しみだけしか無い筈なのに。

な、なんで・・・

”何をだ？”

あの、灼熱の感覚がドンドンと優しく・・・というよりも弱くなっている。

「フェンリルを・・・いや、あの国も、世界に平和が訪れる事を願っている奴を・・・その為に俺はこの世界にいる。一日、一秒でも早くその願いを叶えてやりたい。」

”その為に何をしなければいけない？”

「戦う！！生き物全てに笑顔を取り戻すために！！」

”あんた一人でか？”

「それは・・・」

痛いところをついてくる。この一刀が言っている事は分かっている。あんた一人だとできないだろう。と言っているのだろう。しかし、分からないのだ。俺一人だと何もできない。だからといって皆俺をどう思っているのか。俺が手を差し伸べたら皆その手を引いて一緒に夢、希望の実現へと歩んでくれるのか。

”怖いのか。他の者が自分の夢物語に乗ってくれるのか。”

「っ！！」

図星だった。俺は何も言えずただ下の草を見つめる。

”その答えは俺にもわからない。ただ、ついてくる奴はついてきてくれる。これからそいつ等を増やしていけばいい。違うか？”

その通りだ。

けど増やし方が・・・いや、その前に増やしていけるか心配だ。

”・・・少なくとも俺とあいつはお前の夢物語に付き合ってやる。”

「え！？」

”二度も言わない。”

「本当か！？」

”さっきも言ったろう。二度も言わない。”

俺は心底嬉しかった。

俺と一緒に夢を叶えようとしてくれる人・・・いや、刀か。それがいたから。

”ま、その前に軽々しく人を殺そうと考えない事。もう少し同じ人間として受け止めてその命の重さを弁えた上で・・・殺せ.”

「殺してもいいのかよ！？」

俺は勢いあまりツッコンでしまった。

”やっと元に戻ったか。”

まさか・・・

「お前ワザと・・・」

”いや、本気だ。”

「そうですかぁ～。」

”これを誓えるか？”

俺の答えは一つ。

「当たり前だ！！」

”分かった。俺もお前に力を貸そう。”

そう言うと俺の持つ一刀が緋色に輝く。
”今からこの空間を元に戻す。俺を抜く準備をしておけ。”
「あ、あぁ。」
俺は言われた通り柄を握り抜刀の構えをする。
なんか行き成り緊張してきたぁぁぁぁぁ！！
”いくぞ。３、２、１、０。”
兵士の右腕が勢いよく振り下ろされる。
「あぁぁぁぁぁぁぁ！！」
俺は力強く刀を抜いた。
ザシュッ
相手の体を切り裂く感覚が手に広がる。
・・・ドサッ
相手が俺に倒れ掛かってきた。
ビックリしたが、すぐ正気に戻る。いつもと違ったのはあの錆びた鉄の匂いがしなかった。
兵士を地面に下ろし、握っている刀を見る。
その刀はもう一刀の刀と対照的に激しく燃え盛るような緋色の光を放っていた。

３６話：キャラ紹介（前書き）

続きます。

36話：キャラ紹介

作者「どうもー！作者でぇ～す？今日はお話しを休んでこの作品に出てくるキャラクターを紹介したいかと思います～！」

『わー！！』

作者「それでは早速やって行きましょう！！まずはこの方！この作品の主人公！！丘崎丈人君です！！」

丈人「ど、どうも／／／」

作者「お久しぶりだねぇ～！！」

丈人「そうっすね！」

作者「後で話しの場を設けるのでまずはモニターにあるプロフィールをご覧下さい。」

名前：丘崎丈人（おかざきたけと）
性別：男性
年齢：17
誕生日：4月12日
趣味：妄想、音楽鑑賞
特技：イメージを人より高度にできる。
使用武器：刀
好きな・・・：音楽、ご飯、自分の世界（そうぞう）
嫌いな・・・：悪人、トマト

主人公
空想や妄想が大好きな少年。
容姿は、髪が黒、目は茶色。どちらかと言えば細身な方だ。
家や学校で暇な時間があれば自分の妄想に入り来む。
特技の通り、イメージ力が凄いため昔から美術や、家庭科、技術などは全て5。その代り他の教科は普通。
担任は「もう少し先生と会話を増やして欲しい。」と語る。
部活動は一年の頃は水泳部に所属。しかし、二年生になったら退部。理由は泳ぐ度に何故か足を攣ってしまうからだ。そのため、ろくに部活動を出来ず一年を過ごした為、退部したのだ。
作者によって異世界に送り込まれる。その際に授かった能力、イメージを物体化、具現化させる能力と伝説の具現士レトン愛用の刀を得る。
只今敵兵と戦闘中。

作者「はい。まず丈人君は言いたいことあるかな～？」

丈人「金沢てめぇぇぇぇぇ！！」

作者「担任兼ね国語教師の金沢先生のことですね？」

丈人「あぁ。アイツいつも俺を変な眼で見やがるんだ。」

作者「成る程。何となく気が合いそうですね。」

丈人「なんで！？」

作者「さ、て、と。次の方は・・・」

丈人「無視かよ！！」

作者「さっきも言った通り話しの場を設けるんで勘弁してちょ！！ってことで、二人目の方はヒロインのリク・アナスティアさんです！！」

リク「よ、よろしく。」

丈人「あ、リクさん。」

リク「あぁ、久しぶりだなぁ。私ヒロインだったのにこの頃出番が・・・」

丈人「ま、まぁまぁ！！」

作者「大丈夫！！これを機会に次からドンドン出していくから！！」

リク「本当か？よろしく頼むよ。」

作者「任せてちょうだい！！それではまずはモニターにあ（ｒｙ」

名前：リク・アナスタシア
性別：女性
年齢：１６
誕生日：５月２９日
趣味：散歩
特技：魔術５式
使用武器：ランス、名称ゲイ・ボルグ
好きな・・・：住民、子供

だっけか

嫌いな・・・・オルティガ

ヒロイン
エルストリアの騎士団隊長。
容姿は、髪が金、目が碧。背は丈人より少し小さい。
異世界で丈人の存在を一番初めに知った人。
デガルドの家から出勤している。何故デガルドの家から出勤しているかと言うと、まず部屋が豊富、そして何より子供をこよなく愛している正義のお姉さんだからだ。
丈人をこの頃意識している。
特技の魔術５式とは魔術、つまり魔法を一気に５つ出せる難易度が非常に高い。
只今、帰宅途中。

作者「はい。何か言いたいことは？」

リク「年齢があやふやだ！！ハッキリさせて欲しい！！」

丈人「あれ？俺を意識ってもしｋ・・・」

リク「違う！！お前の考えていることとは別だ！！」

丈人「ですよねぇ～。」

作者「いいねぇ～青春だねぇ～。」

丈リ「違う！！」

作者「はいはい。それでは次の方は、身体能力が他より長けているネルオーネ君でーす！！」

ネル「・・・」（なんで俺まで・・・）

丈人「ネルもか。」

リク「そうガッカリするな。」ニヤニヤ

ネル「楽しそうにするな。」

作者「さて！早速プロフィールに、ドン！！」

名前：ネルオーネ
性別：男性
年齢：１７
誕生日：９月１０日
趣味：観察
特技：瞬撃
使用武器：ダガー
好きな・・・：高いところ、パン
嫌いな・・・：兄

もう１人の主人公と言っても過言ではない
女王様直属の部隊、クゲンの隊長。
魔術と武術、どちらと聞かれると断然武術派の人。その印に武術家の憧れ瞬撃を覚える。
部隊では、どちらかと言えば厳しいがプライベートや任務遂行中は隊員に気を遣う。
オルティガに兄がいるらしい。昔は仲が良かったらしいが今では縁を切り対立している。

只今、任務中。

作者「さて。何か言いたいことは？」

ネル「あいつの事は思い出したくもない。」

丈人「へぇ～ネルに兄貴いたんだぁ～。リクさん知ってた？」

リク「いや、何も話さないから。」

ネル「話したくないことだってある。察しろ馬鹿。」

リク「なっ！？」

作者「さて、喧嘩がおっ始まる前に次行きましょう！！次は我らが守護神！デガルド・シャープネス！！」

シーン・・・

作者「あれ？ええとなになに？少し時間がかかるらしいので次の方を先に紹介してください。・・・なんでぇ～？」

丈人「だとしたら、次は誰なんだ？」

ネル（早く終わってほしい・・・）

作者「・・・・・・・スカリオ・ビフォルマ・・・・・」

丈人「・・・チェンジは？」

作者「ないだろう・・・しょうがないさっさと終わらせよう。」

リク「そうだな。」

作者「それでわどうぞ。」

スカ「ジャジャーン！！皆のヒーロー、スカリオ・ビフォルマ参上！！」

作者「それではモニター、ドン。」

スカ「なんか早くない！？」

丈人「気のせいだよ。」

名前：変態
性別：ホモ
年齢：２１
誕生日：１月２７日
趣味：丈人弄り。
特技：無詠唱
好きな・・・：丈人
嫌いな・・・：バカ

驚異の変態

以上。

スカ「なんか扱いが酷い！！」

３７話：キャラ紹介２（前書き）

次話から話を進めていきます！！

37話：キャラ紹介2

作者「さて！！後半に入ります！」

丈人「んで？おっさん来た？」

作者「いえぁ～！！おっけ～。」

リク「それではどうぞ。」

デガ「おうおう！何やるんだ？」

ネル「あなたを紹介するんだ。」

デガ「何！？なんか照れるなぁ～／／／」

作者「まずトーキングはここまでにして、モニターをどうぞ！！」

名前：デガルド・シャープネス
性別：男性
年齢：５０
誕生日：６月１１日
趣味：子供と遊ぶ
特技：あやとり
使用武器：手甲（リストアーム）
好きな・・・：ミース、子供達
嫌いな・・・：オルティガ

役職は策軍師。
策を練り、それを実行させる役職。
１８と言う若さでこの役職になる。
その残る幼さと人を惹き付ける何かを持ち周りから大きな信頼を持つ。
初代具現士のレトンとも交流があったみたいだ。
初めて会った時は２１の時。その頃レトンは２９。丁度死の前年だったらしい。
武器の手甲はその時にレトンから貰ったものだ。
特技のあやとりだがレパートリーが数え切れないほどあるらしい。
唯一勝てないのは妻のミース。

作者「それでは何か言いたいことは？」

デガ「この手甲は絶対離せない、いや離したらいけない代物なんだ。」

作者「よっぽど大切なんでしょうね。」

丈人「ってかおっさん！レトンと交流あったなんて聞いてねぇぞ！？」

デガ「当たり前だ。言ってねぇもんｗｗｗ」

作者「さて、最後はそんなデガルドさんの最愛の妻、ミースさんに登場していただきましょう！！」

デガ「マジで！？」

ミー「あら？イケない事でもあるのぉ？」

デガ「ま、まさか～！」

作者「それでは、まずはプロフィールを見ましょう！！」

名前：ミース・シャープネス
性別：女性
年齢：秘密
誕生日：3月28日
趣味：料理
特技：背後立ち
使用武器：お玉
好きな・・・・：子供
嫌いな・・・・：鼾（いびき）

デガルドの妻。
年齢不詳。
好きな料理は伝統料理のダスパのギロチン煮。
食べるのはミースただ一人。
子供を愛し、デガルドを足蹴にし、皆に良い顔をしてくれる良い奥さんなのだ！！
背後立ちとはいつの間にか背後に立たれているのだ。

作者「さぁ！何か言いたいことは！！」

ミー「ダスパは凄い美味しいのよぉ～？」

デガ「それより、俺をもう少し愛してちょうだい！！」

ミー「あら？十分可愛がってあげてる気がするのにまだ足りないの？」シャキーン！

デガ「結構でした！！十分でした！満足しました！！ありがとうございます！！」

丈リネ変「・・・哀れだな・・・」

作者「さてそれではそろそろお時間です！それでは紹介を一旦終了し、話に戻ります！！これからもこの小説を」

全「宜しくお願いしまーす！！」

38話：もう1人の火達磨人間

「これが・・・」
”そう。これが俺。”
緋色に輝くその刀を見て俺は新たな発見をした。
さっきの血の臭いがしないのと、剣の周りに白い煙のような何かが漂っているのだ。

「これは？」
”斬った野郎の魂だよ。”
「マジかよ！！」
気持ち悪い！！さっきから刀を伝って、俺の腕をグルグルと回ってる。
ブンブンと振っても取れない。

”これは放っておいたら消える。それより前、来てるぞ”
へ？
「っらぁ！！」ブンッ！！
「うわっ！」
俺はそのまま尻餅をついていた。
「ハッ！単なる腰抜けかよ！しかも良い刀持ちやがって。さっさと殺して奪うか。」
おいおい！途中から本人の前で言うセリフか！？俺だって怒るぞ！？
「やられて堪るか・・・っよ！！」ブンッ！！
俺は両手で柄を持ち、大きく薙ぎ払う。
キィィィン！と相手が寸で止めに入り、刃が互いに打ち合う音が聞こえる。思い切り振ったにも拘らず簡単に止められてしまった。
相手は一気に表情を変え笑いながら剣を無造作に斬りつけてくる。
「オラオラオラ！！さっさとくたばれよ！！」ガッガッガッガ・

・・！！
俺はギリギリ見えた剣筋を刀で防ぐのみ。
相手は本当の戦場に出てる兵士だぞ！？
素人が勝てる相手じゃねぇよ！！
”早くしないとあの獣、死ぬぞ？”
「！！」
すっかり忘れていた。
瀕死のフェンリルの事を。
俺は空いた片手をもう一本の刀に手を伸ばす。
片腕で相手の攻撃を防ぐのは難しい。
そして最悪の事態が起きた。
ドサッと地面に何かが落ちる音が聞こえたのだ。それは俺の使っていた刀だ。
そう。俺はとうとう刀を飛ばされてしまったのだ。
すぐに次の一撃が来る。
「これで終わりだぁぁぁぁぁ！！」
刀を抜いて対処する隙もない。
かと言ってそのまま最期が来るのも嫌だ。
”私もこの一撃を受け止める事は難しいです。”
抜こうとしていた刀にも否定された。
こうなったら一か八か！
「良いから膜張ってくれ！！」
そう言い捨て、膜を張ってくれた事を願いながら賭けに出る。
出ろ！！
そう。俺が選んだ選択は、具現化でも、抜刀でもなく魔術だ。

具現化だと何を具現化したら良いのか思いつかず、抜刀は自信がなく、咄嗟(とっさ)に思いついたのが魔術だったからだ。

しかし咄嗟だったせいか調整をする猶予(ゆうよ)もなく、あの劫火(ごうか)出ると想像できたため刀に防ぐための膜を張らせたのだ。あの劫火の波から俺とおっさんを守ってくれたから自信があった。何より早くあいつを助けてやりたいという気持ちのほうが大きかったからだ。

案の定、激しい炎が俺の人差し指から噴き出す。

「うわ！んだコレ！！やべぇぇぇぇあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と叫び声を上げながらその炎で閉ざされた壁から見えた影が消えるのが見えた。恐らく、転げ回っているのだろう。しかし、それよりも刀が守りきってくれたのが凄くい嬉しくて胸が一杯だった。

すぐに炎の噴出を止め、相手の現状を確認する。

予想通り、俺と同じ火達磨になっていた。

のたうち回り、ジタバタと動いていた体は動くことを止めそのまま固まっていた。

俺は立ったままその炎の中の相手の最期をを看取っていた。

３８話：もう１人の火達磨人間（後書き）

これからも宜しくお願いします！！

39話：お休みなさい。（前書き）

さぁ～て、どうするもんかねぇ～ｗｗ

39話：お休みなさい。

煙と混ざりながら臭いが俺の鼻にすぅっと入ってくる。
臭いはまるで焼き肉を焼いているような臭いだった。
本当だって！！

黒焦げになったその体は、生々しい動作のまま固まっていた。
右手を何かに縋り付く様に伸ばし、左手はよっぽど熱かったのか胴体の胸の真ん中辺りに耐えるように服を掴んでいる様に見える。

当分、焼き肉類は食す気にならないだろう。

「それより！！」
飛ばされた刀を拾い、鞘に収めながら瀕死の状態のフェンリルに近づく。
「おい！！生きているか！？」
頼むから生きていてくれ！！
そんな願いをしながら、その横倒れた体の前にしゃがみ込む。
【・・・・・・フッ。逃げればよかったものを。】
「馬鹿言うなよ？俺はお前に絶対に認めてもらって仲間にするんだ！！それまで死んでもらっちゃ困るんだよ！」
【・・・無駄だ・・・なんて言っても止まらないんだろうな・・・我も貴様を殺したい気持ちはある・・・残念だ。】

「おい！残念ってどういう意味だ！！」
ふざけ半分で変なツッコミなんかできる場合いじゃない。例えば、俺を殺せなくて残念なの！？とか・・・・・・あ。

まだ息はあるみたいだが、それ以降言葉を発する事はしなかった。

「なぁ！どうにか出来ないのか！？」
俺は最後の頼みの綱の刀に話しかける。
”・・・一つだけ方法が。”
すぐに切れそうな言葉が頭に入ってくる。俺はそれを聞き逃さなかった。
「なんだ！？言ってくれ！！」
何でもいい！！救えるのならなんだってやる。
”主様は輪廻転生(りんねてんせい)をご存知ですか。”
「聞いたことはある。」
しかし、聞いた事があるだけで意味などは全く知らない。
”簡単に意味と方法をお教えします。その後にお答えをお出しください。”
「早くしてくれ！！」
”・・・輪廻転生とは大まかに言うと死んだ者の魂が生まれ変わり再び違う肉体に魂、命を宿す事を言います。”
ここで変な感覚を覚えた。

「おい待てよ。それじゃあ死ぬこと前提で話してるみたいじゃねぇか。」
そう。これじゃあフェンリルを殺す事を前提にしているように聞こえる。
”はい。その通りです。そうしないともう私たちには打つ手段はありません。”
「クッ！！」
俺は歯軋りする。
”続けます。そして、それをするにはまずフェンリルが生きている間に私で殺すのです。死んだ状態だともう二度と魂は戻ってきません。”

「・・・俺が殺すのか？」
”はい。ただ、この方法は人間にしかやって来なかったので今回は上手くいくかは保証できません。しかもそれが何時、何処で、どのような姿で生まれ変わるのかもわかりません。”
それを聞いて色々と反対念が洪水のように頭の中を渦巻いた。そんな中あいつが生き返る保証がないとか、殺すとか。俺にとって厳しい選択だった。けど他の奴に殺されるよりならとか、生き返るならとかポジティブに考えて渋々承知した。

”それでは、私を抜いて下さい。そして、突き立てるのです。”
言われた通り刀を抜き、刃を想像しそこに宿す。
時間が経つと刃も具現化され、準備が整う。
【・・・殺すか。】
フェンリルが消え入りそうに話す。
辛い・・・本当に辛い。

「なぁ・・・聞いていいか？」
声が震えた。そろそろ俺も限界を迎えそうだ。
「まだ生きたかったか？」
すると苦しそうな顔から安らかな顔になった。
【こんな世の中に未練なぞない・・・と言いたいところだが、少し人間というものに興味を持った。出来るものなら、もう少しこの世の中を見てみたかったものだな。】
「そっかぁ・・・。その気持ちを大切にな？またいつか会おうぜ？その時にはお前と干し肉を食えるようにしとくからさ。」
【フン・・・もう少し柔らかい肉が良い。あいつは硬すぎだ。】
「ハハッ。そいつはすまなかったな。・・・それじゃあ・・・そろそろ・・・助けれなくってごめんな？」
【謝るな。我はこれでもよかったと思っている。さぁ、そろそろ寝よう。またやり合う事を楽しみにしておこう。・・・】

「あぁ・・・そうだったな。それじゃあ・・・

お休み。」

俺はその後声が枯れるまで叫び、赤く腫れているだろう目で家へと戻って行った。

４０話：時過ぎて・・・季節は冬（前書き）

よし！

ストーリー構成直さなきゃ！！

４０話：時過ぎて・・・季節は冬

家に帰ると俺の顔を見て心配になったのか皆が俺に歩み寄り不安の表情を浮かべ「大丈夫？」だの「何かあったのか？」などの繰り返し。
俺は「大丈夫。何もないよ。」と言いそのまま部屋に戻り、眠りに就いた。一刻もあの事を忘れたかったのだ。俺が殺した。相手はどう思っているかは分からなかったが俺は、親近感が少しあったので結構前の自分を重ねて見ていた。そんな相手を自分の手で殺した。
そう思い深く言ってしまえば自分を殺した気分だった。
まだ手に感触が残っていた。
何人か斬ったがその感触と全く違う感覚だった。まだ手が震えてる。
俺は早く寝るために布団を深く被って寝た。
次の日から俺は人一倍働いた。
いつかまた目の前で俺が誰かが死ぬ時が来ないように誰よりも強くなるために。

その決意から何カ月が過ぎ・・・季節は冬。

あの時枯らした声は少し低くなり、前よりも野太く。あの時枯らした涙は、悲しみよりも感動や笑い泣きに。
俺は、おかしくなりそうだった頭の中をやっと整理をつけて、今ではいつも通りに過ごしている。
国も半分以上直ってきている。
おっさんとの修行も頑張ったおかげで結構体力や知識が付いてきたと思う。

具現化したマフラーを巻き、ヘンプロールを被り、手袋を履いて完全防寒対策をして外に出ていた。

「雪が好きなのか？」

後ろから聞き慣れた声がするので振りかえると、そこには何ら変わらない格好のリクさんと、半袖のシャツを着て腕を組んでいるネルがいた。

「まぁね。雪奇麗だし、星空も奇麗だからお得な感じで嬉しいしさ！」

本当の事だ。

「私は春が一番好きなんだがなぁ。」

「俺はどれも苦手だ。」

「ははっ！ネルらしいや！！」

こんな笑いの絶えない日常が続いていた。

「そうだ！雪合戦やらない？」

「なんだそれ？」「なんなのそれ？」

二人とも知らないみたいだ。

「あれだよ！！雪を丸めた球を相手にぶつける・・・まぁ、小さな戦争って感じかな？」

「楽しそうだね！」

とリクさんが笑いながら雪を丸め始める。

そういえばリクさんは喋り方が変わった感じがする。

前までは少し引き締まった男っぽい喋り方だった感じだが今では、女の子らしくなった感じがする。

・・・少しだけど。

「下らない気がするが？」

「やってみる？もし俺かリクさんが勝ったら言うこと聞いて、ネルが勝ったらなんでも言うこと聞くよ！！」

「誰がそんなかけ・・・ブッ！」パァン！！

とリクさんの投げた雪玉がネルの顔面に命中。
「やった！」
げらげらと腹を抱えて笑う。
「・・・こんの・・・野郎！」ブン！！
一瞬で作った雪玉をもの凄いスピードで投げるがそれを紙一重でかわして、空投げになったようだ。
・・・て
「ここだと近所の人達の迷惑だろうから広場に行こうか！！」
「はぁ～い。」
「ッチ！」
おい！そこ！舌打ちするな！！

４１話：もう一方と裏腹に

あのおっさん達と炊き出しをやった広場に出る。まだ昼過ぎなので老若男女が沢山居る。
え？復興か？冬に入ってしまったから作業が困難だからやらないんだとさ。しかも、日本見たいに四季があるらしいし。

「さ！早くやろう？」
もう、リクさんはやる気満々だ。
もう既に雪玉を作っていた。
「そうだね！それじゃあ、周りに気を付けてやろうね。」
俺が注意を促すと
「わかってる。」
とネルが無愛想に返事を返す。
そんなこと言って本当に合戦になったら危ないでしょうが！！

「それじゃあ、開始！！」
俺がそう言って、雪合戦が始まった。

その頃、丈人がいた世界では・・・

「えー、１７歳の少年。丘崎　丈人さんが未だ行方不明になっています。何か情報があったら・・・」ブツッ

やはり行方不明という事になっていた。

「兄貴ぃ・・・ぐすっ」

「くそっ！もう一回探して来る！！」

丘崎家は一気に精神が麻痺してきた。
海外出張の父親もその事を聞きつけ戻って来たと思ったら、出て行ったっきり帰ってこない。

母親は精神状態が不安定になり幾度となくリストカットなどの自殺行為をしようとし、更には病気にかかった。
今は病院に入院している。

政府の調べによると、誘拐、自殺、殺害などが大きな原因だとしているらしい。

そうなんです。
政府が調べているのです。
なんでかって？いきなり何の証拠もなく消えたからだ。・・・トイレの個室で。

世界的に有名な事件として取り上げられていた。

「トイレ個室少年消失事件。」
そんな題だ。
１７歳の高校生が友人にトイレに行くと言ったきり帰ってこない。
トイレに入るのを数人が目撃。
そんな中どうやってそのトイレから消えたのか不思議すぎるからだ。
聞いている人にとっては非常に下らないような事だが、ネットでその真相を突き止めようとする輩が増え、掲示板で多くの書き込みがされているが、その真相には誰も辿り着かなかった。
一度だけ異世界の話が上がったが、現実であったならなどと考え、実施したが何も起こらずその考えはなしになった。

先程から兄の嘉人(よしと)が住んでいる県内を探し回っているが、一向に見つからない。
妹の詩音は、頭の中の整理がまだつかなく、家に篭りっきりだ。
親友の要は探したり、女の子に声かけたり、探したりと繰り返していた。

そしてそんな事とは知らず、丈人達は・・・

「いけぇ！！皆の者！！奇襲じゃあ！！」

『わー！！』

「タケトてめぇ！ガキ使うとは卑怯だぞ！？」

「ネル。勝ちゃあ良いんだよ！！」

子供を使った卑怯な戦法でネルを倒そうとしていた。

ちなみにリクさんは
「お爺ちゃん達１００歳なんだー！！すごいですねー！」

「いゃいゃ、そんな事はないんじゃよ。」

などと世間話をしていた。

４２話：温かい〇〇が待っている。（前書き）

〇〇は色々ですのでｗｗ

42話：温かい〇〇が待っている。

広場がハチャメチャになり、空もすっかり夜の色。
俺らは公園で一緒に遊んでいたおっさんの子供数人を両手に連れて薄明るい夜道を歩く。

「まるで皆家族みたいだね！」
女の子が言い始める。
「だとしら兄ちゃんパパでお姉ちゃんはママだね。」
「んな！？」
顔を真っ赤にして驚いた顔をしている。
はっはっは！まさか照れているのかい？ｗｗ

「ないないない！！絶対にない！！」
そんな拒否んなくても・・・
「・・・俺は？」
あ・・・ネル気になるんだぁ～ｗｗ
「うぅ～ん。ワンちゃん！！」
プッ！！
「だぁ～っはっはっはっは！！」
俺は馬鹿笑いしていた。
「そ・・・そんな・・・。」
よっぽどショックだったのか、目が虚ろだ。
「ククク・・・良かったじゃないか犬で・・・プッ。」
リクさんが凄く反発を買うような言い方をするがネルは一向にボーっとしたままだ。
「犬・・・俺が・・・犬・・・」
そんな事を永遠に繰り返している。
そんなこんなをしていると、おっさんの家に着いていた。

子供達は握っていた振りほどき一目散に家の中に入り込む。
多分、寒かったから早く家に入りたかったんだろうが、何だか悲しい。
温かかった手の温もりが消え、冷たい風が吹きかかり、一気に手を冷やす。
「うぅ～さびぃさびぃ。俺らも入ろうぜ。」
そう言って子供を追って二人よりも先に家に入る。

温かい家で温かいご飯を食べて温かい布団に潜り込む。
何時も寝る前に寝転がった状態で軽く本を読む習慣をつけるようにしている。
前よりもずっと本が増えた。
俺も何かしら働いて金銭を稼いでいたのだ。
え？どんな仕事かって？
例えば、お爺ちゃんの肩叩きとか、お婆ちゃんの荷物持ちなどとか。
けどコツコツと貯めたお金で色々買っていたのだ。
家具は具現化すればいいんだろうけど、それだとなんかシックリこなくってさ。
だからなるべく金貯めて買うようにしていたら結構本も一緒に買ってしまっていたんだ。
「・・・ふぅ。読んだ～読んだ～。」
”今日は何を読んだんですか？”
ティアが聞いてくる。
良い忘れていたな。ティアはこの刀の事だ。
刀さんと呼ぶのは一々面倒くさいから。
なんか、話によると刀になる前は二刀は刀ではなく剣だったそうだ。
しかも、聖剣と魔剣だった物を再加工したらしい。
その時は、ミーティアと言う聖剣だったらしい。
あ、因みにもう一刀はリベリオンと言う魔剣だったらしいが、呼びにくいので縮めてティアとリベルと呼ぶようにしている。

「今日は子猫大図鑑を読んでいたよ。」
”そうですか。可愛かったですか？”
「あぁ！ものすごく可愛かったよ！！」
”そうですか。”
「そろそろ寝るよ。お前らもゆっくり休めよ？」
”あぁ。お休み。”
”お休みなさい。良い夢を。”
「お休み。二人とも。」
そう行って俺は深い眠りに就いた。

４３話：早起きは三文の徳？（前書き）

皆さんはそういう体験はありますか？
僕は一度もありませんでしたｗｗ

４３話：早起きは三文の徳？

「ふぁぁ・・・まだ５：００かよ。」
俺は何時もより早く起きたみたいだ。早起きは三文の徳と言うが本当にそうなのだろうか？
ふと思いながらも、温かくなった布団から重い体を起こし、凍ったような部屋で背伸びをする。
「たまには一人で散歩でもしようかな。」
そう決意をして防寒対策をしてまだ薄暗い外へと出た。
そんな外を照らしていたのは電灯というよりも、油灯だろう。何か明治時代を思わす感じだ。

月は沈み切り、その明かりだけを頼りに雪降る道を歩き始める。

「うわっと！ここら辺はよく積もってるなぁ。」
俺の右足が思い切り嵌りきってしまい、なかなか抜けない。

するとあることに気づく。少し手前の方に丸いボールぐらいのものが転がっている。

「ん？」
目を凝らして見るとそこにあったものは、人の顔。
・・・おい。どういうことだ？あれかな？そろそろ目がおかしくなったのかな？

「あぇえぃ・・・」
しっ喋ったぁぁぁ！？

・・・俺はそのまま頑張ってその雪の中からお爺さんを救出。
凄かった。俺も埋まってそこから少しずつ魔術を使って雪を溶かしていったんだが、それまでお爺さんが無言で俺をガン見してきたのでやり難かったんだよ。

只今、お爺さんの家にいる。
お爺さんは一人暮らしで、着ていたビショビショの服を新しい服に変えて、暖炉前で毛布に包まっている。

「お爺さんさ、何がどうなったらいなったんだ？」
俺が聞くと
「あぁ。それは・・・婆さんの形見の指輪だよ。」
「指輪？」
「そうさ。今日は婆さんの三回忌でねぇ。夜から今までずっと墓に話しかけて帰りの途中あの様さ。そしたら持っていた指輪がねぇ・・・」
そっかぁ・・・ってか、何故今まで！？
お爺さんがすごく悲しい顔をしているのを見たらどうにかしてあげたい。そんな感情が湧き上がり、
「よし！俺、探して来るよ！」
できそうにもないことを言ってしまった。

「本当かい？」
もう後戻りできない。
だったらトコトン探してやるぜ！！
「おう！任せてくれ！！」
そう言い残してお爺さんの家を飛び出し、あの埋れた場所に向かう。
「さってと。どうしようかな！」
俺は具現化したスコップを肩に担ぎない頭をフルに回転させる。
ってかスコップ使うのか？

４４話：爺さんの決意と女王の決断

「おぉ！！これだ！！・・・ありがとう。本当にありがとう。」
と泣きながらお爺さんが俺にお礼を言ってくる。
何だかこそばゆいな／／／多分今俺は顔が少し赤いだろう。ちょっと顔が熱くなるのが俺でもわかる。
「いいって！それよりもこれからは気を付けなよ？」
俺が気を付けろと言っているのは、あの雪道の時の様に埋もれるな。と言うのと、指輪の管理を気をつけろと言う事にだ。

「あぁ。分かっているよ。それより何かお礼がしたいんだが何もなくてねぇ・・・」
部屋を見渡し、何かないものかと探し始めるお爺さん。確かに言っちゃあ悪いが家の中には日用品ぐらいしかない。恐らく、復興前の幾度となくオルティガの攻撃で国を荒らされた時に何もかも無くなったのだろう。
「だからいいんだってば！俺が好き好んで勝手にやった事だからさ！」
「・・・今時、物乞いをしない子がまだいるなんてねぇ。」
そうか？
「ま、物欲しさにこんなことするほど俺は馬鹿じゃないよ。俺そろそろ行くけどさ、もし何かしらしてくれるんだったらまた来ていいか？今度会う時は恩人とか関係なくただの友人としてさ。」
おぉ！！なんか俺結構まとめるの上手くないか！？ｗｗｗ

「あぁ、いいともさ。こんな老いぼれになってもまだ友人が増えるなんて光栄だねぇ。」
「おいおい。そんなに自分を嘲（あざけ）るもんじゃないぜ？奥さん想いの良い夫じゃないか。」

「そりゃ言いすぎだよ。」ハハハハハ・・・
俺は一人、歳の離れたお爺さんの友人が出来た。
「・・・ふぅ。それじゃあ行くよ。またね！！」
そう言って暖かかった家から飛び出し、散歩を再開した。

「婆さん？ワシはまだ生きたいと思うよ。あんな場所で自殺しようなんて考えるもんじゃないねぇ。そのせいで良い若者と出会ってしまったよ。こんな自分勝手な男でごめんなぁ・・・」
そう一人寂しくなった家の中でお爺さんは亡き妻の形見の指輪にその姿を重ね合わせながら呟いていた。

その後、特に何も起きず三文の徳というのは嘘と断定しそのまま不満足の状態で家へと戻った。
するとおっさんが顔色を変えて俺を探していたみたいで俺を見るや否や、もの凄いスピードで詰め寄ってきて、いきなり
「女王様がお呼びだぞ！？」
なんて言い出す。
いきなり言われてもー。
「なんで？」
すると、おっさんはそのまま
「いいからさっさと行け！！」
なーんて怒鳴り散らして俺を急かす。
「わーったって！」
俺は進まない足取りを無理にでも玄関へと向けて歩き始める。

王の間へ入り、一番奥にいる女王様へと近づく。

「何か後ようですか？」
俺がそう言うと女王様は真剣な顔つきでそっと口を開く。

「これから、他国との全面戦争をしたいと考えています。」
と冷静に告げる。
俺は唖然としたまま大口を開けて目を見開いていた。
何だってぇぇぇぇぇぇ！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9809w/

空想大好き具現士様！！

2011年11月22日04時06分発行